

九州横断道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書

曲 遺 跡

1996

大分市教育委員会

九州横断道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書

曲 遺 跡

1996

大分市教育委員会

序 文

本書は大分自動車道建設に伴う埋蔵文化財の調査報告書であります。

各調査区の西側を流れる大分川は肥沃な沖積平野を形成し、太古から人々に生活の舞台を提供してきました。流域に分布する多くの遺跡は脈々と続く郷土の先人達の息づかいを今に伝えてくれます。曲遺跡においても、弥生時代および江戸時代の土器や遺構が発見されております。

本書に収録された資料が郷土大分の歴史学習に十二分に活用され、埋蔵文化財に関する理解と認識が深まり、さらに文化財保護意識の高揚に基づく文化的で豊かな市民生活創造の一助となれば幸いです。

本書の発刊にあたり、ご配慮・ご協力を頂きました日本道路公団、大分市都市計画部街路課高速道路対策室に対し、衷心より謝意を表しますとともに、発掘調査ならび資料整理にご協力くださいました関係各位にたいしまして心から感謝の意を表する次第であります。

平成8年3月29日

大分市教育委員会

教育長 清瀬和弘

例　　言

1. 本書は九州横断自動車道建設に先立って実施した大分市曲に所在する曲遺跡他の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理業務は大分県教育委員会からの委託を受け大分市教育委員会が行った。出土遺物および関係資料は大分市教育委員会が保管している。
3. 発掘調査は高橋徹、塔鼻光司が担当し、報告書の作成は遺物実測、製図、写真撮影など西嶋スミエ、淵野玲子、井口あけみ、秦由美子の協力を得て、高橋が行った。曲遺跡A地区のプラントオパール分析は大分短期大学の佐々木章教授に依頼し、その報告は本書第IV章に掲載している。校正は井口が行った。
4. 本書の編集、執筆は井口の全面的な協力を得て主として高橋が行った。

本文目次

序 文	
例 言	
第Ⅰ章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査組織	1
第Ⅱ章 調査遺跡の立地と環境	3
1 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の成果	6
1 調査概要	6
2 曲遺跡の調査内容	7
1) A地区	7
(1) 遺構	8
(2) 遺物	17
2) C地区	36
第Ⅳ章 曲遺跡土壤のプラントオパール分析により推定した埋没水田土層	38
第Ⅴ章まとめ	42
第VI章付論	45

挿図目次

第1図 大分道調査地点位置図(1/50000)	2
第2図 曲遺跡の位置と周辺の遺跡(1/25000)	4
第3図 A～E地点調査位置図(1/10000)	6
第4図 曲遺跡調査位置図	7
第5図 曲遺跡A地区遺構平面図(1/120)	8
第6図 A地区土層図(1/20)	9
第7図 曲遺跡A地区出土土器実測図1(1/3)	10
第8図 曲遺跡A地区出土土器実測図2(1/3)	11
第9図 曲遺跡A地区出土土器実測図3(1/3)	12
第10図 曲遺跡A地区出土土器実測図4(1/3)	13
第11図 曲遺跡A地区出土土器実測図5(1/3)	14
第12図 曲遺跡A地区出土土器実測図6(1/3)	15
第13図 曲遺跡A地区出土土器実測図7(1/3)	16
第14図 曲遺跡A地区出土土器実測図8(1/3)	17
第15図 曲遺跡A地区出土土器実測図9(1/3)	18
第16図 曲遺跡A地区出土土器実測図10(1/3)	19
第17図 曲遺跡A地区出土土器実測図11(1/3)	20

第18図	曲遺跡A地区出土土器実測図12(1/3)	21
第19図	曲遺跡A地区出土土器実測図13(1/3)	22
第20図	曲遺跡A地区出土土器実測図14(1/3)	23
第21図	曲遺跡A地区出土土器実測図15(1/3)	24
第22図	曲遺跡A地区出土土器実測図16(1/3)	25
第23図	曲遺跡A地区出土土器実測図(1/4)	26
第24図	曲遺跡A地区出土土器実測図(1/3)	26
第25図	曲遺跡C地区造構平面図(1/400)	36
第26図	曲遺跡C地区1号溝出土遺物実測図(1/3)	37
第27図	プラント・オパール定量分析手順	39
第28図	プラント・オパール密度から推定した植物量	40
第29図	下志村遺跡出土遺物実測図(1/4)	46
第30図	下志村遺跡出土遺物実測図(1/4)	47
第31図	下志村遺跡出土遺物実測図(1/4)	48
第32図	下志村遺跡出土遺物実測図(1/4)	49
第33図	下志村遺跡出土遺物実測図(1/4)	50
第34図	下志村遺跡出土遺物実測図(1/4)	51
第35図	下志村遺跡出土遺物実測図(1/4)	52
第36図	下志村遺跡出土遺物実測図(1/4)	53
第37図	下志村遺跡出土遺物実測図(1/4)	54
第38図	大分第一・二地域の弥生土器編年(壺)	56
第39図	大分第一・二地域の弥生土器編年(甕)	57

表 目 次

表1	A地区出土遺物観察表	27
表2	A地区出土遺物観察表	28
表3	A地区出土遺物観察表	29
表4	A地区出土遺物観察表	30
表5	A地区出土遺物観察表	31
表6	A地区出土遺物観察表	32
表7	A地区出土遺物観察表	33
表8	A地区出土遺物観察表	34
表9	A地区出土遺物観察表	35
表10	C地区出土遺物観察表	37
表11	植物体中の珪化機動細胞密度	38
表12	曲遺跡土壤のプラント・オパール分析結果から推定した埋没植物体総重量	41

写 真 図 版

図版1	曲遺跡A地区全景図	59
図版2	曲遺跡A地区溝1造構(上)、溝1出土木材(下)	60
図版3	曲遺跡A地区溝及び土層(上)、円形土坑埋土(下)	61
図版4	曲遺跡C区全景	62
図版5	曲遺跡C区1号・2号溝状造構(上)、1号溝状造構(下)	63
図版6	曲遺跡C区1号溝出土遺物	64
図版7	曲遺跡出土遺物	65
図版8	曲遺跡出土遺物	66
図版9	曲遺跡出土遺物	67
図版10	下志村遺跡出土遺物	68
図版11	下志村遺跡出土遺物	69
図版12	下志村遺跡出土遺物	70
図版13	下志村遺跡出土遺物	71
図版14	下志村遺跡出土遺物	72

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯

九州横断大分自動車道は長崎、佐賀、福岡、大分を結ぶ高速自動車道である。1973年の佐賀県鳥栖市～大分県日田市間を嚆矢として、工事が開始され、事前の発掘調査も各県の教育委員会が主体となり実施されてきた。現在大分自動車道の一部は既に共用が開始されており、大分市域にかんしても大分インターチェンジまでの開通が実現している。

その先の大分～米良間については、順次建設が計画されており、路線予定地の一部に周知遺跡が存在するため、大分市教育委員会では大分県教育委員会の委託を受け、平成5年度に試掘調査を実施した。遺跡の存在が確認された地区については平成6(1994)年度に本調査を実施した。

2. 調査組織

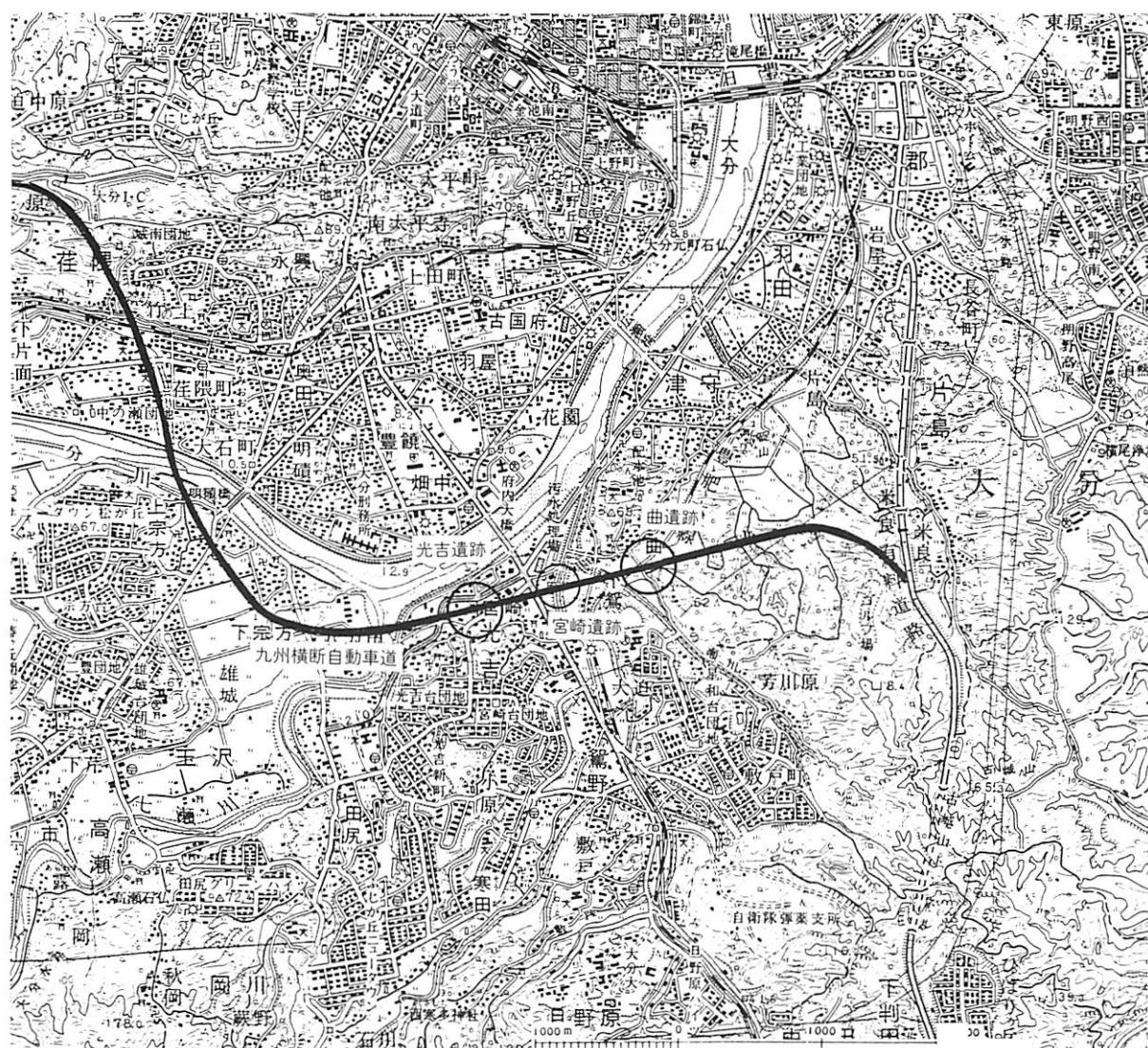
調査主体者	大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘		
調査指導	下條 信行（愛媛大学教授）		
	佐々木 章（大分短期大学助教授）		
事務局	大分市教育委員会文化振興課		
内田 司	(同上	参事)
工藤久典	(同上	文化財室長)
秦 政博	(同上	同 主査)
堀 和則	(同上	同 専門員)
佐藤良蔵	(同上	同 指導主事)
佐藤宏昭	(同上	同 主任技師)
讃岐和夫	(同上	同 技師)
後藤典幸	(同上	同 主事)
坪根伸也	(同上	同 技術員)
池邊千太郎	(同上	
徳丸ひとみ	(同上	
塩地潤一	(同上	
大分市都市計画部街路課			
加藤和夫	(大分市都市計画部街路課課長)		
橋本利政	(同上	課長・平成7年度～)
藤田壽生	(同上	課長補佐)
油布隆徳	(同上	高速道路対策室長)
奥 正克	(同上	同主査・平成7年度～)
後藤 肇	(同上	同主任)
本多隆司	(同上	同 技師)

調査担当 高橋 徹（大分市歴史資料館主幹・平成6年／大分県教育委員会・平成7年～）
塔鼻光司（大分市教育委員会文化振興課文化財室主任技師）

調査作業員 江藤艶子・児玉トミ子・江藤サカエ・増本文子・江藤美代子・小野 菊・丸井和子・山田ツル子・矢野清隆・常行幸子・長岡国子

整理作業員 二宮恵子・原田和代・東 冬子・岡村さゆり

なお、木村幾多郎（大分市歴史資料館館長）、大分県教育委員会文化課の各氏に調査上の助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。



第1図 大分道調査地点位置図(1/50000)

第Ⅱ章 調査遺跡の立地と環境

1 歴史的環境

調査を行った光吉、宮崎、曲地区は大分市街地の南部に位置する。

大分市は北は別府湾に面し、東に九六位山、西に障子岳・高崎山、南に天面山・靈山などの山岳を配した、面積259.59km²の地域である。その市域は各山稜から派生する低丘陵・台地および大小の河川などで画された小単位の自然地形によって成り立っている。由布山系を源流とする大分川は、賀来川や七瀬川を併せて川幅を広げながら南大分地区を東流し、別府湾に流れ込む。その両岸には沖積平野が形成されている。

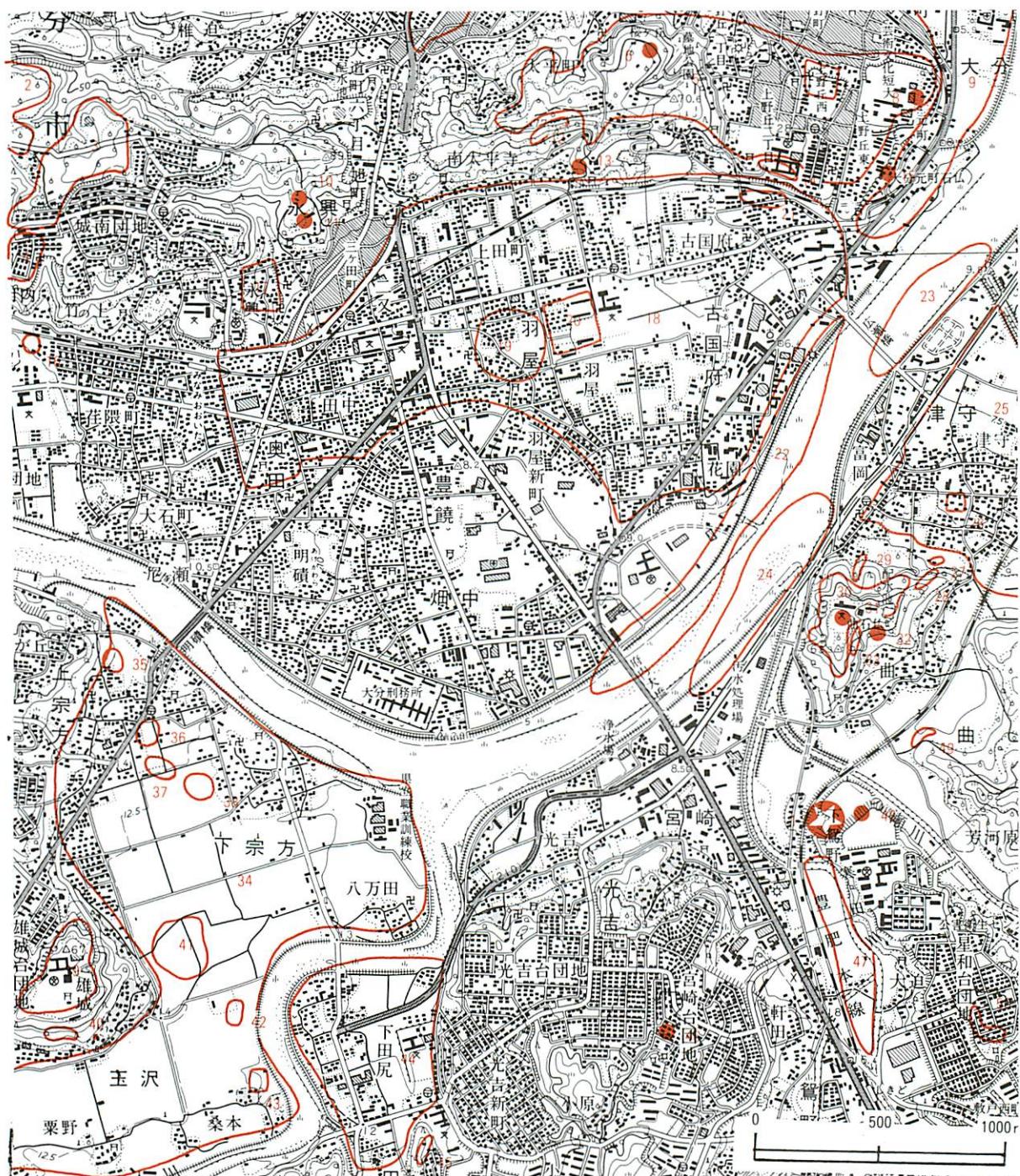
市の東部を北流する大野川は、大分県南部の山岳地帯を水源とする一級河川で、戸次・判田・松岡地区を北流し、鶴崎地区を河口として別府湾に到る。

大分川流域の段丘、平野、台地には旧石器時代から今に至るまで多くの遺跡が確認されている。旧石器時代の遺跡としては庄ノ原遺跡がある。縄文時代の遺跡としては野田山遺跡で早期の無文土器や炉穴、庄ノ原遺跡では早期押型文土器が出土している。縄文後期では大分川河川敷周辺や羽田遺跡、牧遺跡等で磨消縄文土器や土偶、石棒等が採集されている。下郡遺跡群でも包含層としての出土状況であるが、非常に良好な縄文後期の土器片が調査されている。縄文後期の土器片は少量ながらも、府内城跡や都町の「府内城・城下町跡第7次調査地点」の周辺からも検出されており、沖積地の微高地や台地上だけでなく、当時の海浜にも縄文人の生活が存在したことを物語っている。

近年の調査では、大分川下流域の縄文晚期の遺跡も知られるようになっている。庄ノ原遺跡では晩期後半無刻目突帯文土器（上管生B式）が確認されており、他にも同式の土器が二反田遺跡や荏隈杉下遺跡で発掘されている。

弥生時代早期にあたる、刻目突帯文甕および浅鉢（下黒野式）を出土する遺跡としては、深町遺跡、植田市遺跡があり、弥生前期以降は枚挙に暇のないほど関連の遺跡が増える。雄城台遺跡は独立丘陵上に立地する地域の拠点集落であり、一時中断はあるものの、弥生前期から古墳初頭まで続く。方格規矩鏡や雲雷文内向花文鏡片および県下で初例の巴形銅器が出土している。花園遺跡（中・後期）、羽田遺跡（同上）、下郡遺跡群（前期～終末・古墳時代・古代～中世）、賀来中学校遺跡（後期から古墳時代・中世）のうち、下郡遺跡群は区画整理事業に伴う調査により各時代にわたる遺跡が明らかにされつつある。大量の豚（？）の頭骨や木製品、青銅製ヤリガンナ等が発見されている。台地上の集落としては、先の雄城台遺跡と同様、中国製の銅鏡片を出土した守岡遺跡・尼ヶ城遺跡などがあり、弥生終末から古墳初頭にかけて集落の廃絶が認められることからも、豊後弥生社会の終焉を示唆する遺跡として重要である。青銅器としては他にも滝尾岩屋遺跡で細形銅戈、松岡京ヶ尾遺跡で中広銅矛、玉沢地区（条里跡）遺跡で弥生時代小型 製鏡が出土している。

古墳時代の遺跡としては、大分川を南に見下ろす庄ノ原から上野ヶ丘台地に蓬萊山古墳（前方後円墳：四世紀後半）・大臣塚古墳（前方後円墳）が、大分川に注ぐ七瀬川流域に御陵古墳（前方後円墳：五世紀初頭～前葉。消滅）があり、大分郡地域の首長墳と考えられている。庄ノ原台地の北側には船載三角縁神獣鏡と小型 製鏡を出土した亀甲山古墳が存在したがすでに消失している。本墳は円墳として理解されているが、長大な箱式石棺や三角縁神獣鏡などの副葬品からみて、前方後円墳であった可能性を残している。首長系列の前期古墳に後続する大分川流域の古墳としては、世利門古墳以外はめぼしい古墳が見あたらない。世利門古墳はの主体部は棟のある特異な石棺で臼杵地方の石棺工人が



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	曲遺跡	14	岩屋寺横穴墓群	27	鳥越伽藍石仏	40	雄城台下横穴墓群
2	庄ノ原遺跡	15	元町石仏	28	曲横穴墓群	41	深町遺跡
3	城南遺跡	16	荏隈杉下遺跡	29	滝尾守岡横穴墓群	42	植田平石遺跡
4	尼ヶ城遺跡	17	永興遺跡	30	守岡遺跡	43	桑本館跡
5	上野遺跡群	18	古国府遺跡	31	守岡古墳	44	下田尻地区条里跡
6	飯盛塚古墳	19	羽屋園遺跡	32	曲石仏	45	東山田横穴墓群
7	上野大友館跡	20	金剛宝戒寺跡	33	曲平横穴墓群	46	千人塚古墳
8	大臣塚古墳	21	岩屋寺遺跡	34	玉沢地区条里跡	47	鴛野遺跡
9	中世大友城下町跡	22	大分川河川敷1遺跡	35	北の後遺跡	48	芳川原古墳
10	千人塚	23	大分川河川敷3遺跡	36	六反田遺跡	49	一の迫横穴墓群
11	弘法穴古墳	24	大分川河川敷2遺跡	37	山伏田遺跡	50	穴井下横穴墓群
12	南太平寺横穴墓群	25	津守遺跡	38	二反田遺跡		
13	伽藍石仏	26	松平忠直津守館跡	39	雄城台遺跡		

第2図 曲遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25000)

関与したものであろう。6体の人骨が埋葬されていた。多葬埋葬の例として、再検討が必要な古墳である。後期の古墳としては、弘法穴古墳、丑殿古墳（県指定史跡）、千代丸古墳（国指定史跡）という石室古墳が代表的なものである。以上三基の石室墳は、蓬莱山古墳を中心にして東西に2.3kmほど離れて分布している。三基とも石室構造は单室の横穴式石室で、丑殿古墳には家形石棺が、千代丸古墳には奥壁に横架された石棚前面に線刻画があることで知られている。丑殿古墳、千代丸古墳は六世紀後半～七世紀初頭頃に営まれた在地首長墓であることは疑いない。

豊後の地域ではこうした横穴石室は珍しく、5世紀末から6世紀前半になると、台地や丘陵崖面に掘り込まれた横穴墓が出現してくる。それらは3～5基を一単位にして数単位が群として営まれており、大分市域においてその分布を見ると、「豊後國風土記逸文」や「和名抄」から推察、比定されている古代の「郷」域に対応しているように思われる。古代の行政区設定にあたっては、それに先行する古墳時代の、政治的、文化的、経済的、すなわち人文地理的な最小地域単が基本となったことを示唆している。横穴墓を営んだ在地集団の占有区間が上記の最小単位に反映しているようである。

市内全域に広範囲に営まれていた横穴墓は、薄葬令の行われた7世紀の中頃を境に姿を消し、大分の地にも律令時代の新たな文物が散見されるようになる。この時期の首長墳としては三芳にある古宮古墳がある。これは方形の墳丘と畿内系の終末古墳に類似する横口石棺を持つ7世紀中頃前後の古墳で、「日本書紀」に記載された大分君恵尺・同稚臣（壬申の乱において大海人皇子方として軍功をあげる。）に關係の墳墓という解釈が提出されている。

律令期になると、市域は「和名抄」が記載する大分郡中の阿南郷・植田郷・津守郷・桂隈郷・判太郷・笠和郷・跡部郷・笠祖郷・神前郷、海部郡佐加郷・佐井郷・丹生郷にあたる。豊後國府の位置は、古代の桂隈郷内、現在の古国府から羽屋、および上野丘台地の地域に比定する意見が主流であるが、まだ発掘調査による実証はなく今後の発掘調査が待たれる。大分川流域の条里は植田・賀来・南大分の三地区に想定されているが明確な遺構は未検出である。

豊後國分寺は国分に位置する。国分尼寺の比定地は未詳であるが、国分寺跡北西端での発掘調査に伴い「尼寺」の字を記す墨書き土器が発見され、この付近であった可能性が強まっている。関連する遺跡としては永興寺や金剛宝戒寺周辺に存在する古寺の遺構があり、八世紀を下らない瓦が採集されている。

市域には、高瀬、岩屋寺・元町等磨崖仏が多く、曲にも森岡山の丘陵中腹を穿った石窟内に磨崖仏が存在する。これは如来形坐像や持国天、多聞天、阿弥陀三尊像で平安末期および鎌倉時代の作と考えられている。森岡山の丘陵上には前述した守岡弥生集落のほかに鎌倉～室町時代の堀立柱建物跡が検出されており、中世山城跡と認識されている。「豊後國志」にいう「守岡堡」か。天正14年12月12日（1586）、大友義統を追う島津軍は当地で泊し、翌日府内に入城したという。中世の曲付近は津守庄に含まれ、勾六郎およびその一族の所領として推移していたが近世初期正保14年（1647）の正保郷帳には松平忠直領および高松藩松平忠昭等の領土とされており、元禄14年（1701）の元禄郷帳では幕府領として天保5年（1834）の天保郷帳には延岡藩領と記されている。

第Ⅲ章 調査の成果

1 調査概要

調査対象範囲は光吉地区、宮崎地区、曲地区の3地域に及ぶ。これらの内、光吉・宮崎地区についてはトレンチによる遺構の確認を行ったが、明確な形での遺構の確認はなされていない。遺構は曲地区において確認されており、この地域についてのみ本調査を実施した。以下に地区別の概要を記す。

光吉・宮崎地区

当地域を便宜的に5地点に分け西側から順にA～E地点とし試掘調査を実施した。

A地点 橋脚建設予定地を中心にトレンチ調査を実施したが、遺物、遺構は検出されなかった。

B地点 当該地区は調査時点では水田として利用されている。範囲内をトレンチ調査したが、耕作土中から近世陶磁器の小片が極少量出土するだけで、重要な遺構・遺物は検出されなかった。

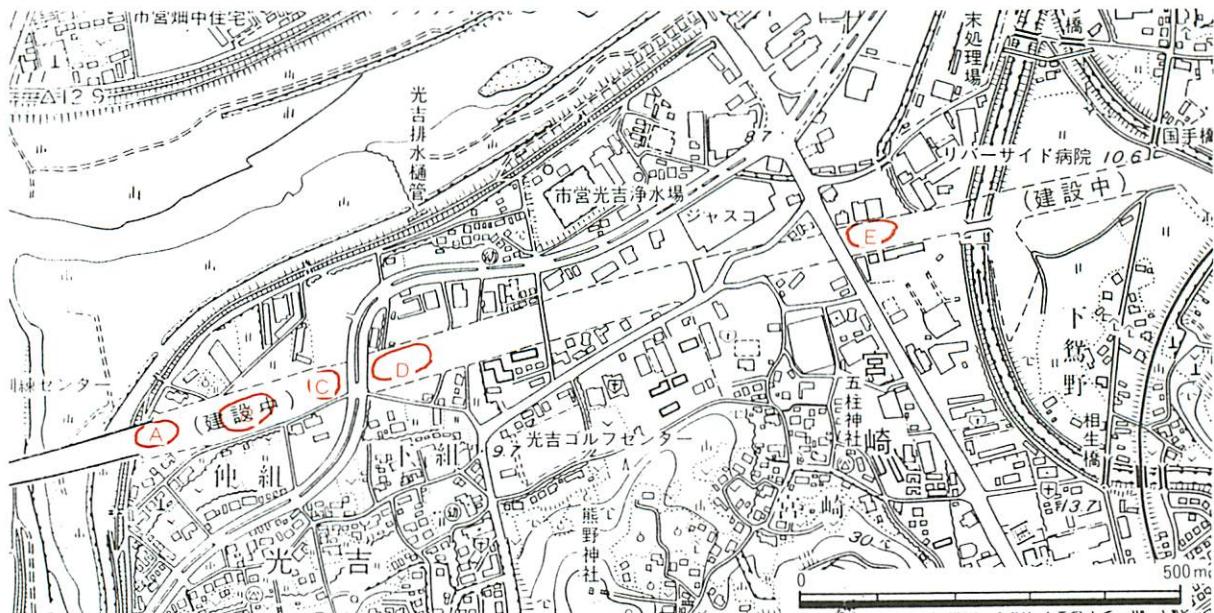
C地点 現況はホテルの建設跡地および、資材置き場である。重機を用いて表土から数十センチごとに掘り下げていった。建物の基礎工事等によって地山は搅乱されており、表土下2～3mで砂利層に到達する。この間、遺物・遺構は検出されなかった。

D地点 水田および駐車場として利用されている。トレンチ調査の結果30～40cmの表土・耕作土を除去すると水田床土に到り、これを掘り下げるとき黄褐色の粘質を帯びた地山層に達する。最上層からこの地山層の間に、遺物・遺構は未検出であった。

E地点 地下2mまで掘り下げたが遺物・遺構は未検出であった。

曲地区

曲遺跡の所在する地区は敷戸丘陵と森岡丘陵に挟まれた低地で、「大分川」支流の「一ノ瀬川」右岸に位置する。調査時点では水田および畑地として利用されていた。平成5年度に計画路線内の全域について重機と人力による試掘および分布調査を行った。対象地区内で姫島産黒曜石片、弥生



第3図 A～E 地点調査位置図 (1/10000)

式土器片、中世の土師器などが確認された。このうち遺物が確認された3地区を本調査地と定め順にA～C地区と命名し発掘を行ったが、うちB地区は既に遺構は消失しており、調査対象地域から除外した。残りの2ヶ所をA地区、C地区と定めた（第4図）。

2. 曲遺跡の調査内容

1) A地区

一ノ瀬川の右岸にあたり、曲遺跡の西端部に位置する。北西500mの森岡丘陵上には弥生時代、中世の複合遺跡である守岡遺跡がある。本地区では試掘段階で柱穴や弥生土器片が確認されており、その出土地を中心におよそ1000m²の範囲の表土剥ぎを行った。その2/3の範囲では遺物の出土が散発的かつ二次堆積であり、残り1/3において遺物が集中していた。東西約11m、南北約29mの範囲である。ここでは近世から中世にかけての水田跡（床土）が数枚確認された。土層の基本的な層序は以下のとおりである。

- | | |
|-------|------------------------------------|
| 1層 | 厚さ22cm前後。黄褐色の耕作土層。 |
| 2層～3層 | 厚さ20数cm。黄褐色・褐色土層で耕作土と考えられる。 |
| 4層～5層 | 厚さ10cm。白・青白色シルト層。 |
| 6層 | 厚さ4cm程度。黄褐色で5層の床土層。 |
| 7層 | 厚さ6～7cm。茶褐色の耕作土。 |
| 8層 | 厚さ3～4cm。黄褐色で7層の床土。 |
| 9層 | 厚さ14～16cm。茶褐色の耕作土。 |
| 10層 | 厚さ3～4cm。黄褐色で9層の床土。 |
| 11層 | 厚さ8～10cmで茶褐色。 |
| 12層 | 厚さ20～22cm。有機物を多く含む黒褐色土で土器片の包含層もある。 |
| 13層 | 赤褐色の粘質土層。その上部は12層から漸移的に変化する。 |

以上のように、地表下およそ0.9mで黒褐色遺物包含層（第12層）上面となるが、その層からは弥生中期の土器片が多く出土する。この12層を取り除くと、赤褐色の粘質土（13層）が現れる。これの本体には遺物が含まれておらず、当該地区における地山である。遺構はこの地山上面から掘り込まれている。



第4図 曲遺跡調査位置図 (1/5000)

(1) 遺構

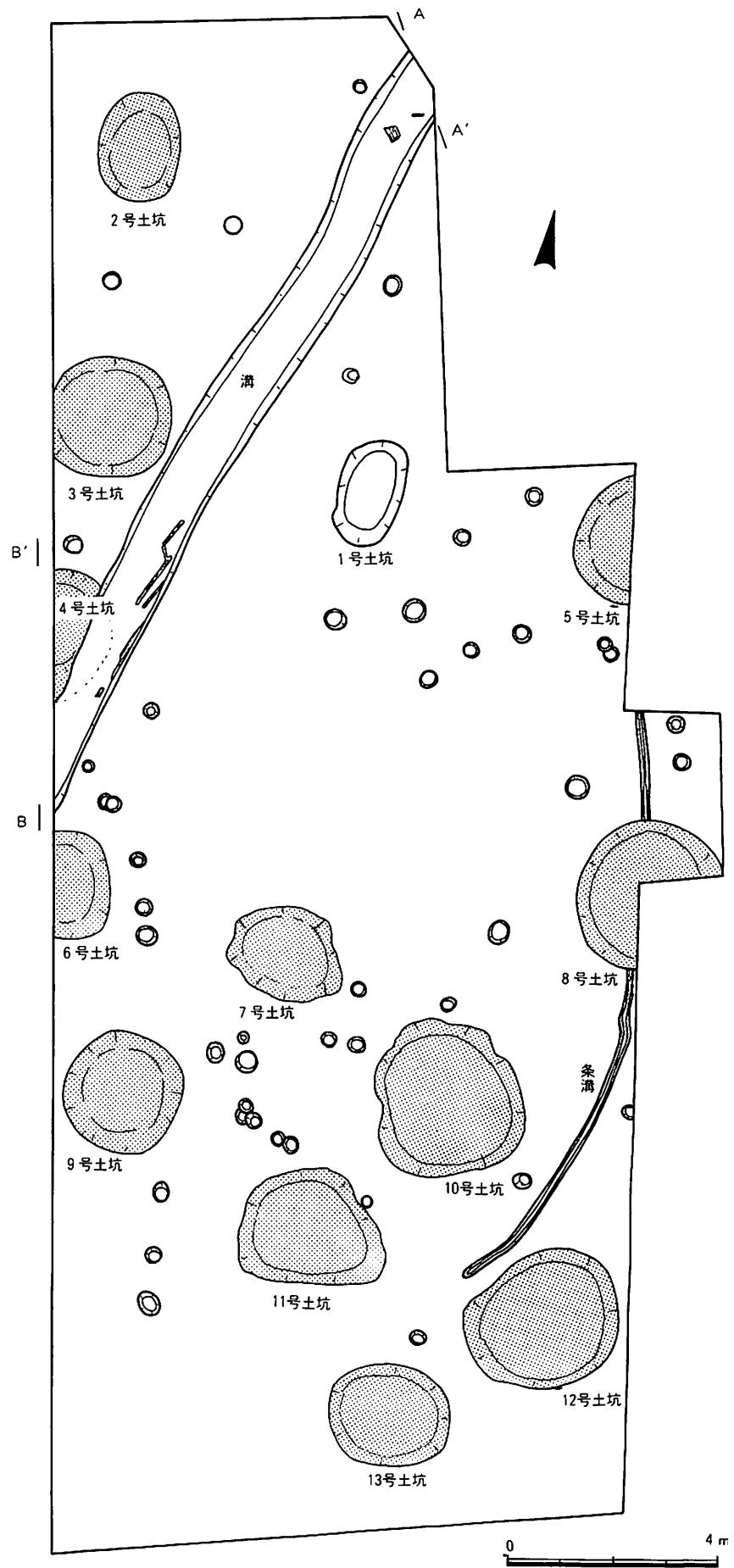
遺構としては、溝、土坑、円形小ピットが検出された。

土坑

土坑は2種類がある。1号土坑は不整椭円形の平面プランで、長軸2m、短軸1.2m、深さ約70cmを測る。13層に掘り込まれており、検出も同層上面であった。弥生中期前半以前の所産と考えられる。出土遺物は皆無である。2号～13号は検出面が不整形の円形プランで径2～3m。底面は平底のものと皿状のものがある。第6層あるいは第7層を切り込んで掘られており、底面は13層内で終了している。その上面は5層もしくは6層で覆われている。土坑内の埋土は目に付くようなブロック状の乱れも無く、整合的に堆積しており、短時間で埋め戻されたものとは考えられなかった。各土坑は比較的近接して掘られており、その配列には一種の秩序を認めることができる。こうした点が本土坑を水溜用の土坑と考え難い理由である。埋土から遺物は出土しておらず、牛馬や人の埋葬坑、堆肥坑、粘土採掘坑等を想定しても、今一つ納得できない。今後の課題としたい。

円形小ピット

小ピットは44個検出した。径20cm～40cm、深さ10cm～50cmと幅がある。柱穴と考えられるものもあるが、浅い擂鉢



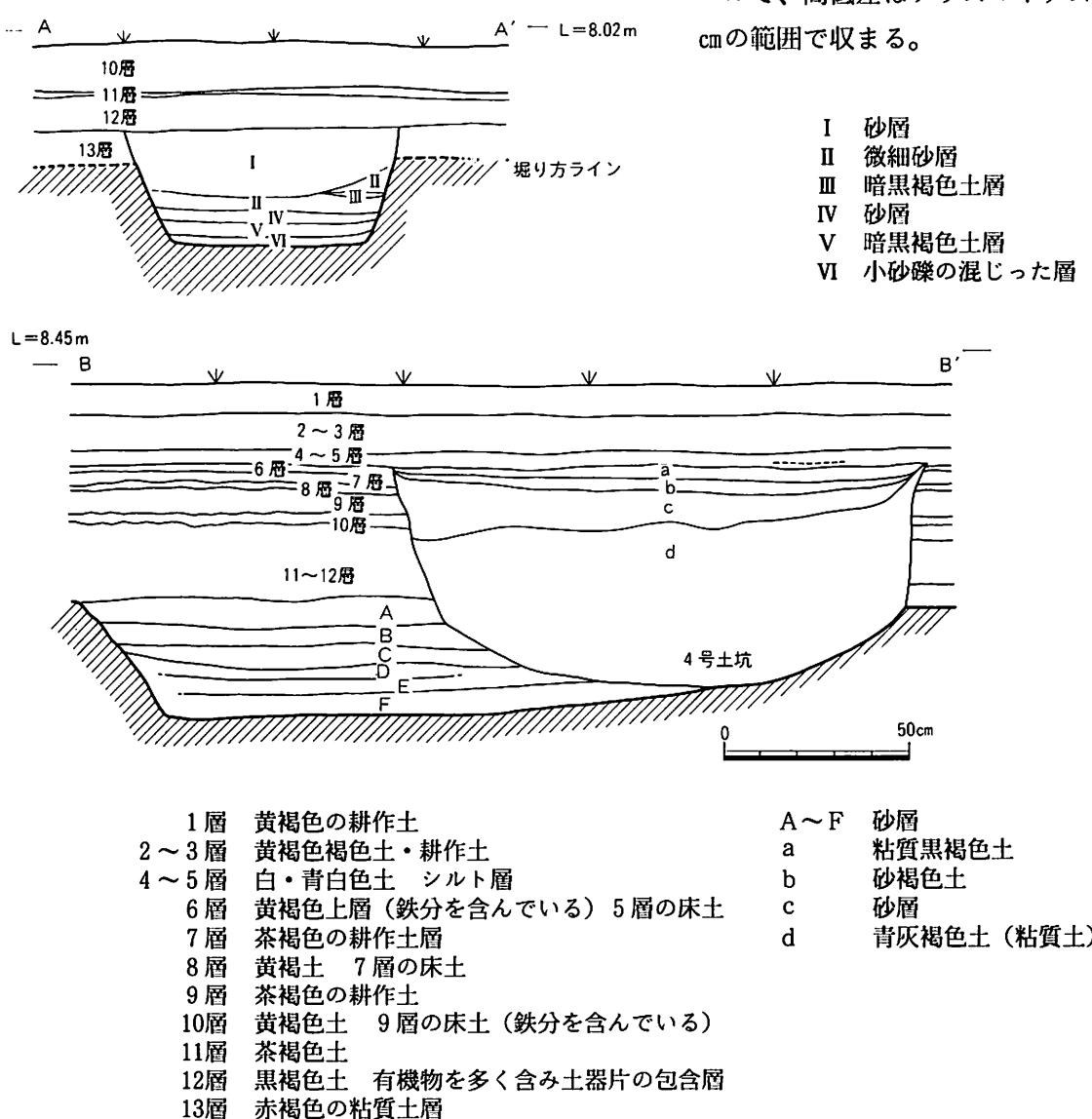
第5図 曲遺跡A地区遺構平面図 (1/120)

状のものも混じっており、必ずしもすべてが柱穴ではないと考えられる。これら小ピットの配置を検討すると円形の配列を想定し得るようでもあるが、確信を持って建物遺構を復元することはできなかった。

溝

調査区の北隅から南に向かって走る人工的に掘られた溝で、断面逆台形を呈する。上面幅1.1m、底面幅0.8m、深さ約0.7mで、検出された範囲で長さ14mほどを測る。溝内には細かい砂が層状に堆積していた。北側の横断面で観察すると、溝は基本層序13層上面から堀り込まれており、数枚の砂層によって埋没した後、12層（遺物包含層）の暗黒褐色土層で覆われている。砂層の間には、有機質を多く含む暗黒褐色や青黒褐色の粘質土が所々挟まっていた。これらの砂・土層はほぼ水平に堆積しており、自然堆積と思われる。基本的に溝内の砂層から遺物は出土しないが、溝底やこれに近いところで少數の弥生土器片と4～5点の流木が検出された。土器は細片で、図示し難いが、すべて下城式の甕の破片であった。木材は径10cm程度の枝状のものと径20cmの短木で、精査したが加工痕は認められなかった。自然流木であろう。溝底面は北端部（標高7.46m）、南端部（同7.50m）ともほぼ同一レ

ベルで、高低差はプラスマイナス2～3cmの範囲で収まる。

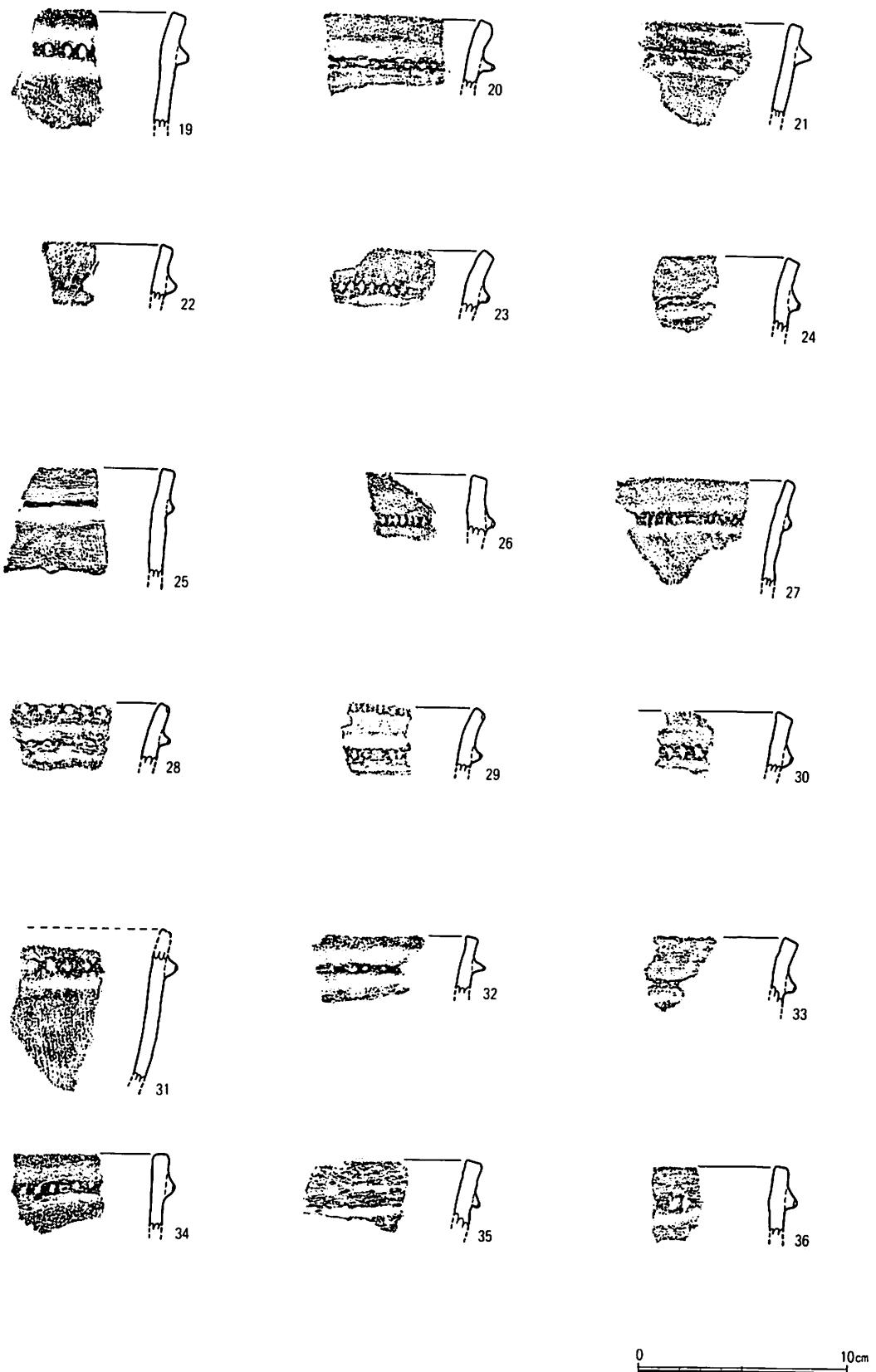


第6図 A地区土層図 (1/20)



0 10cm

第7図 曲遺跡A地区出土土器実測図1 (1/3)

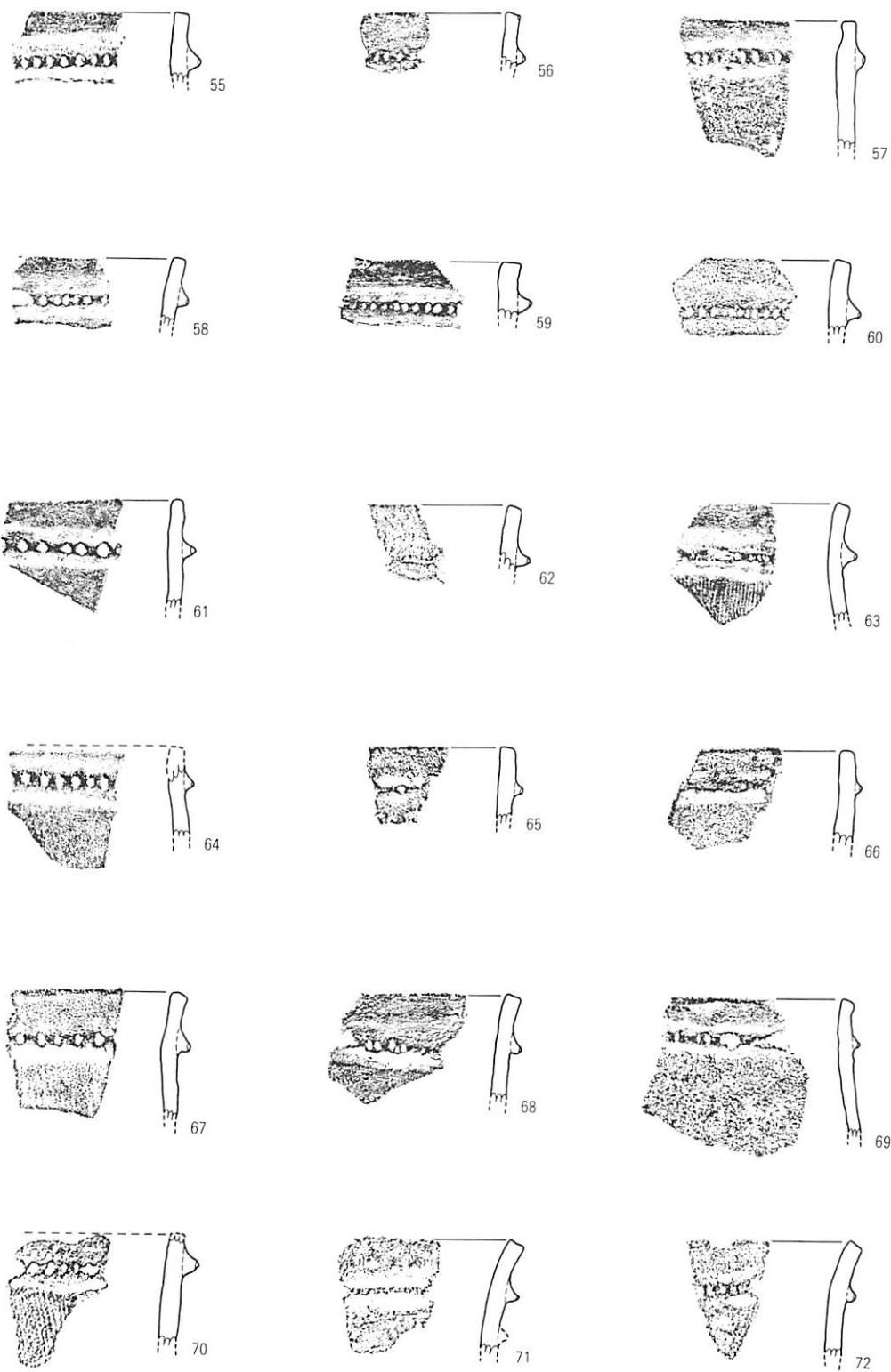


第8図 曲遺跡A地区出土土器実測図2 (1/3)



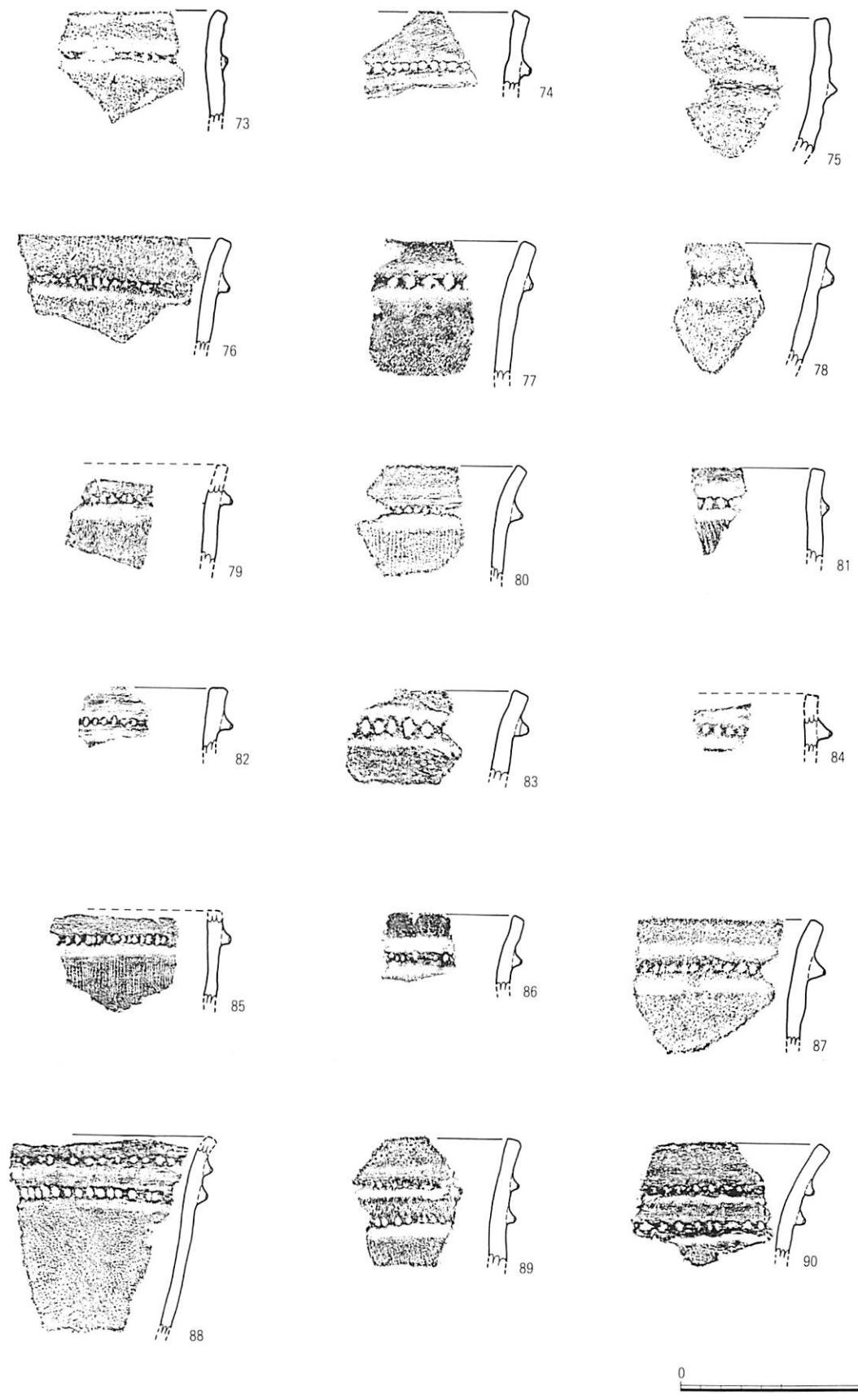
0 10cm

第9図 曲遺跡A地区出土土器実測図3 (1/3)

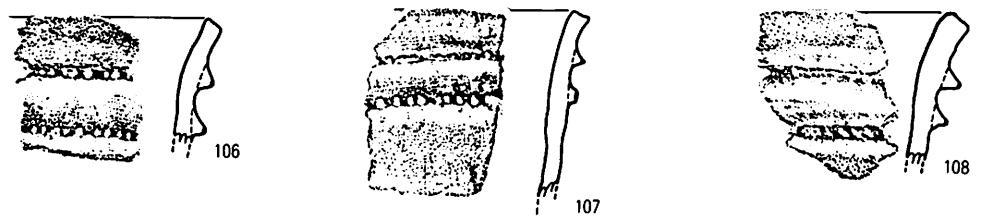
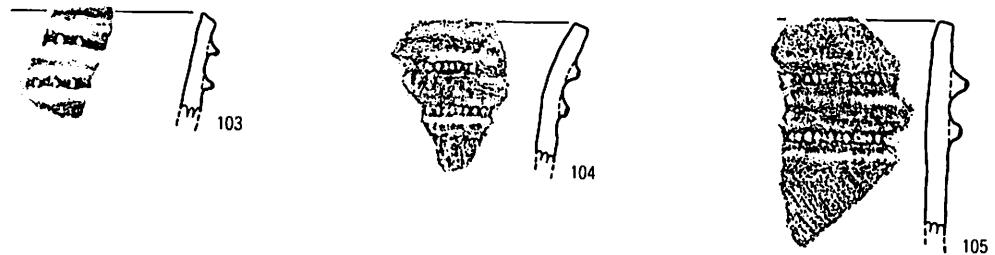
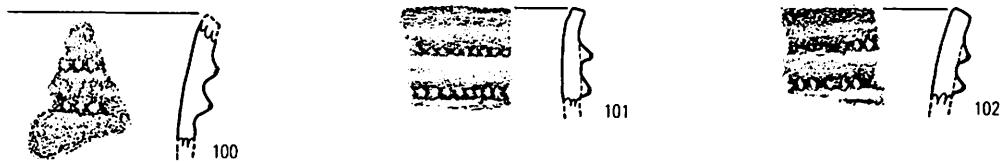
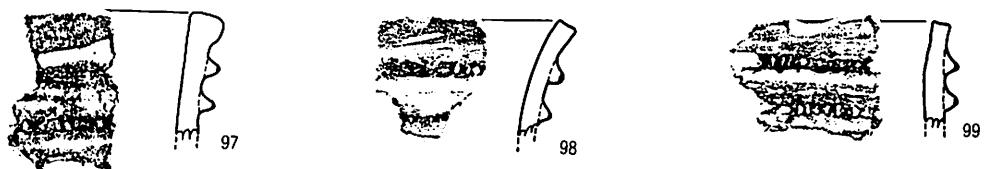
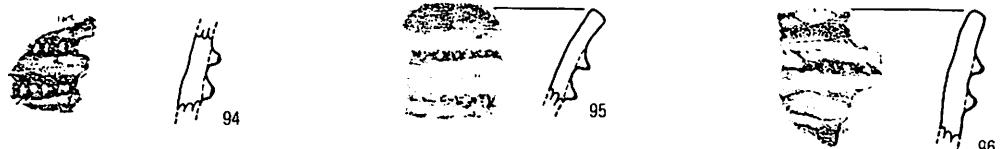
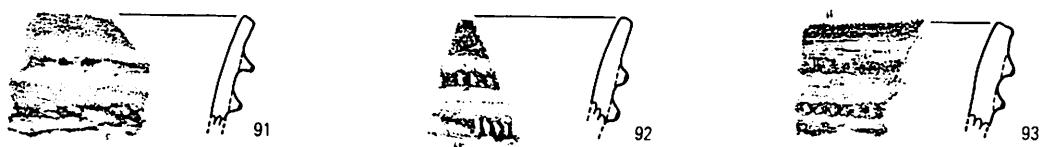


0 10cm

第10図 曲遺跡A地区出土土器実測図4 (1/3)

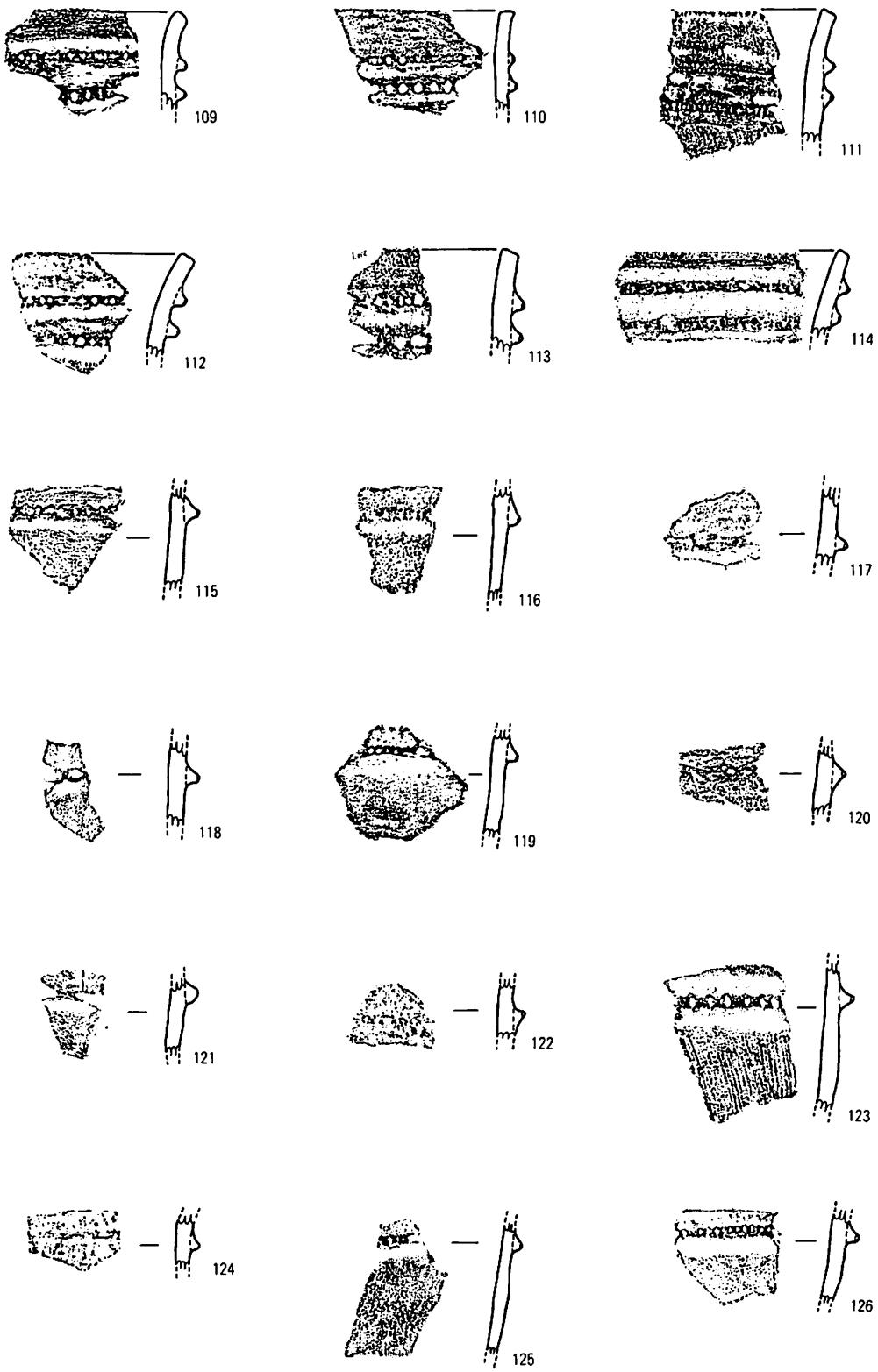


第11図 曲遺跡A地区出土土器実測図5 (1/3)

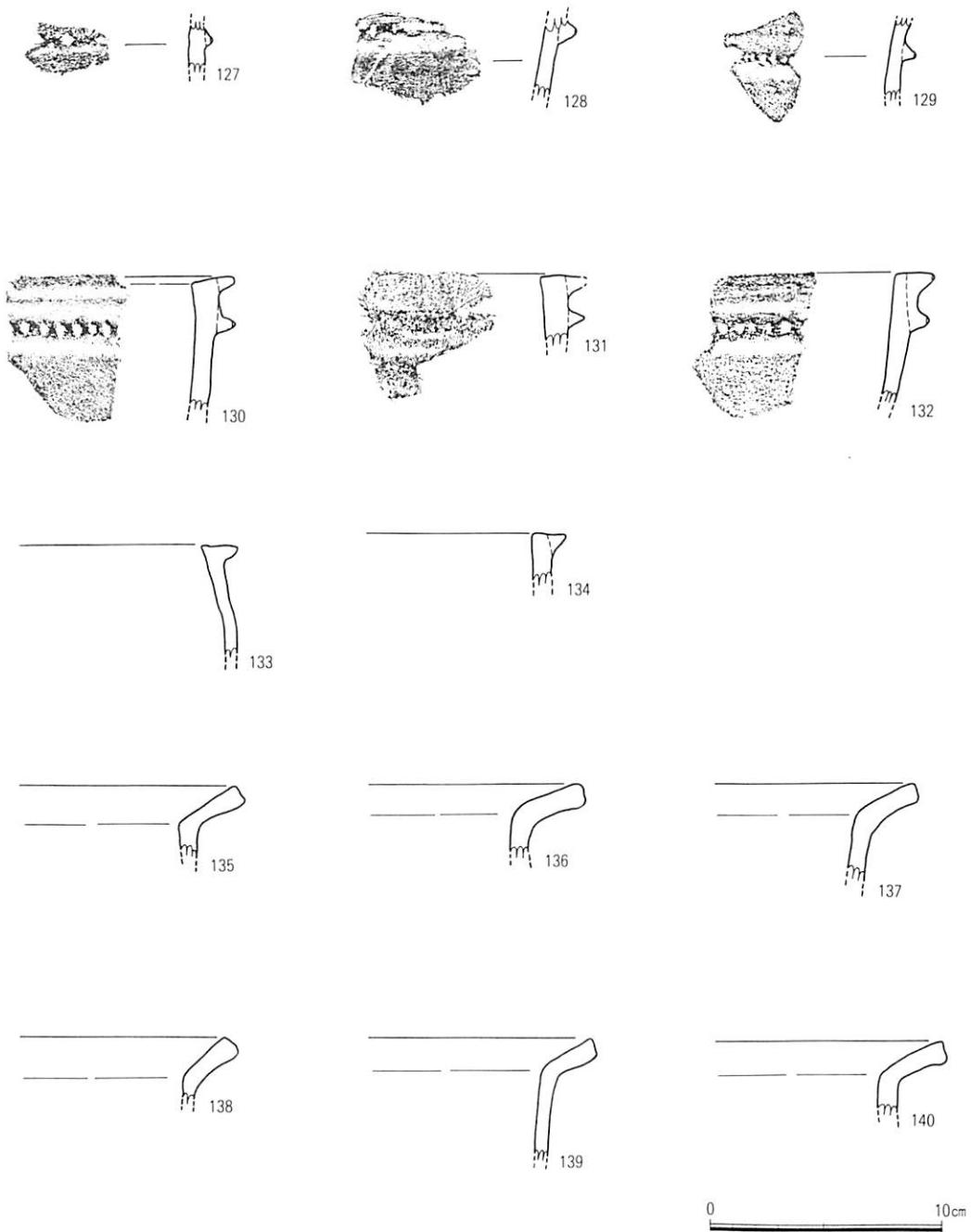


0 10cm

第12図 曲遺跡A地区出土土器実測図 6 (1/3)



第13図 曲遺跡A地区出土土器実測図7 (1/3)

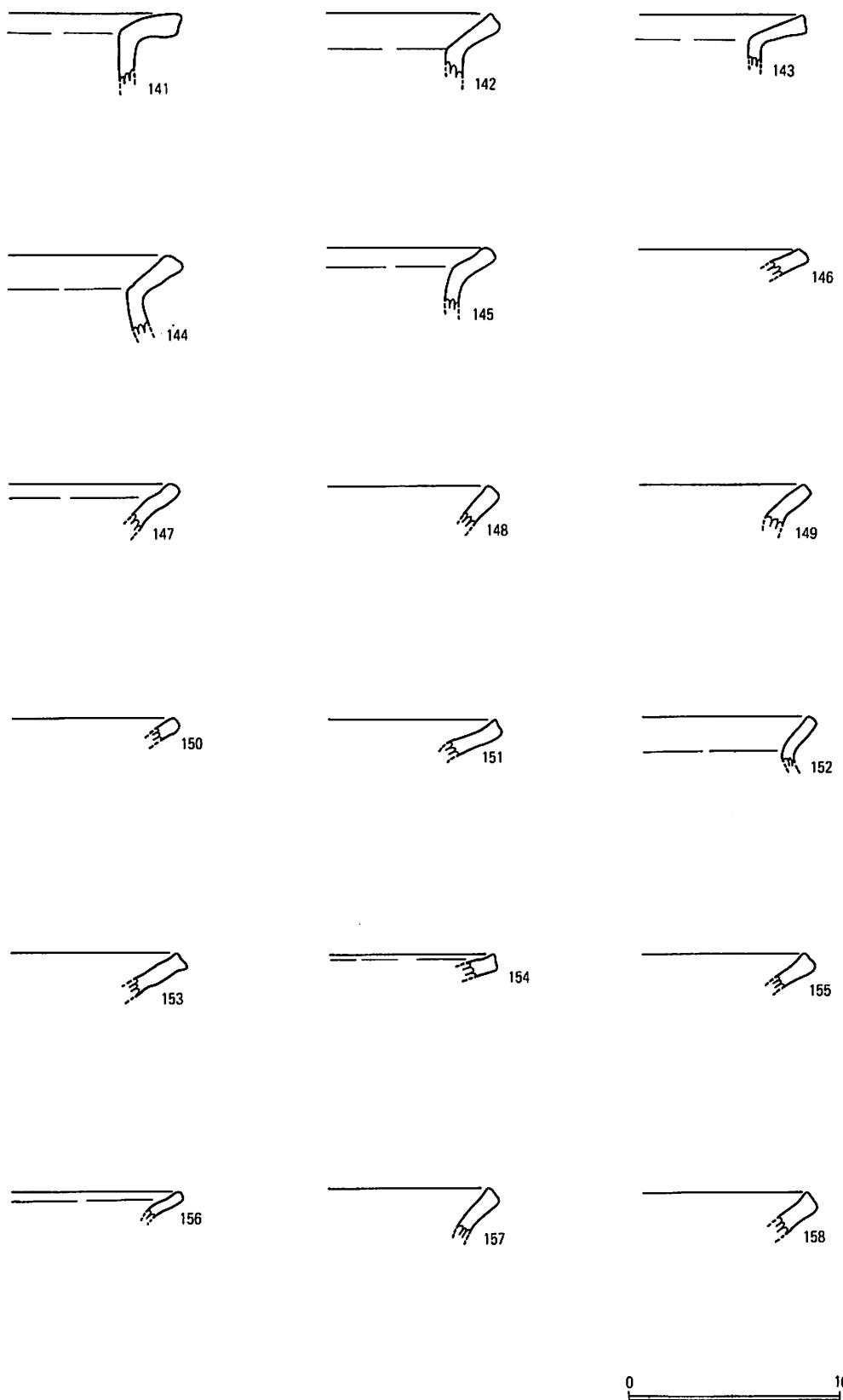


第14図 曲遺跡A地区出土土器実測図8 (1/3)
条溝

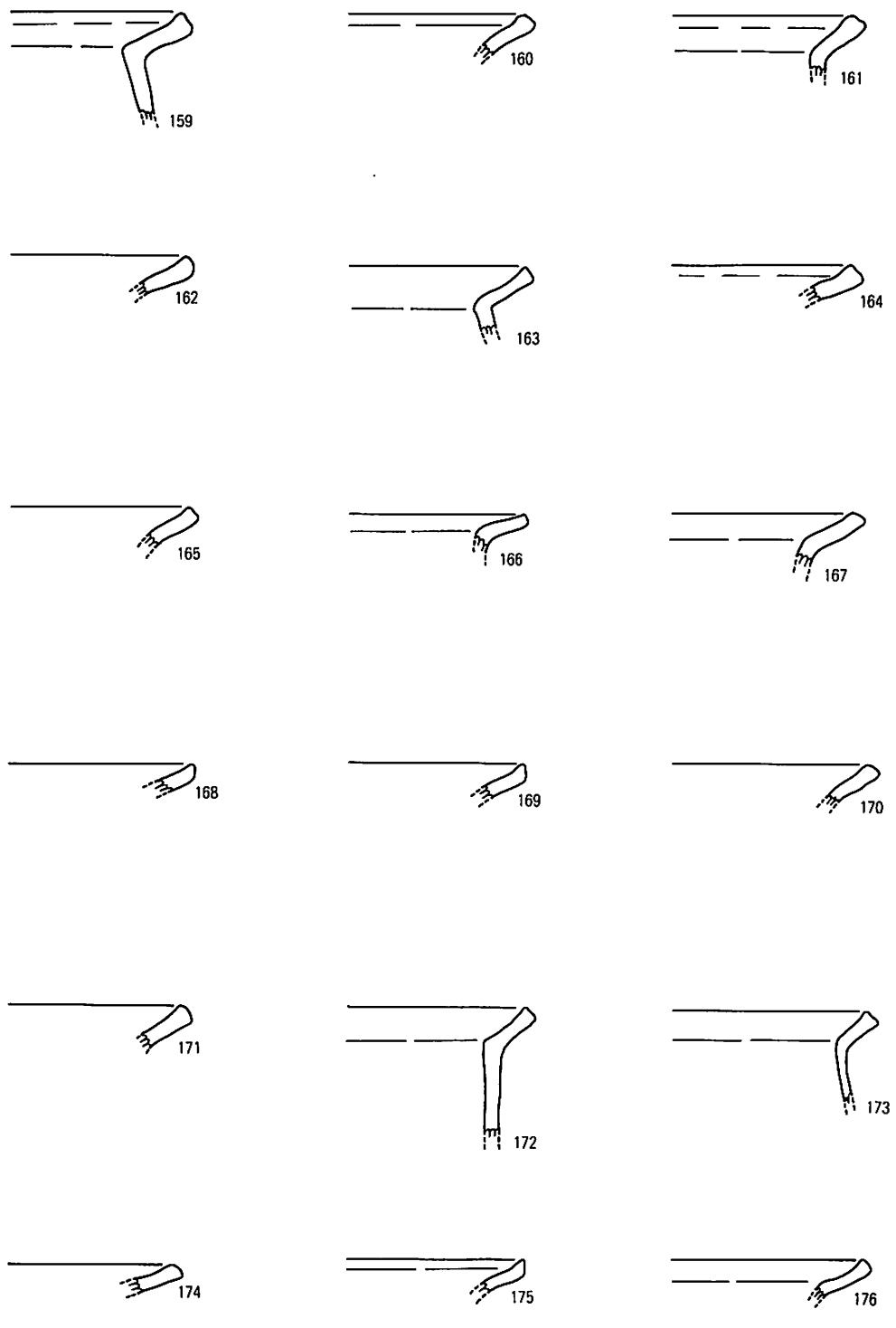
調査区内東南付近で検出された小条溝は弧を描く。断面凹状で幅15cm、深さ10~12cmを測る。長さは延べ11m程度が確認された。埋土は12層の黒褐色土であり、弥生時代の所産であるが遺物は出土していない。

(2) 遺物

出土遺物としては土器が主体を占める。その大半は12層からで、遺構の埋土から出土するものも

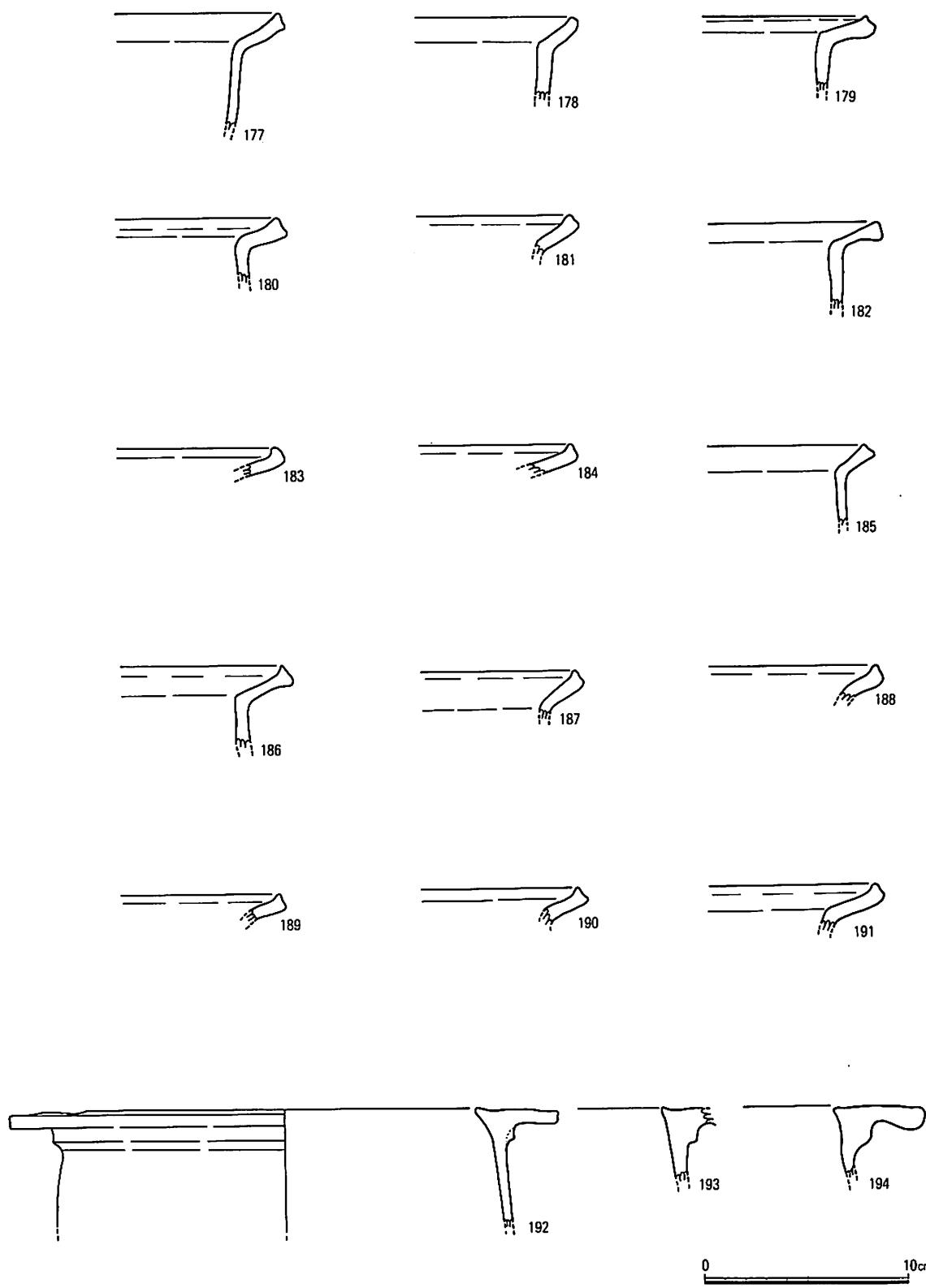


第15図 曲遺跡A地区出土土器実測図9 (1/3)

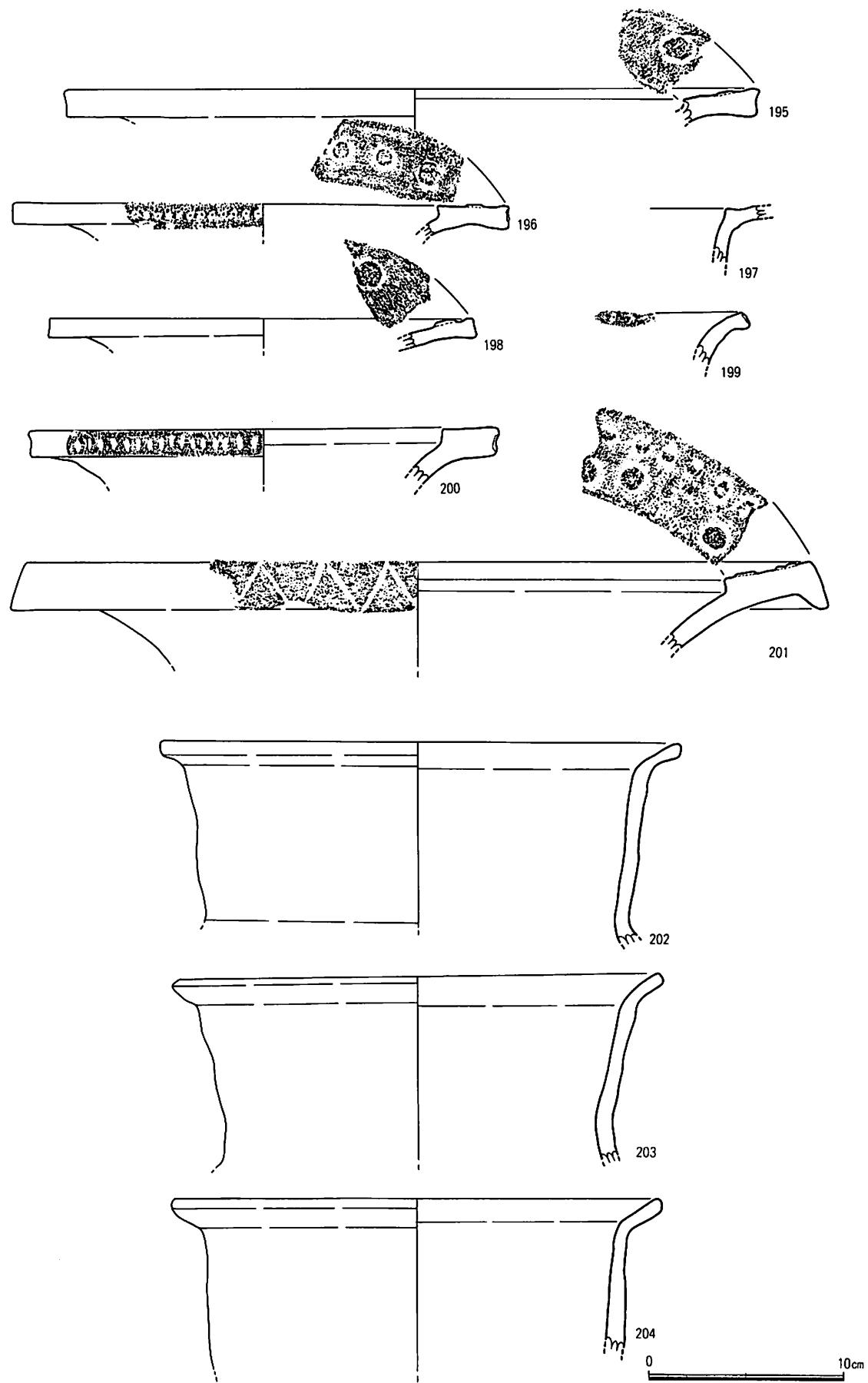


0 10cm

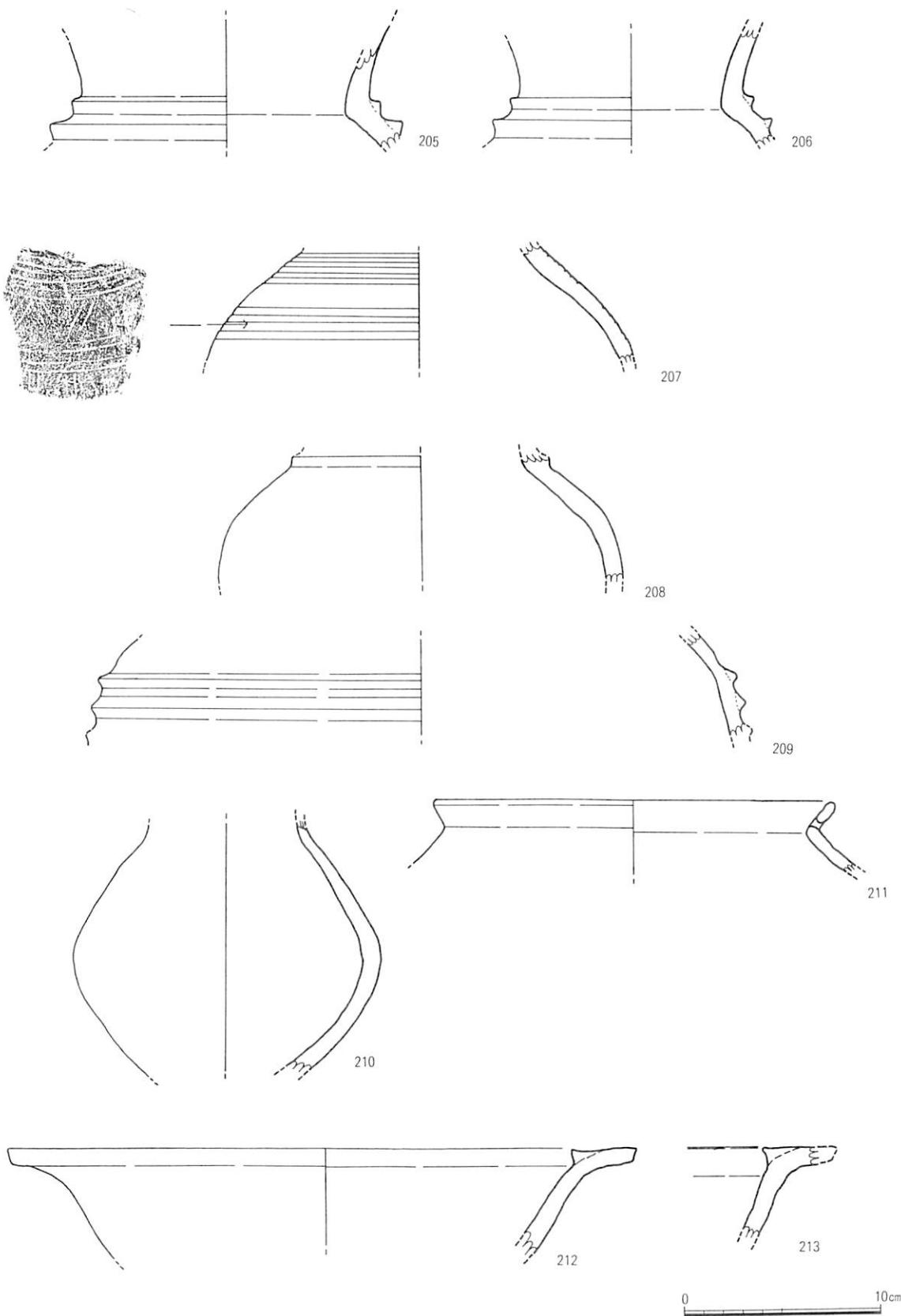
第16図 曲遺跡A地区出土土器実測図10 (1/3)



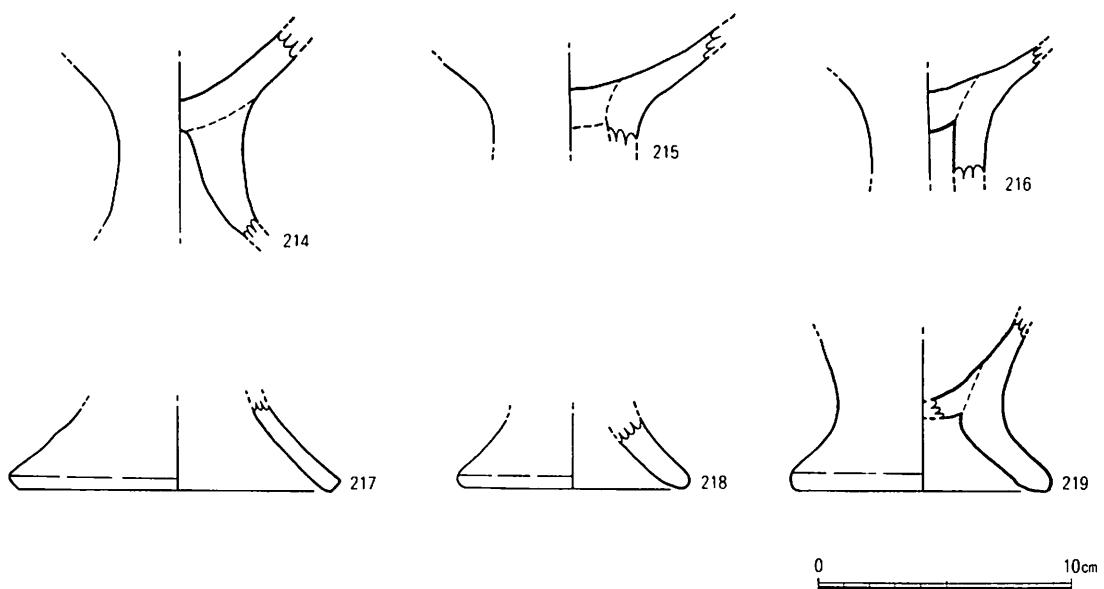
第17図 曲遺跡A地区出土土器実測図11 (1/3)



第18図 曲遺跡A地区出土土器実測図12 (1/3)



第19図 曲遺跡A地区出土土器実測図13 (1/3)



第20図 曲遺跡A地区出土土器実測図14 (1/3)

本来的にはこの12層のものである。曲遺跡出土の土器は表面の風化が著しく、内・外面の調整が判然としないものが殆どである。

壺形土器 (1~194)

1類 (1~87) は下城式の壺形土器である。上端部を平坦に仕上げた口縁部と、口縁部下に巡らした1条の刻目突帯が特徴である。器面調整が良く残っている個体でみると、内面は口縁部付近の横方向の刷毛目調整を除けば、平滑な撫で仕上げ、外面は比較的細い縦方向の刷毛目調整が行われているようである。色調は黄褐色や茶褐色あるいは灰褐色系統のものが多く、胎土にカクセン石や微砂粒が混じるものが多い。口縁部は直立および外傾気味のもので、体部から直線的に続くものであろう。口縁部下の刻目突帯の位置は上端下最小13mm、最大24mmとやや幅がある。

2類 (88~114) 口縁部下の刻目突帯が2条のもの。97を除けばすべて断面コ字状の口縁端部で、口縁部は外側に開くようである。

3類 (130~132) 口縁部上端に接する位置に2条の刻目突帯を有するもの。残存部から判断する限り、口縁部はやや内湾気味に立ち上がるようである。

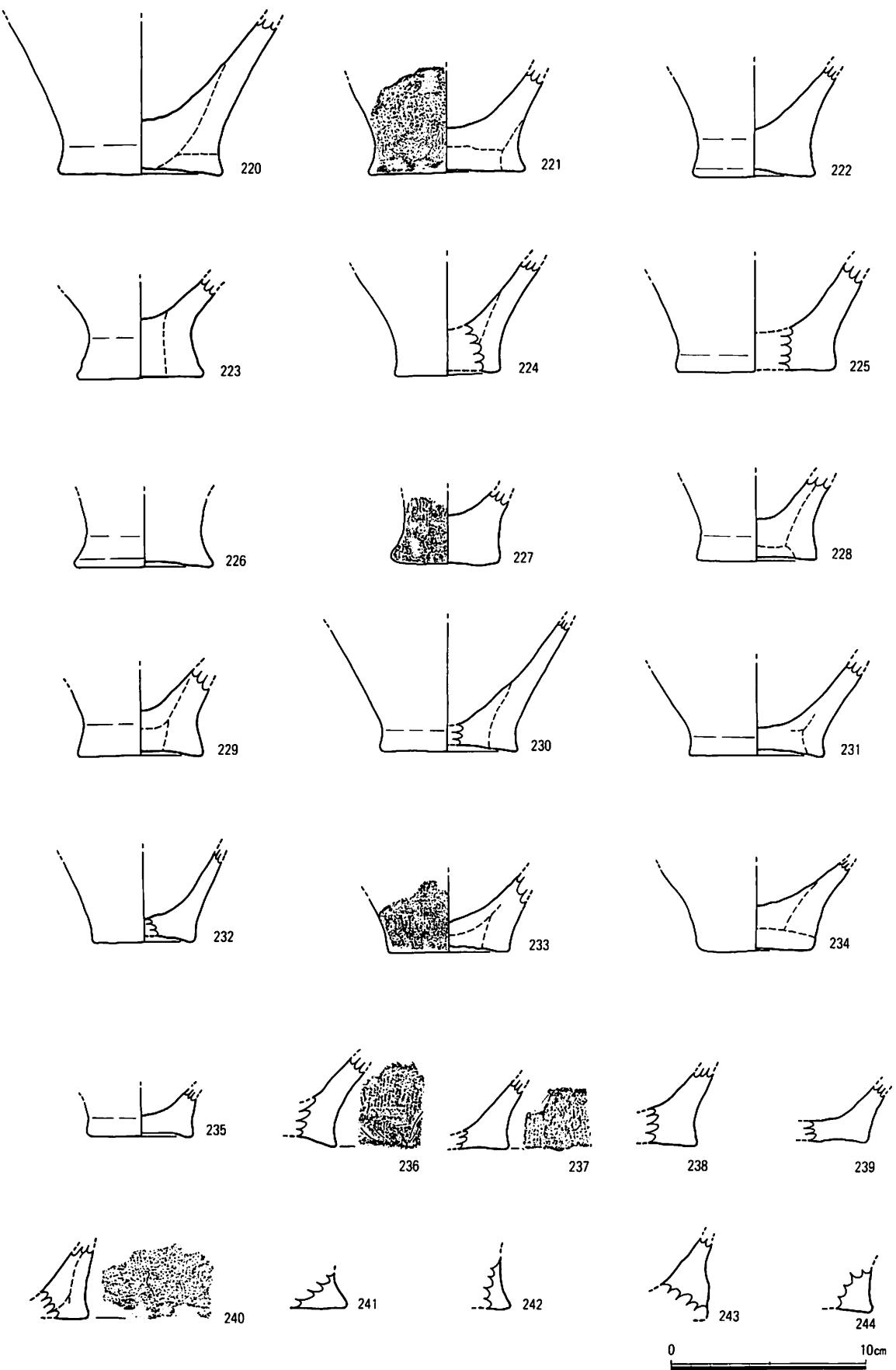
4類 (133、134) 口縁端部に無刻目の突帯を巡らすものである。

5類 (135~141) 胴部最大径が頸部にあり、屈曲の弱い逆L字状口縁部をもつもの。口縁端部は断面コ字状を呈する。風化のため内・外面の調整は不明瞭であるが、外面には縦もしくは斜め刷毛目を施し、内面は撫で調整を行っているようである。

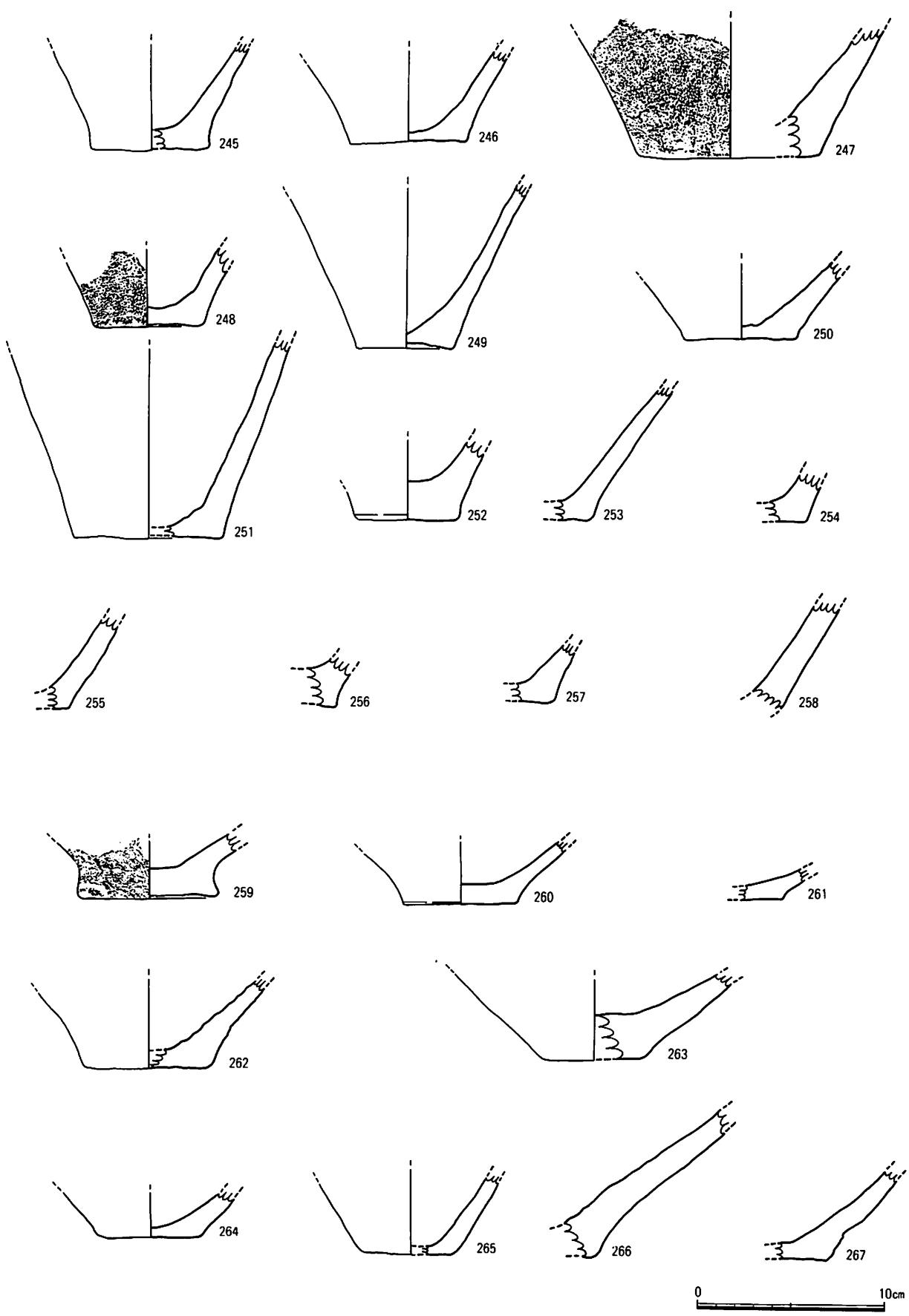
6類 (142~191) 「く」の字状口縁部を有するもの。

6-a類、断面コ字状に収めたもの (142~153) と 6-b類、口縁端部をつまみ上げ気味に仕上げたものに細分される。6-b類の中でも端部つまみ上げが目立つ土器 (177~191) とそれほどでもないもの等があり、一様ではない。

7類 (192~194) 平坦で幅広の口縁部を有する甕。口縁部は内側にやや張り出しがあり、完全な逆L字というわけではない。口縁部直下に突帯を巡らす。



第21図 曲遺跡A地区出土土器実測図15 (1/3)



第22図 曲遺跡A地区出土土器実測図16 (1/3)

壺形土器 (195~211)

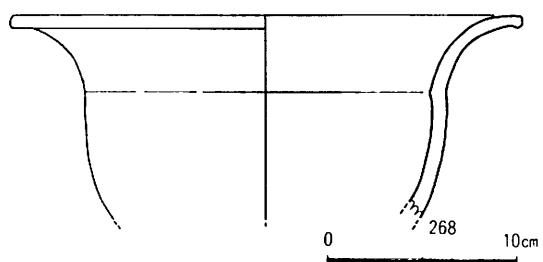
1類 (195~200) 花状に開く頸部と肥厚口縁で特徴づけられるもの。口縁部上面は平坦で、ここに円形の粘土浮文を貼り付けている。口縁部側面に竹管やへら状の道具で施文したもの (196、198、200) と無文様のもの (195) がある。

2類 (201) 肥厚する口縁部の側面が下方に垂れ下がり、なおかつこれにへら描きの連続鋸歯文を施したもの。口径約41cm。

3類 (199) 外湾気味に開く単口縁部の壺で、口縁端部には半截竹管を施している。

4類 (202~204) 太い筒状の頸部と短く外反する口縁部を有す壺である。口縁端部は無文で、丸く收めている。

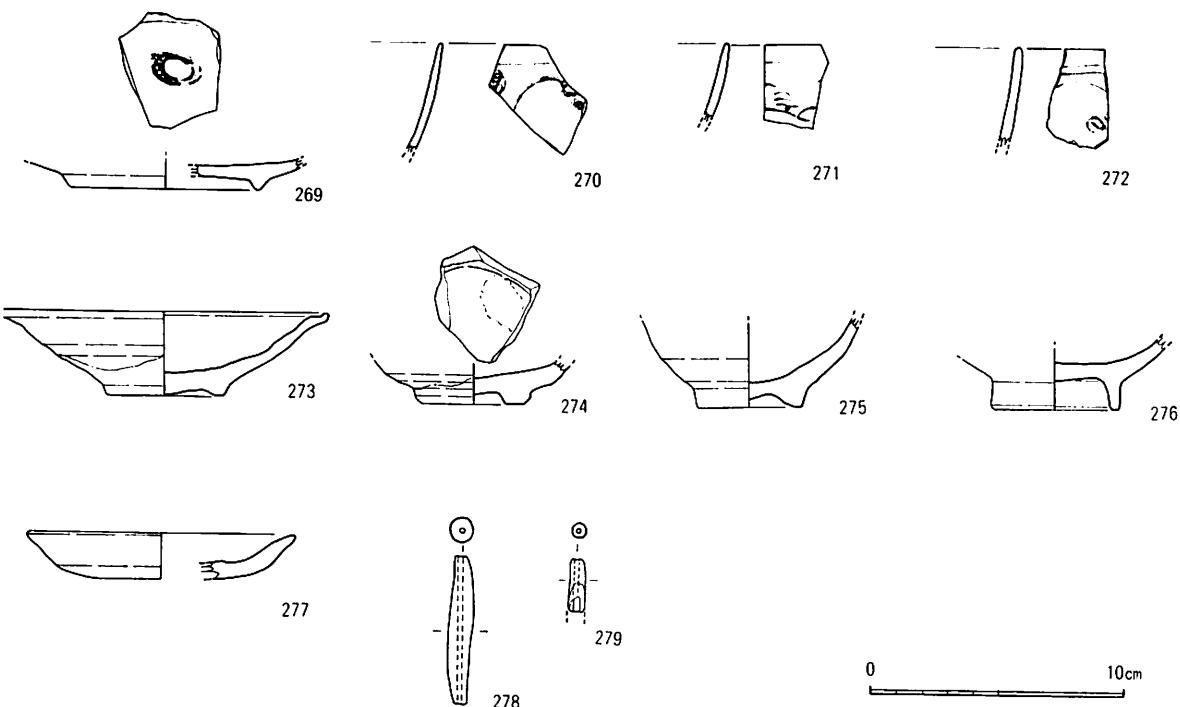
その他205、206は中形壺の頸部片で、2~3条の突帯を巡らす。207~209は球形の胴部で、207には各7条、5条の2段の沈線文および複線の三角文を施している。209は人形壺で胴部中央に3条の三角突帯を巡らす。これらは1類~3類の口縁部と組み合うものであろう。210は小形の壺の胴部である。



第23図 曲遺跡A地区出土土器実測図 (1/4)

その他の遺物

上述の弥生土器の他に表土を中心に弥生後期土器 (268) や第24図に示す中・近世遺物が出土している。17C前半に比定できる269~271は肥前の磁器染付皿・碗で絵付釉薬は全体に淡い色調を呈し、置付に砂の付着がみられる。273~275は見込みや置付に砂目がみられる唐津の溝縁皿や陶器塊である。また、京都系土師器 (277) や肥前の陶胎染付碗 (272) の出土もみられ、周辺にこういった遺構の存在が推測される。



第24図 曲遺跡A地区出土土器実測図 (1/3)

表1 A地区出土遺物観察表

遺物番号	捕団番号	器種	胎土	色調		器面調整		備考
				内面	外面	内面	外面	
1	7	甕口縁部	角閃石	灰茶褐色		不明		下城式 12層
2	7	甕口縁部	長石 石英	淡茶褐色		ナデ	縦方向ハケ目	下城式 12層
3	7	甕口縁部	石英 石角	淡灰褐色 暗茶褐色		ナデ	不明	下城式 12層
4	7	甕口縁部	石角 英石	黃灰色		ナデ	ナデ	下城式 12層
5	7	甕口縁部	石 英	淡黃灰色 黑褐色		不明		下城式 12層
6	7	甕口縁部	石角 英石	白灰褐色		不明		下城式 12層
7	7	甕口縁部	石 英 石角 英石	白黃褐色		ナデ	縦方向ハケ目	下城式 12層
8	7	甕口縁部	石 長 英石	淡黃褐色 茶褐色		不明		下城式 12層
9	7	甕口縁部	角砂 石粒	灰茶褐色		不明		下城式 12層
10	7	甕口縁部	石角 英石	淡黃褐色 茶褐色		ナデ	縦方向ハケ目	下城式 12層
11	7	甕口縁部	石 英	淡黃褐色 茶褐色		不明		下城式 12層
12	7	甕口縁部	石 英	淡褐色	平滑 ナデ	ハケ目		下城式 12層
13	7	甕口縁部	石 英	赤褐色	ナデ	縦方向 ハケ目		下城式 12層
14	7	甕口縁部	石 角 英石	灰茶褐色		不明		下城式 12層
15	7	甕口縁部	角砂 石粒 多量	淡黃褐色		不明		下城式 12層
16	7	甕口縁部	石 角 英石	灰茶褐色		不明		下城式 12層
17	7	甕口縁部	石 英 石角 英石	黒褐色 灰褐色	ナデ	ナデ		下城式 12層
18	7	甕口縁部	角砂 石粒	灰白色 淡赤褐色		不明		下城式 表土
19	8	甕口縁部	角 石 英	白灰褐色 黒褐色	ナデ	ハケ目		下城式 12層
20	8	甕口縁部	石 英	明赤褐色		不明		下城式 12層
21	8	甕口縁部	角 閃 石	灰赤褐色	ナデ	ハケ目		下城式 12層
22	8	甕口縁部	角 閃 石	黄褐色		不明		下城式 12層
23	8	甕口縁部	石 英	淡茶灰色		不明		下城式 表土
24	8	甕口縁部	石 英	灰黃褐色	ナデ	ハケ目		下城式 12層
25	8	甕口縁部	角 石 英	赤褐色	ナデ	縦方向 ハケ目		下城式 12層
26	8	甕口縁部	石 英	淡黃褐色		不明		下城式 12層
27	8	甕口縁部	石 英	暗茶褐色		不明		下城式 12層
28	8	甕口縁部	角 石 英	黄褐色	平滑 ナデ	不明		下城式 12層
29	8	甕口縁部	石 英 赤色酸化土粒	黄白褐色	ナデ	不明		下城式 12層
30	8	甕口縁部	石 英	黄褐色		不明		下城式 12層
31	8	甕口縁部	石 英	灰黑色 茶褐色	ナデ	斜め方向 ハケ目		下城式 12層
32	8	甕口縁部	角 閃 石	明黃褐色		不明		下城式 12層

表2 A地区出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	器種	胎土	色調		器面調整		備考
				内面	外面	内面	外面	
33	8	甕口縁部	角閃石英	灰黄色		ナデ	ハケ目	下城式 表土
34	8	甕口縁部	角閃石	淡黄褐色		不明		下城式 12層
35	8	甕口縁部	石英	灰褐色		不明		下城式 表土
36	8	甕口縁部	角閃石	灰黑色	黃褐色		不明	下城式 12層
37	9	甕口縁部	角閃石英	灰褐色		不明		下城式 12層
38	9	甕口縁部	角閃石砂粒	褐色	色	ナデ	縦方向ハケ目	下城式 12層
39	9	甕口縁部	石角閃石	黒褐色	淡黄褐色		不明	下城式 12層
40	9	甕口縁部	石英	黄灰色	灰褐色	ナデ	不明	下城式 …… 中期 12層
41	9	甕口縁部	角閃石	黄褐色		ナデ	不明	下城式 12層
42	9	甕口縁部	角閃石	黒褐色		ナデ	ナデ	下城式 12層
43	9	甕口縁部	石英	白褐色		不明		下城式 12層
44	9	甕口縁部	石英	淡灰褐色		不明		下城式 12層
45	9	甕口縁部	微砂粒	黄褐色		不明		下城式 12層
46	9	甕口縁部	石英	淡灰褐色	茶褐色		不明	下城式 12層
47	9	甕口縁部	角閃石	黄褐色	暗灰褐色		不明	下城式 12層
48	9	甕口縁部	石英	黄褐色		不明		下城式 12層
49	9	甕口縁部	石角閃石	茶褐色		不明		下城式 12層
50	9	甕口縁部	石英	淡灰褐色	茶褐色		不明	下城式 12層
51	9	甕口縁部	石英	茶褐色		不明		下城式 12層
52	9	甕口縁部	石角閃石英	黄灰褐色	暗灰褐色	ナデ	不明	下城式 12層
53	9	甕口縁部	石角閃石英	灰褐色		不明	縦方向ハケ目	下城式 12層
54	9	甕口縁部	石英	暗灰褐色	淡赤褐色		不明	下城式 12層
55	10	甕口縁部	石角閃石英	黄褐色	黑褐色		不明	下城式 12層
56	10	甕口縁部	角閃石石英	明褐色	茶褐色		不明	下城式 12層
57	10	甕口縁部	角閃石英	淡茶褐色		ナデ	不明	下城式 12層
58	10	甕口縁部	角閃石英	淡灰色		不明		下城式 12層
59	10	甕口縁部	微砂粒	灰茶褐色		横ナデ	横ナデ	下城式 12層
60	10	甕口縁部	石角閃石英	灰白褐色		不明		下城式 12層
61	10	甕口縁部	角閃石石粒	茶褐色		横ミガキ	不明	下城式 12層
62	10	甕口縁部	石角閃石英	淡赤褐色		不明		下城式 12層
63	10	甕口縁部	砂角閃石	灰褐色		ナデ	縦方向ハケ目	下城式 12層
64	10	甕口縁部	角閃石英	淡黄白色	淡茶褐色		不明	下城式 表土

表3 A地区出土遺物観察表

遺物番号	捕団番号	器種	胎土	色調		器面調整		備考
				内面	外面	内面	外面	
65	10	甕口縁部	石砂英粒	灰黒褐色		不明		下城式 12層
66	10	甕口縁部	長石	赤褐色		ナデ	縦方向ハケ目	下城式 12層
67	10	甕口縁部	長石	黄灰褐色		ナデ	ハケ目	下城式 12層
68	10	甕口縁部	石英	灰黄色	灰茶褐色	横ナデ	縦方向ハケ目	下城式 12層
69	10	甕口縁部	石英	茶褐色		不明		下城式 復元口径20cm 12層
70	10	甕口縁部	石英	黄褐色		ナデ	斜め方向ハケ目	下城式 12層
71	10	甕口縁部	石角閃英石	淡黄褐色		斜め方向ハケ目	不明	下城式 表土
72	10	甕口縁部	石角閃英石	灰褐色		不明		下城式 12層
73	11	甕口縁部	石英	黄褐色		不明		下城式 12層
74	11	甕口縁部	角微閃石砂粒	茶褐色		ナデ	ナデ	下城式 表土
75	11	口縁部	角閃石砂粒	暗橙褐色	橙褐色	平滑ナデ	不明	下城式 鉢・甕? 12層
76	11	甕口縁部	角石英	黄褐色		ナデ	縦方向ハケ目	下城式 復元口径36cm 12層
77	11	甕口縁部	角砂石粒	茶褐色		不明		下城式 12層
78	11	甕口縁部	長砂石粒	暗褐色		ナデ	ナデ	下城式 ……中期 12層
79	11	甕口縁部	精良	灰白色		不明		下城式 12層
80	11	甕口縁部	石英	淡黄褐色		横ナデ	縦方向ハケ目	下城式 ……中期 12層
81	11	甕口縁部	微砂粒	淡黄色	暗灰色	ナデ	ナデ	下城式 ……中期 表土
82	11	甕口縁部	微砂粒	灰褐色		ナデ	不明	下城式 12層
83	11	甕口縁部	角閃石英	灰黑色	暗褐色	ナデ	ナデ	下城式 12層
84	11	甕口縁部	角閃石	淡黄褐色	淡赤褐色	不明		下城式 表土
85	11	甕口縁部	微砂粒	黄褐色	黑色	不明	縦方向ハケ目	下城式 12層
86	11	甕口縁部	石英	灰褐色		不明		下城式 12層
87	11	甕口縁部	砂角閃石粒	明黄褐色		不明	細かい縦方向ハケ目	下城式 12層
88	11	甕口縁部	角閃石英	淡褐色		ナデ	縦方向ハケ目	下城式 復元口径24cm 12層
89	11	甕口縁部	石英	淡灰色	茶褐色	ナデ	縦方向ハケ目	下城式 12層
90	11	甕口縁部	石角閃英石	淡黄褐色		横ナデ	縦方向ハケ目	下城式 12層
91	12	甕口縁部	角閃石	黄褐色		不明		下城式 12層
92	12	甕口縁部	角閃石	灰黑色	暗褐色	不明		下城式 12層
93	12	甕口縁部	石角閃英石	灰褐色		ナデ	不明	下城式 12層
94	12	甕口縁部	角石英	淡黄灰色	灰褐色	不明		下城式 12層
95	12	甕口縁部	角閃石砂粒多量	黄白色	淡灰褐色	ナデ	ナデ	下城式 12層
96	12	甕口縁部	石英	淡灰褐色		不明		下城式 12層

表4 A地区出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	器種	胎 土	色 調		器面調整		備考
				内面	外面	内面	外面	
97	12	甕 口縁部	角 閃 石	灰褐色		不 明		下城式 12層
98	12	甕 口縁部	角 閃 石	灰黃褐色		ナデ	ナデ	下城式 12層
99	12	甕 口縁部	石 角 閃 英 石	明黃白色		ナデ	ナデ	下城式 表土
100	12	甕 口縁部	石 角 閃 英 石	灰黃色	黃灰褐色	不 明		下城式 12層
101	12	甕 口縁部	石 英	淡茶褐色		不 明		下城式 12層
102	12	甕 口縁部	石 英	淡赤褐色		斜め方向 ハケ目	不明	下城式 12層
103	12	甕 口縁部	角 閃 石 英 石	白黃褐色		平滑 仕上げ	不明	下城式 12層
104	12	甕 口縁部	角 閃 石 英 石	茶 褐 色		横ナデ	縦方向 ハケ目	下城式 12層
105	12	口縁部	石 角 閃 英 石	淡赤褐色		不明	斜め方向 ハケ目	下城式 12層
106	12	甕 口縁部	石 英	淡茶褐色		不 明		下城式 12層
107	12	甕 口縁部	石 角 閃 英 石	黄褐色	黑 色	ナデ	縦方向 ハケ目	下城式 12層
108	12	甕 口縁部	石 角 閃 英 多量	褐 色		不 明		下城式 12層
109	13	甕 口縁部	角 閃 石 英 石	淡黃褐色		ナデ	ナデ	下城式 12層
110	13	甕 口縁部	石 角 閃 英 石	淡黃褐色		不明	ハケ目	下城式 …… 中期 12層
111	13	甕 口縁部	角 閃 石 英 石	黑 褐 色		ナデ	ハケ目	下城式 …… 中期 12層
112	13	甕 口縁部	微 砂 粒	淡黃褐色		不 明		下城式 12層
113	13	甕 口縁部	角 閃 石 英 石	淡黃褐色	黑褐色	ナデ	不明	下城式 12層
114	13	甕 口縁部	石 英	黑 褐 色		横ナデ	不明	下城式 12層
115	13	甕 口縁部	石 角 閃 英 石	黑 褐 色		ナデ	ハケ目	下城式 12層
116	13	甕 口縁部	石 角 閃 英 石	白黃褐色		不 明		下城式 12層
117	13	甕 口縁部	砂 石 英 粒	黄 褐 色		ナデ	不明	下城式 12層
118	13	甕 口縁部	角 閃 石 英 石	灰 褐 色		不 明		下城式 12層
119	13	甕 口縁部	砂 石 英 多量	淡 褐 色		横ミガキ	縦方向 ハケ目	下城式 表土
120	13	甕 口縁部	長 石 英 石	黑 褐 色		不 明		下城式 表土
121	13	甕 口縁部	角 閃 石	黄 白 色		不 明		下城式 表土
122	13	甕 口縁部	石 英	淡黃白色	淡茶褐色	不 明		下城式 12層
123	13	甕 口縁部	石 英	淡黃褐色	黃褐色	ナデ	斜め方向 ハケ目	下城式 12層
124	13	甕 口縁部	角 閃 石	白黃褐色		不 明		下城式 12層
125	13	甕 口縁部	微 砂 粒	灰 白 色		不 明		下城式 表土
126	13	甕 口縁部	石 英	茶 褐 色		ナデ	ハケ目	下城式 12層
127	14	甕 口縁部	角 閃 石 英 石	茶 褐 色		不 明		下城式 表土
128	14	甕 口縁部	微 砂 粒	黄 灰 色		横ナデ	横ナデ	下城式 12層

表5 A地区出土遺物観察表

遺物番号	插図番号	器種	胎土	色調		器面調整		備考
				内面	外面	内面	外面	
129	14	甕口縁部	長角閃石	茶褐色		不明	縦方向ハケ目	下城式 12層
130	14	甕口縁部	石角閃石	黃褐色		不	明	表土
131	14	甕口縁部	石英	黃褐色		不	明	12層
132	14	甕口縁部	角閃石	白黃褐色		不	明	12層
133	14	甕口縁部	石微砂	淡茶褐色		不	明	12層
134	14	甕口縁部	角閃石 微砂粒多量	灰褐色		不	明	12層
135	14	口縁部	砂粒	淡黃褐色	茶褐色	不	明	12層
136	14	甕口縁部	角砂	黑褐色	灰褐色	不	明	表土
137	14	甕口縁部	角微砂	黄灰褐色		ハケ目	不明	復元口径29cm 12層
138	14	甕口縁部	微砂粒	淡黃褐色		不	明	12層
139	14	口縁部	砂粒	灰黃褐色		ナデ	ハケ目	12層
140	14	甕口縁部	長角閃石 英石	淡褐色		ナデ	板ナデ	くの字口縁 復元口径34cm 12層
141	15	甕口縁部	角砂 粒多量	明橙色		不	明	表土
142	15	甕口縁部	微角砂	黑褐色		不	明	12層
143	15	甕口縁部	石角閃石	白黄色		不	明	12層
144	15	甕口縁部	角閃石	黄赤褐色		不	明	跳ね上げ口縁 12層
145	15	甕口縁部	微砂粒	灰褐色		不	明	12層
146	15	甕口縁部	微砂粒	黃褐色		不	明	12層
147	15	甕口縁部	長微砂 粒	茶褐色 暗茶褐色		不	明	12層
148	15	甕口縁部	微角砂 閃石	茶褐色 黑褐色		不	明	12層
149	15	甕口縁部	石英	淡黃褐色 赤褐色		不	明	12層
150	15	甕口縁部	砂粒多量	淡黃褐色		不	明	12層
151	15	甕口縁部	微砂粒	白黃褐色		不	明	12層
152	15	甕口縁部	角閃石	黃褐色		不	明	12層
153	15	甕口縁部	角微砂 粒	灰褐色		不	明	12層
154	15	甕口縁部	石砂 英粒	黑灰色 茶褐色		不	明	12層
155	15	甕口縁部	微砂粒	黃褐色		不	明	12層
156	15	甕口縁部	角微砂 粒	黃白色		不	明	12層
157	15	甕口縁部	角微砂 粒多量	茶褐色		不	明	12層
158	15	甕口縁部	角微砂 粒	灰黄色		不	明	表土
159	16	甕口縁部	長角閃石	淡黃褐色		不	明	くの字口縁 復元口径24cm 12層
160	16	甕口縁部	微砂粒	茶褐色		不	明	12層

表6 A地区出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	器種	胎 土	色 調		器面調整		備 考
				内面	外面	内面	外面	
161	16	甕 口縁部	角 閃 石 微 砂 粒 多量	茶褐色		ナデ	ナデ	12層
162	16	甕 口縁部	微 砂 粒	黄白色		不 明		12層
163	16	甕 口縁部	角 閃 石	淡黄褐色		不 明		くの字口縁 12層
164	16	甕 口縁部	微 砂 粒 微量	茶褐色		不 明		くの字つまみ上げ口縁 表上
165	16	甕 口縁部	長 微 砂 石 粒	茶褐色		不 明		12層
166	16	甕 口縁部	微 砂 粒	黄灰褐色		不 明		12層
167	16	甕 口縁部	砂 石 粒 英	黄灰褐色		ナデ	ナデ	跳ね上げ口縁 12層
168	16	甕 口縁部	微 角 砂 粒 閃 石	灰褐色		不 明		12層
169	16	甕 口縁部	角 閃 石	白 黄 色	丹塗り	丹塗り	丹塗り(内・外面)	12層
170	16	甕 口縁部	角 砂 石 粒	茶褐色	黑褐色		不 明	12層
171	16	甕 口縁部	砂 石 粒 英	茶褐色	暗茶褐色		不 明	12層
172	16	甕 口縁部	角 微 砂 石 粒	黄灰色	灰褐色	不明	ハケ目	12層
173	16	甕 口縁部	角 閃 石	白灰黄色		不 明		跳ね上げ口縁 表土
174	16	甕 口縁部	微 砂 粒	灰 黄 色		不 明		12層
175	16	甕 口縁部	微 砂 粒 英	黄 白 色	ナデ	ナデ		12層
176	16	甕 口縁部	角 石 閃 石 英	黄 白 色		不 明		12層
177	17	甕 口縁部	石 長 英 石	淡黄灰色	茶褐色	ナデ	ナデ	ツマミ上げ口縁 復元口径27cm 12層
178	17	甕 口縁部	石 角 閃 石 英 石	黄灰色	黄褐色		不 明	跳ね上げ口縁 12層
179	17	甕 口縁部	微 砂 粒	黑 褐 色		不 明		跳ね上げ口縁 12層
180	17	甕 口縁部	角 微 砂 石 粒	茶褐色		不 明		くの字ツマミ上げ口縁 12層
181	17	甕 口縁部	角 閃 石 砂 粒 多量	暗茶褐色		不 明		12層
182	17	甕 口縁部	微 砂 粒 多量	淡黄白色	茶褐色		不 明	復元口径32cm 12層
183	17	甕 口縁部	角 微 砂 石 粒	淡茶褐色		ナデ	不明	跳ね上げ口縁 12層
184	17	甕 口縁部	微 砂 粒	灰 黄 色		不 明		表土
185	17	甕 口縁部	石 角 閃 石 英 石	灰白色	淡灰褐色		不 明	12層
186	17	甕 口縁部	角 閃 石	白 黄 色		不 明		くの字口縁 ツマミ上げ 復元口径25cm 12層
187	17	甕 口縁部	角 閃 石	黄 褐 色		不 明		跳ね上げ口縁 12層
188	17	甕 口縁部	角 閃 石	淡灰黄色	淡赤褐色		不 明	跳ね上げ口縁 I区 No.30 12層
189	17	甕 口縁部	角 砂 石 粒	白 黄 褐 色		不 明		跳ね上げ口縁 I区 No.117 12層
190	17	甕 口縁部	砂 角 閃 石 粒	黑 褐 色		不 明		跳ね上げ口縁 表土
191	17	甕 口縁部	微 砂 粒	灰 黄 色		ナデ	ナデ	くの字口縁 つまみ上げ 12層
192	17	甕 口縁部	砂 角 内 石 粒	暗灰褐色	灰褐色	ナデ	丹塗り	復元口径27.5cm 12層

表7 A地区出土遺物観察表

遺物番号	捕図番号	器種	胎土	色調		器面調整		備考
				内面	外面	内面	外面	
193	17	甕口縁部	微角砂閃粒石	暗褐色	灰黄色	ナデ	丹塗り	L字状口縁 12層
194	17	T字甕縁部	角閃石	淡黄灰色		不明		復元口径38cm 12層
195	18	壺口縁部	角砂閃石粒	灰赤褐色		ナデ	ナデ	復元口径35.4cm 表土
196	18	壺口縁部	石角閃英石	淡黄褐色	灰黑色	ナデ	不明	復元口径25.2cm 12層
197	18	壺口縁部	角閃英石粒	黄褐色		ナデ	ミガキ	12層
198	18	壺口縁部	角閃石微砂粒多量	茶褐色		不明		復元口径21.6cm 12層
199	18	壺口縁部	微砂粒	淡灰色		平滑ナデ	ナデ	12層
200	18	壺口縁部	長石	灰黄褐色		不明	横ミガキ	復元口径24cm 12層
201	18	壺口縁部	石英	赤褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ	中期末復元口径40.2cm 12層
202	18	壺口縁部	石砂英粒	灰褐色		平滑ナデ	平滑ナデ	中期復元口径26.2cm 12層
203	18	壺口縁部	砂粒	赤褐色	灰褐色	平滑ナデ	平滑ナデ	中期前復元口径24.5cm 12層
204	18	壺口縁部	石砂英多量粒多量	黄褐色	赤褐色	不明		中期前半復元口径24.6cm 12層
205	19	壺頸部	石角閃英石	灰褐色		ナデ	ハケ目	12層
206	19	甕胴部	石角閃英石粒多量	黑褐色		不明	ハケ目	表土
207	19	壺	角細砂石粒	淡黄褐色		ナデ	ミガキ?	12層
208	19	壺頸部	角石	淡赤褐色		平滑ナデ		表土
209	19	壺胴部	砂角閃石	灰褐色		ナデ	平滑ナデ	12層
210	19	壺胴部	角砂閃石	青灰色		指オサエ	平滑縦ナデ	12層
211	19	壺口縁部	角微砂石	黄白色		丹塗り	不明	復元口径20.2cm 12層
212	19	高环口縁部	砂粒	灰白色	灰黑色	不明		復元口径32cm 12層
213	19	高环坏部	石砂英粒	暗灰褐色	褐色	不明	丹塗り研磨	外面丹塗り復元口径28cm 12層
214	20	高环脚部	角砂閃石	淡灰褐色	灰褐色	ミガキ	縦方向ハケ目	12層
215	20	高坏	石角閃英石	茶褐色		平滑仕上げ	丹塗り	表土
216	20	高坏	細角砂閃石	黑褐色		不明		12層
217	20	高坏脚部	白色砂粒	淡黄白色		不明		復元底径12.3cm 12層
218	20	脚部	砂角閃石	茶褐色		指頭痕		復元底径9cm 12層
219	20	脚部	砂角閃石	暗灰褐色	赤褐色	不明		円盤充填復元底径9.6cm 12層
220	21	甕底部	石角閃英石多量	暗灰褐色	黄褐色	ナデ	ハケ目	復元底径8cm 12層
221	21	甕底部	角閃石英多量	灰黑色	淡赤褐色	ナデ	縦方向ハケ目	復元底径7.8cm 12層
222	21	甕底部	微砂粒	灰黑色	赤褐色	ナデ	ナデ	復元底径6cm 12層
223	21	甕底部	角砂閃石粒	灰褐色	赤褐色	不明	ハケ目	復元底径6cm 12層
224	21	甕底部	角閃石粒多量	暗灰褐色	黄褐色	不明		復元底径5.1cm 表土

表8 A地区出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	器種	胎土	色調		器面調整		備考
				内面	外面	内面	外面	
225	21	甕底部	石長英石	茶褐色	赤褐色	不明	不明	復元底径7.8cm 12層
226	21	甕底部	角閃石 微砂粒多量	赤褐色	赤褐色	不明	不明	復元底径6.7cm 12層
227	21	甕底部	角閃石石	黑色	赤褐色	不明	ハケ目	底径5cm 12層
228	21	甕底部	角閃石多量 砂粒	暗褐色	白黄色	不明	不明	復元底径6cm 12層
229	21	甕底部	角閃石 微砂粒	黑褐色	赤褐色	不明	不明	復元底径6cm 12層
230	21	甕底部	角閃石	暗灰褐色	黄褐色	不明	ハケ目	復元底径7cm 12層
231	21	甕底部	微砂粒	黑灰色	灰褐色	ナデ	ナデ	復元底径6.8cm 12層
232	21	甕底部	微砂粒	黑色	茶褐色	ナデ	ハケ目 ナデ	復元底径4.8cm 12層
233	21	甕底部	角閃石石	灰褐色	灰褐色	ナデ	ハケ目	復元底径6cm 12層
234	21	甕底部	角閃石 英多量	黑褐色	黑褐色	不明	不明	復元底径5.6cm 12層
235	21	甕底部	石英多量	灰褐色	赤褐色	不明	不明	復元底径5.2cm 12層
236	21	甕底部	角閃石 砂粒	灰褐色	黑褐色	ナデ	ハケ目	表土
237	21	甕底部	角閃石 砂粒	灰褐色	灰褐色	不明	ハケ目	12層
238	21	甕底部	角閃石 微砂粒	淡黄褐色	橙褐色	不明	ハケ目	12層
239	21	甕底部	砂角閃石	灰褐色	暗茶褐色	不明	不明	12層
240	21	甕底部	角閃石 石英	暗灰色	灰白褐色	不明	縦方向 ハケ目	12層
241	21	底部	角閃石 石英	赤褐色	赤褐色	不明	ナデ	12層
242	21	甕底部	角閃石 砂粒	淡灰褐色	淡灰褐色	不明	不明	表土
243	21	甕底部	砂粒	灰黑色	白褐色	不明	不明	表土
244	21	底部	微砂粒	赤褐色	赤褐色	不明	不明	12層
245	22	甕底部	角閃石 白色砂粒	灰褐色	赤褐色	不明	ハケ目	復元底径6cm 12層
246	22	甕底部	石角閃石 英石	茶灰色	茶灰色	不明	不明	復元底径6cm 12層
247	22	壺底部	石角閃石 英石	暗赤褐色	暗赤褐色	平滑 ナデ	ミガキ ハケ目	復元底径9.5cm 12層
248	22	甕底部	角閃石 石英多量	灰褐色	赤褐色	不明	ハケ目	底径5.4cm 12層
249	22	甕底部	角閃石 石英	黑褐色	灰褐色	ナデ	ハケ目 ナデ	底径5.1cm 12層
250	22	壺底部	砂石 粒多量 英	灰黄色	灰黄色	ナデ	ミガキ	復元底径5.5cm 12層
251	22	甕底部	砂石 英多量	淡黄褐色	赤褐色	不明	ハケ目	復元底径7.5cm 12層
252	22	甕底部	角白色砂粒	灰褐色	赤褐色	不明	不明	底径5.1cm 12層
253	22	甕底部	角閃石 石英	黑褐色	赤褐色	不明	ハケ目	12層
254	22	甕底部	白色砂粒 角閃石	暗灰褐色	茶褐色	不明	ハケ目	12層
255	22	底部	角閃石 石英	黑褐色	赤褐色	不明	不明	表土
256	22	甕底部	角閃石	灰褐色	茶褐色	不明	縦方向 ハケ目	12層

表9 A地区出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	器種	胎土	色調		器面調整		備考
				内面	外面	内面	外面	
257	22	甕底部	角砂閃石粒	淡灰褐色	茶褐色	不	明	12層
258	22	甕底部	角石閃石英	黑褐色	赤褐色	不	明	表土
259	22	壺底部	角微閃石粒	淡黒褐色		不	明	底径7.1cm 12層
260	22	壺底部	角閃石英	黄褐色		平滑ナデ	縦方向ミガキ	底径5.8cm 12層
261	22	底部	微砂粒	淡黃灰色	黃褐色	不		表土
262	22	壺底部	石角閃石英	灰褐色		不明	ミガキ	復元底径6.5cm 表土
263	22	壺底部	角閃石砂粒多量	黄白色		不明	ミガキ	復元底径5cm 12層
264	22	壺底部	微砂粒	灰黄色		不	明	復元底径5.3cm 12層
265	22	底部	砂粒多量	黒灰色	暗茶褐色	ナデ	縦方向ハケ目	復元底径4.5cm 表土
266	22	甕底部	角閃石石英多量	黄白色	黒褐色	不明	縦方向ハケ目	表土
267	22	甕底部	角閃石石英多量	黄白色		不明		表土
268	23	鉢	角閃石、長石白色砂粒	淡黄橙色		ミガキ	ミガキ	復元口径20cm 丹塗り 後期 表土

遺物番号	挿図番号	器種	法量(cm)			成形	絵付釉薬	文様	製作地	製作年代	備考
			口径	器高	底径						
269	24	陶磁器皿	—	—	(7.3)	ロクロ	染付・透明釉	見込丸	肥前	1630~1650年代	
270	24	陶磁器碗	—	—	—	手づくね	染付・透明釉	外面唐草	肥前	17C前半	
271	24	陶磁器碗	—	—	—	ロクロ	染付・透明釉		肥前	17C代	
272	24	陶磁器碗	—	—	—	ロクロ	灰釉	外面梅樹	肥前	17C末~18C前	陶胎染付
273	24	陶器皿	(12.7)	3.3	(4.4)	ロクロ	灰釉		肥前唐津	1600~1630年代	溝縁皿底面露胎
274	24	陶器皿	—	—	(4.0)	ロクロ	灰釉		肥前唐津	1600~1630年代	見込みに砂目底面露胎
275	24	陶器塊	—	—	(4.1)	ロクロ	灰釉		肥前唐津	1590~1610年代	
276	24	陶器塊	—	—	(4.9)	ロクロ	透明釉		肥前	17C前半	京焼風陶器、吳器手碗
277	24	土師皿	(10.4)	1.8	(4.6)	手づくね			在地	16C後半~末	京都系土師器 淡茶褐色、胎土に角閃石を含む
278	24	土錘	—	5.8	—	手づくね					
279	24	土錘	—	—	—	手づくね					

2) C地区

C地区は森岡丘陵の東側、曲調査区の東端に位置する。丘陵突出部に挟まれコ字状に開口する低地部に相当する。現況は水田として用いられていた。調査面積はほぼ2,000m²で、調査区北東側部分に耕作土・床土下の茶褐色土層に掘り込まれた複数の溝状遺構と小ピット群、不定形土坑を検出した。調査区南西側は後世の削平のためか遺構は確認できなかった。

溝状遺構

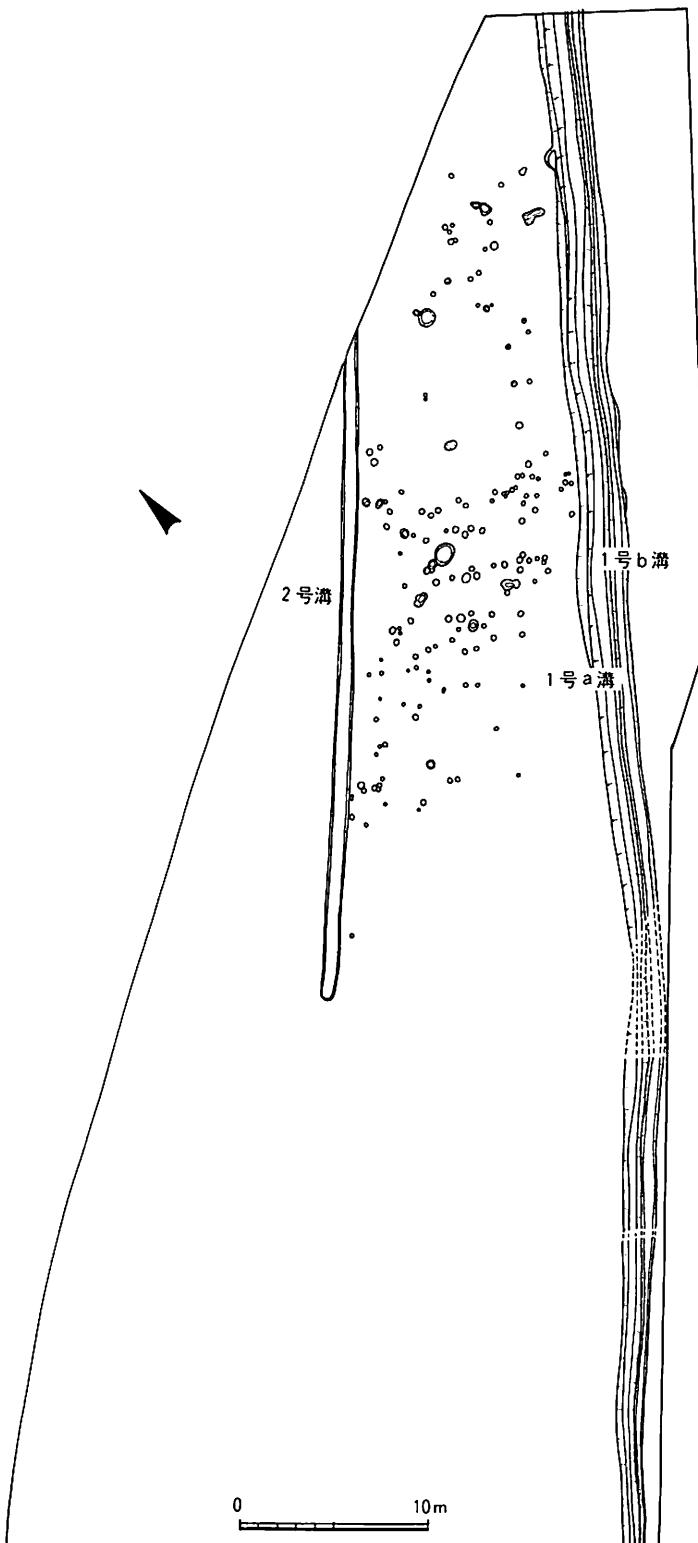
2条の溝状遺構を確認した。両溝とも南西方向から北東方向へ展開する。

1号溝

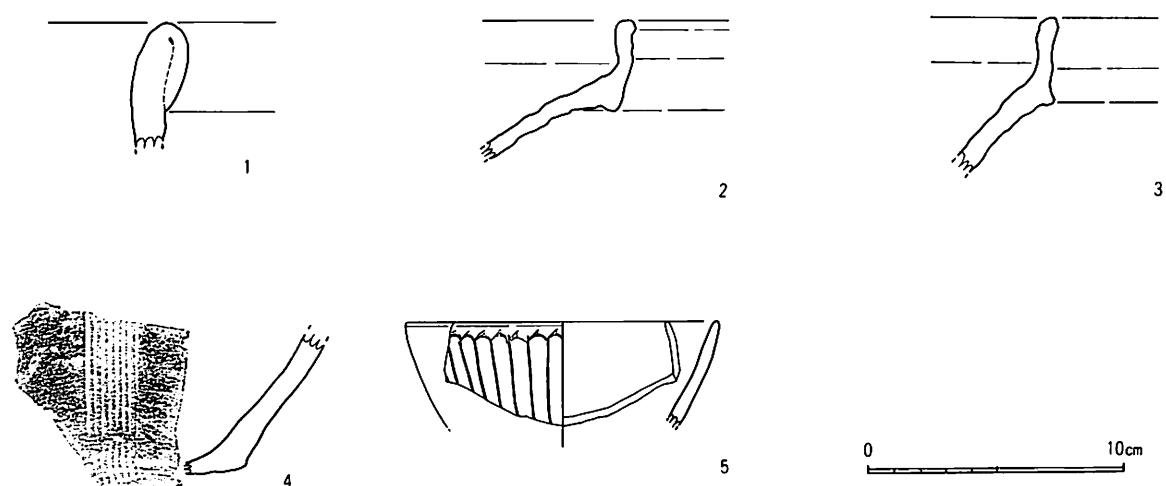
1号溝は調査区の南面に沿うような位置で検出した。2号溝と同様南西から北東へ直線的に設けられており、調査区内で80mを測るが両端はまだ調査区外へ続く。溝は大小2条の溝状遺構により構成されており、便宜的に北側に位置する規模の大きな溝状遺構を1号a溝、南側の溝を1号b溝と呼称する。これら2本の溝状遺構は相互に交差することなく、埋土も单一土層であることから切り合いによる新旧関係を積極的には認めることはできない。

1号a溝は残りの良い北東端で見ると断面U字状を呈し、上面幅2.5m、深さ60cmを測る。溝の底面は溝南西端から北東端に向って極くわずかながら低くなっている。その差は約80cmである。

1号b溝は、検出面での幅0.7+αm、深さ約0.4mと1号a溝より小規模である。断面逆台形で底面は1号a溝よりおよそ20cmほど高い位置にある。埋土は1号a溝と酷似した単一土層の堆積が認められ、出土遺物の様相も1号a溝と大差ないことから1号a溝と1号b溝の時間差は極めて短期間ものであると考えられる。



第25図 曲遺跡C地区遺構平面図 (1/400)



第26図 曲遺跡C地区 1号溝出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第26図1~5)

溝の埋土に遺物は殆ど含まれていなかったが、溝の時期を示唆する少量の土器が出土している。4は1号b溝の埋土から出土した備前擂鉢の底部片で、備前甕口縁部片(1)、備前擂鉢片(2~3)、中国産青磁碗(5)などは1号a溝の底面付近で発見された。その他に、瓦器質鉢、磨滅した瓦片、16世紀後半に比定される京都系土師器皿の口縁部破片等が出土している。これらの備前甕や擂鉢は間壁編年のIV~V期に比定されるものであり、5の中国産青磁碗が15世紀~16世紀中頃に比定できることから、溝状遺構は16世紀後半前に埋没したものと考えられる。

以上、溝状遺構の用途の面では、現段階においてその性格を特定することは困難であるが、溝の埋土観察によるかぎり、水路として用いられた形跡はなく、他の用途を想定するべきであろう。

2号溝

2号溝は、1号溝の北西部にほぼ並行する状況で検出している。溝は調査対象区のほぼ中央で終結するが、他の遺構の遺存状況を考慮すると本来存在していたものが、欠失している可能性が高い。

溝は検出面での幅約0.8mを測る。溝は一連のものではなく、溝底は一貫していない。特に調査区端付近では、溝底が進行方向に立ち上がり、連続した長土坑のような様態を示している。出土遺物には、胎土目唐津溝縁皿、京焼風陶器呉器手碗片、内野山窯産の陶器皿片などがあり、その様相から17世紀後半~18世紀初頭頃の所産になるものと推定される。

機能に関しては、1号溝と同様に水路的な機能は想定できず、他の用途の想定が必要である。

小ピット群および不定形土坑は調査区の北部に集中しており、その配置からみて建物の柱穴や墓の類とは考えられない。ピットの埋土からは時期を確定するような遺物は出土していないが、埋土の色調や検出状況から見て溝状遺構とほぼ同時期のものと思われる。

表10 C地区出土遺物観察表

番号	挿図番号	器種	成形	備考
1	26	陶器大甕	ロクロ	焼締
2	26	陶器擂鉢	ロクロ	"
3	26	陶器擂鉢	ロクロ	"
4	26	陶器擂鉢	ロクロ	"
5	26	青磁碗	ロクロ	復元口径12.2cm 龍泉窯劍先蓮弁文

第IV章 曲遺跡土壤のプラント・オパール分析により 推定した埋没水田土層

大分短期大学助教授 佐々木 章

はじめに

イネをはじめアワ・ヒエ・キビなど主要な雑穀類を含むイネ科植物の葉身中に存在する機動細胞は、その細胞壁に珪酸が沈積しやすく植物の種類ごとに特徴的な形状をしている。また、厚い珪化細胞壁は、植物が枯死した後も分解をうけにくいため機動細胞の形状を保ったまま永く土壤中にとどまっている。そのため、土壤中に残った珪化細胞の化石（プラント・オパール）を顕微鏡下で検出することで給源植物を推定する事ができる。さらに、プラント・オパールが全て土壤中に残っていると仮定できる場合には、現生植物中の珪化機動細胞密度を使って土壤中のプラント・オパールの量を給源植物体重に換算することにより、過去のイネ科植生やイネ科作物の生産量を推定することもできる。このような方法をプラント・オパール定量分析法と呼び、1970年代後半から発掘があいついだ各地の生産址遺跡の土壤の分析を行ってきた。さらに進んで1980年からは本格的な発掘調査に先だってプラント・オパール分析を行うことにより埋没水田土層を発掘以前に予測する実験（水田探査法）が開始され、夫敷遺跡（島根県）・若江北遺跡（大阪府）・垂柳遺跡（青森県）などで成功をおさめた。その後多くの研究が積み重ねられているが、プラント・オパール水田探査結果と本発掘で確認された水田遺構の検出結果は一致する場合が多く、プラント・オパール水田探査は事前調査法として高い評価を得ている。さらに、大分県・国東町の安国寺遺跡では、水田遺跡範囲確認にプラント・オパール水田探査法を援用した。遺跡指定地周辺に20mのメッシュを組み、それぞれのメッシュの交点で研土杖を用いて深さ1.5mまでの土壤を採取して、そのプラント・オパール分析の結果から水田の範囲を推定した。最終的には考古学的な発掘調査に待つものの、埋没水田作土層の可能性を発掘に依らず示唆できるのは、今のところプラント・オパール分析をおいてほかはない。

今回、弥生時代と考えられる住居跡と溝状遺構が検出された曲遺跡土壤のプラント・オパール分析を行ったので報告する。

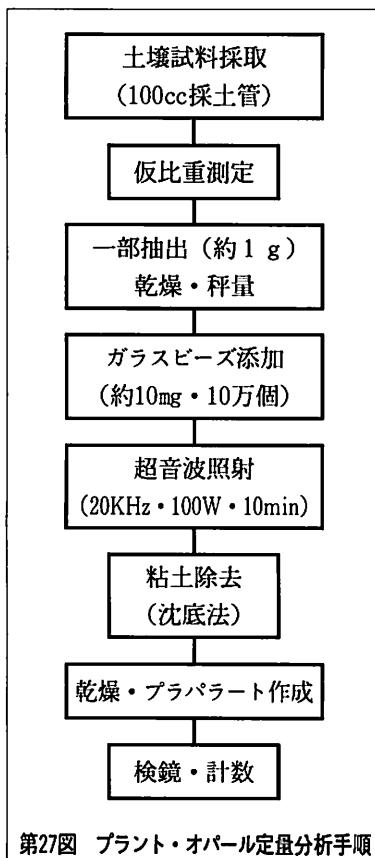
分析に供した土壤試料は、弥生時代の構の南西側に残る壁面と溝の底部で採取した。溝の西側からは住居跡が検出されてないことから水田として利用されていた可能性が指摘されていた場所である。

分析方法

第1層から第11層までは水田土層に特徴的な有機物含有層と鉄やマンガンの集積層の累積で構成されており、断面の観察から水田が埋没した可能性が認められる。採土地点の南側に4層が覆う近世の溝が認められる。12層は黒色で有機物の含有量が高い粘土層である。13層は暗褐色の粘土層で12層から漸移する弥生中期に比定される遺物が検出される。この面から掘られた溝の北東側には柱穴が多数

表11 植物体中の珪化機動細胞密度

プラント・オパール 分析分類名	代 表 植 物	植物体中密度 (10 ⁴ 個/g)
イネ属	イネ <i>Oriza sativa</i>	3.40
ヨシ属	ヨシ <i>Phragmites communis</i>	1.44
タケ亜科	ゴキダケ <i>Pleioblastus Chino</i> <i>var. virides f. pumilis</i>	20.83
ウシクサ族	ススキ <i>Misanthus sinensis</i>	2.79



第27図 プラント・オパール定量分析手順

検出されている。溝は小礫と砂のラミナ層が充填しており、底部には有機物を含む粘土層も認められる。

プラント・オパールの大きさは $50\text{ }\mu\text{m}$ と微小なので、土壤試料採取にあたっては試料が汚染されないように細心の注意が必要である。これらの土層ごとに採取した試料は採土管につめたまま研究室に持ち帰り第27図に示す方法によって定量分析を行った。

分析結果及び考察

採取した土壤試料のプラント・オパール分析結果を給源植物中の珪化機動細胞密度（表11）によって植物体重に換算して第28図に示す。単位は10a ($1,000\text{ m}^2$) 深さ1cmの土壤中に埋没した植物の地上部乾物重 (t) で示した。

西壁では1～11層の全ての土壤試料からイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。特に1～9層では $1\text{ t}/10\text{ a}/\text{cm}$ をほぼ越えている。各地で検出された水田遺構土壤のプラント・オパール分析結果から経験的にイネ粉量に換算して $1\text{ t}/10\text{ a}/\text{cm}$ をほぼ越える場合は水田作土の可能性が高い。土層の観察結果などを総合的に考察すると、1～5層はいずれも作土層として利用されていた可能性が高い。6層はイネ機動細胞プラント・オパールがやや少なく、層も薄くて鉄分により黄褐色を示しており、5層の犁床層であった

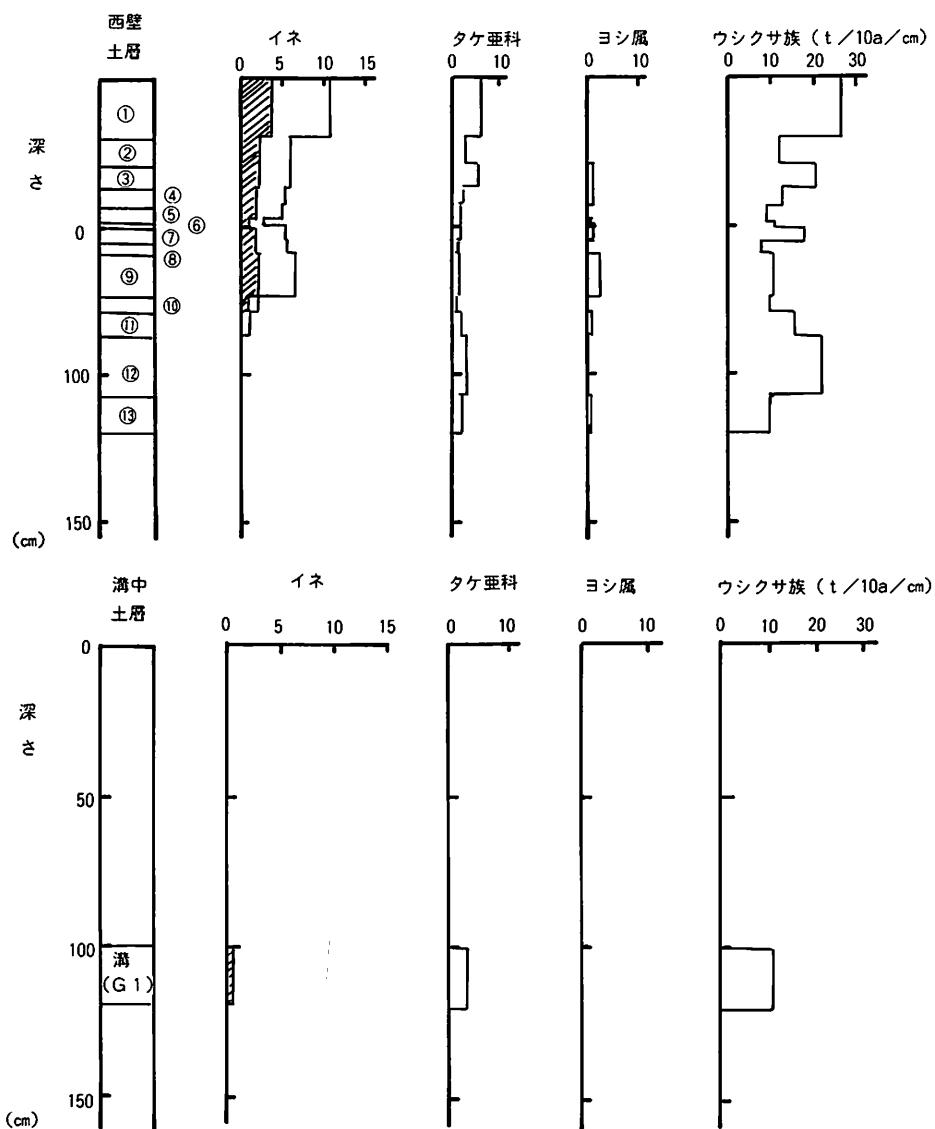
と考えられる。また7層も作土と考えられる。8層は黄褐色を示すことから犁床層と考えられるが、イネ機動細胞プラント・オパールの密度が高いので、それ以前には8層も作土であったと考察される。さらに9層は15cmとやや厚いが、イネ機動細胞プラント・オパール密度から長期にわたって作土層として使用されたと考察される。10層には鉄の集積による黄褐色化が認められる上に、イネ機動細胞プラント・オパールが少ないとから9層の犁床層と考察される。11層は、イネ機動細胞プラント・オパール量が発掘水田として経験的に知られている値に比べて少ないので、作土層とは言い切れない。周囲に水田があってイネ機動細胞プラント・オパールを多量に含む土壤が流れ込んだ可能性も指摘される。また水田作土であったとしてもごく短期のもので、長期にわたる安定した水田とは考えられない。さらに下層の12層は黒色であり、13層は暗褐色であった。これらの土層から弥生時代の遺物が検出された。溝の東側には柱穴群が検出された、この溝は発掘調査の範囲内では柱穴群と一線を画すように流れていることから溝の西側には弥生水田が営まれていた可能性が論議されたが、イネ機動細胞プラント・オパールが検出されなかったので弥生水田とは考えにくい。一方、溝中の最下層を形成する有機物の多い土壤 (GI) の分析では、ごく少量のイネ機動細胞プラント・オパールを検出した。水田作土層の密度に比べるとごく少量ではあったが、水路の上流で水田が営まれていた可能性が指摘される。

タケ亜科は、イネ科から分離してタケ科とする見解もある。タケ亜科植物を大別すると、竹林を構成するタケ類、ブナなどの林床や笹原を構成するササ類、南方に多く叢生するバンブー類に分けられる。プラント・オパール分析でも詳細にわたる分類は確立されていないので、まとめてタケ亜科とした。分析結果は、1、3、12、層に多く、10、8、6層などで少ない。12層は例外であるが、作土層と推定された層でタケ亜科が多く、犁床層と推定された層に少ない。12層を含め、地層であった期間を反映しているようで興味深い。付近にタケ亜科が育成していて毎年タケ亜科の葉身が堆積したもの

と考察される。

ヨシ属には川岸に近い水中からやや乾燥気味の堤防までの水辺に自生するヨシと流れの速い水中に自生するツルヨシがあり、プラント・オパールでもおおよそ分類できる。検出したのはヨシがほとんどであったので分析値はまとめて示した。9層に比較的多いが他は少ない。イネの密度が高く安定した水田と認められる層のうちで最も古い9層のヨシ属が多い点は興味深い。地形の変化でヨシ属が群生するようになった土壤を使って水田が開発されたものであろう。ウシクサ族には、ススキ・チガヤなど路肩や堤防、草原などに普通のイネ科植物が含まれる。いずれの層からも比較的に多量に検出されたが、1、12、3層に多く、7層もやや多い。12層を除くといずれも水田作土層と認められた層である。周辺に育成したこれら植物遺体がそのまま、あるいはプラント・オパールになって長期にわたり作土層に流入した結果であろう。黒色の強い12層は水田層とは認められないがウシクサ族の検出量が多い。ヨシ属は少なく、タケ亜科もそれほど多くない。やや乾燥した草原あるいは荒れ地であったと考えられる。有機物もその時に集積したものであろう。

弥生時代の柱穴群に付随する溝土からイネ機動細胞プラント・オパールが検出されたことから、おそらく溝の上流側に水田があったと推定される。住居を使用していた期間に洪水があり、この溝は流



第28図 プラント・オパール密度から推定した植物量

れてきた砂礫で上端まで埋没したと推定できる。溝に堆積した砂礫には流水中の堆積を示すラミナが認められるが、柱穴検出面では堆積は水平に切られている。溝中に限らず、住居跡(?)にも礫が覆いかぶさったことが推定されるが、礫が検出された部分はわずかである。おそらく洪水後の復興作業で礫の除去が行われたためと考察される。このように復旧作業が行われた形跡が認められるが、大規模な洪水であったため水路はついに放棄されたと考えられ、住居も放棄されたのではないだろうか。遺跡では住居としての使用が放棄された後、12層に対応するウシクサ族の育成するやや乾燥した環境が出現する。

その後、11、10層を使って稻作が営まれた可能性がある時期もあったが、安定な水田が営まれたことが明確なのは9層になってからである。その後は、洪水があってもそのつど復旧して、継続して水田が営まれてきた。

プラント・オパールの分析結果を植物体重に換算して示した第28図の横軸に土層厚を乗ずると、その層に含まれる植物体重を推定する事ができる（表12）。さらに、土層の堆積時期が明らかになれば年間収量の変遷をあとづける手がかりが得られよう。また逆に、年間収量が推定できれば、水田の使用期間の長短を知ることもできるだろう。なお、この計算には注意が必要である。前提条件として、イネが毎年作付けられ穂刈で収穫するなど、機動細胞を含む葉身の全量が圃場に残される場合を想定している。株刈であったとすれば機動細胞は葉身とともに圃場外に持ち出されているので、圃場に残される機動細胞は生産された機動細胞の5%にも満たない。そのため、実際に収穫されたイネ粉は、圃場に残された機動細胞プラント・オパールから推定した値のおよそ20倍になる。いま土層ごとの堆積年代は明かでないが、たとえば9層のイネプラント・オパールは、イネ粉量に換算すると2.29 t / 10 a / cmとなり、層厚が15なので全量は34.35 t / 10 a になる。近世の収量が1.2石から1.8石程度（180 kg / 10 a ~ 270 kg / 10 A）と言われ、弥生から古墳にかけての年間収量を100 kg / 10 a と見積もれば9層は300年間以上水田として使用された計算になる。また、第1層から13層まですべての層を合計すると188.4 t / 10 a になる。2000年かかって堆積したと仮定すると年間収量の平均は94 kg / 10 a と計算できる。穂刈から株刈に移行した時期は明かではないが、平安時代であったとしても1000年間は株刈が行われた事になる。単純に188.3 t / 10 a の1/2の94 t / 10 a が株刈であったとすると、実際の収量は20倍の1883 t / 10 a となり、穂刈とあわせると1977 t / 10 a と計算できる。年間収量は988 kg / 10 a になって現在の収量500 kg / 10 a と比較しても多すぎる。おそらく株刈に移行してもかなりの量が堆肥などに加工されて圃場に還元されていたと推定できる。

今後、土層ごとの堆積年代をできるだけ明らかにする努力が必要であろう。さらに、多くの遺跡の分析例を蓄積することも必要であろう。ともあれ今回貴重な遺跡土壤分析の機会を与えていただいた関係諸氏に感謝の意を表したい。

表12 曲遺跡土壤のプラント・オパール分析結果から推定した埋没植物体総重量

土層名	土層厚 (cm)	埋没植物体総重量 t / 10 a					備 考
		イネ地上部	イネ(粉)	イネ(糊)	ヨシ属	ウシクサ族	
西壁							
①層	20.0	213.0	74.6	74.5	0.0	536.0	作土層
②層	9.0	53.2	18.6	18.6	0.0	107.9	黄褐色土層
③層	8.0	47.1	16.5	16.5	9.3	166.9	褐色土層
④層	6.0	31.1	10.9	14.2	6.7	75.6	白シルト層
⑤層	5.0	24.1	8.4	9.2	0.0	44.0	青白シルト層
⑥層	2.0	5.2	1.8	3.4	1.2	21.7	黄褐色土層
⑦層	5.0	26.8	9.4	8.7	5.8	91.3	茶褐色土層
⑧層	4.0	21.6	7.6	4.8	0.0	30.1	黄褐色土層
⑨層	15.0	98.1	34.3	22.7	35.4	159.3	茶褐色土層
⑩層	5.0	10.1	3.5	3.5	0.0	49.1	黄色土層
⑪層	8.0	8.1	2.8	16.8	8.2	125.4	暗茶褐色土層
⑫層	20.0	0.0	0.0	67.3	0.0	444.2	黒褐色土層
⑬層	13.0	0.0	0.0	27.7	9.0	125.7	赤褐色土層
溝中							
G I	20.0	4.0	1.4	23.8	0.0	86.4	暗黒褐色土層

第V章 まとめ

曲遺跡A地区

今回の調査では、弥生時代に比定される溝状遺構、時期の不明な土坑群などを検出した。弥生時代のものとしては、暗黒褐色を呈する遺物包含層を検出し、下面において土坑1基を確認することができた。溝状遺構、土坑、小ピット群は弥生土器を包含する12層の下面にあたる13層に掘り込まれており、これらは同時期のものである可能性が高い。ほぼ南北に走る溝は人工的なもので水路として用いられていたものと考えられる。第6図の土層断面図に示されるように、砂層で埋まっており、その上面と12層の関係は文字どおりの「整合面」を形成している。13層を基本とする当時の生活面が短期間に削平され、その後一気に12層で覆われたことを示唆している。12層に包含された土器は中期中葉のものもわずかながら混じるが、基本的には弥生中期初頭～前葉を中心にしており、溝が使われていた時期や小ピット群の時期はこれよりは遡らない。溝状遺構には、水性堆積によると考えられる砂層の堆積がみられ、またその最下層を形成する有機物が多いG Iのプラントオパール分析から、佐々木章氏は水路の上流で弥生水田が営まれていた可能性に触れている。ところで、本調査区から直線でわずか600m程離れた森岡丘陵には、弥生・古墳、古代、中世の複合遺跡である「守岡遺跡」が存在する。弥生時代に限れば、約6基の住居跡、77基の竪穴・土壙が調査されている。円形・方形・楕円形等の貯蔵穴が40基程あり、弥生時代の竪穴住居跡は、すべて中期に属する。曲遺跡A地区の溝（水路）や付近に推定される「弥生水田」の経営主体としては、この守岡遺跡の弥生村が現在のところ最も有力な候補となる。今回の調査では具体的な水田遺構を検出するには至っていないが、こうした水田遺構の探索が今後の周辺調査での課題となろう。

「時期不明の土坑」群については、文中でも触れたように現状ではその用途、性格を明らかにすることはできない。時期的には、土層別の具体的な時期比定が困難な現状では、おおよその年代推定しかおこなえないが、当該土坑が掘り込まれる前後の土層の出土遺物から、これらの土坑が中世末期、すなわち戦国期に比定される可能性も考慮される。ちなみに出土層を特定できないが京都系土師器皿破片などの出土も調査区内で認められている。当地域の歴史的背景を考えた場合、このような時期想定の面からの類例探索もおこなっていく必要があろう。

C地区

C地区的調査では、16世紀代の1号溝状遺構、ならびに17～18世紀初頭の所産と推定される2号溝状遺構を検出した。

当調査区の西側には室町時代の掘立柱建物跡群が検出されている守岡遺跡が所在する。守岡遺跡は、「豊後国志」に記載されている「守岡堡」と考えられている遺跡であり、この想定が妥当であるなら、天正14年の豊薩戦争時に重要な位置を占めていた場所にあたる。同書によれば戦闘の記述はないが、戸次河原の合戦での大敗がなければ、府内の最終防衛線としての機能を担っていたはずである。今回の調査において検出されている1号溝は、時期的にこの豊薩戦争に極めて近似した時期の所産であり、また、確実に1587年以降に比定される遺物の出土が認められない点は重要である。つまり、豊薩戦争での陥落前に構築され、時を置かずして埋没した可能性を指摘することができる。このような点から水路機能を想定することができない現状にあっては、1号溝を戦略上のなんらかの施設に伴う遺構と考えることも可能といえよう。1号溝が位置的に守岡遺跡とどのような位置関係にあり、当時存在し

た戦略上の他の施設とどのように有機的な関連を示すのか、周辺地域の調査においてこのような視点をもったトータルな分析も今後必要であると考える。

なお、中世の曲地区は、弘安8年（1285）の『豊後国図田帳』に「勾保四十六町一段三百歩、地頭御家人勾兵衛次郎惟益、法名智行。同藤左右衛門尉尚泰 法名行日」と記されるように勾一族によって知行されていたと考えられており、上述の掘立柱建物跡群を当一族の居館とみなす見解も存在する。

参考文献

第Ⅱ章

- 平凡社地方資料センター編『大分県の地名』日本歴史地名大系45 平凡社 1995
- 千田昇「大分平野のなりたち」『大分市史』上 1987
- 富来隆・中村俊一・杉崎重臣「庄ノ原遺跡」3 昭和37年 3月
- 牧尾義則・讃岐和夫他『野田山遺跡』三井不動産株式会社 1979
- 大分県教育委員会編『机張原遺跡・女狐近世墓地・庄ノ原遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 1996
- 大分県教育委員会編『下黒野遺跡』大分県文化財調査報告 1974
- 富来隆 他「弥生式時代の土器窯址」『大分市の文化財』7 1965
- 真野和夫・村上久和『浜遺跡』大分県文化財調査報告48輯 1980
- 松田政基他『多武尾遺跡』大分市教育委員会 1982
- 讃岐和夫・松田政基『尾崎遺跡』大分市教育委員会 1984
- 坪根伸也他『羽田遺跡』大分市営羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分市教育委員会 1993
- 高橋信武他『下郡桑苗遺跡』 大分県文化財調査報告書第80輯 1990
- 讃岐和夫・坪根伸也『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報1 大分市教育委員会 1990
- 讃岐和夫・坪根伸也『下郡遺跡群』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報2 大分市教育委員会 1991
- 讃岐和夫「海と里のムラ」『大分市史』上巻 大分市 1987
- 高橋信武他『下郡桑苗遺跡Ⅱ』大分県文化財調査報告書第89輯 大分県教育委員会 1992
- 高橋信武『雄城台－第8次発掘調査の概要』大分県教育委員会 1987
- 羽田野光洋『守岡遺跡』大分市教育委員会1979
- 羽田野光洋「東九州における弥生式土器研究－安国寺式土器の再検討－」『古文化談叢』5 1978
- 高橋 徹「廃棄された鏡片－豊後における弥生時代の終焉－」『古文化談叢』6 1979
- 高橋 徹 「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学』60号 1986
- 坪根伸也他『賀来中学校遺跡』 大分市賀来中学校プール移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分市教育委員会 1992
- 江田 豊他「荏隈遺跡」「大分県埋蔵文化財年報」2 大分県教育委員会1993
- 江田 豊他「下宗方地区遺跡群」「大分県埋蔵文化財年報」3 大分県教育委員会 1994
- 染矢和徳他『植田平石遺跡』大分県教育委員会 1994
- 真野和夫「蓬萊山古墳」「日本考古学年報」27 1974年版 1976
- 小田富士雄『昭和43年度緊急発掘調査概要－御陵古墳とその周辺』 大分県教育委員会 1969
- 小田富士雄『御陵古墳緊急発掘調査』大分県教育委員会 1972

田中祐介「東九州における古墳時代首長系譜の変遷と画期（上）」『大分考古』第7集 1995

杉崎重臣「木ノ上・高来山の横穴古墳」32・33 昭和39年 1

玉永光洋 「屋宗横穴墓」 大分県文化財調査報告書 74 大分県教育委員会 1985

池邊千太郎 「豊前・豊後の横穴墓形態変遷論」『大分考古』第3号 1990

池邊千太郎・塔鼻光司「長谷横穴墓群」 大分市教育委員会 1992

池邊千太郎「豊後の横穴墓」『風土記の考古学』4 同成社 1995

真野和夫・讃岐和夫「古宮古墳」大分市文化財調査報告 第4集 大分市教育委員会 1982

後藤宗俊「古宮古墳考-天武紀の大分君との関係をめぐって」『大分県地方史』第117号 1985

讃岐和夫「国指定史跡古宮古墳史跡整備に伴う発掘調査概報」 大分市教育委員会 1993

真野和夫「豊後国分寺跡」大分市教育委員会 1979

大分市教育委員会編 「国指定史跡豊後国分寺跡環境整備事業報告書」1992

渡辺澄夫「豊後国大分郡勝津留・津守莊・勾別府・種田莊-二豊荘園の研究」『大分県地方史』第23号 1958

富来隆「豊後の『国府』再考-方位論-」『大分県地方史』第112号 1983

第Ⅲ章

森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-形式分類と編年を中心にして-」『九州歴史資料館研究論集』4 1978

大橋康二 「肥前磁器の変遷-技法と器形からみた」『柴田コレクション展』(1) 佐賀県立九州陶磁文化館 1990

大橋康二 「初期伊万里磁器創世期における唐津焼との関連について」『佐久間重男教授退官記念中国史・陶磁史論集』1983

吉田寛他『府内城三ノ丸遺跡』大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 大分県教育委員会 1993

鋤柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器-模倣系土器生産の展開-」『中世近世土器の基礎研究』IV 1994

近江俊秀「各地の土器様相（2）京都」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編 1995

第V章

羽田野光洋「守岡遺跡」大分市教育委員会 1979

玉永光洋・小林昭彦他「安波城跡・下原古墳」 大分県文化財調査報告書 76 大分県教育委員会 1988

第VI章 付論

大分平野周辺の前期～中期の弥生式土器について

曲遺跡A地区からは小破片ではあるが多数の弥生土器片が出土している。これらは概ね中期に位置づけられるものであるが、大分平野周辺の弥生式土器編年の中今すこしの検討を加えてみたい。

ところで、弥生時代の大分県は弥生式土器の型式をはじめ、住居跡の形態、墓制、青銅器の有無等の文化要素を指標にして次の四地域に大別されている。第一（北部）地域：宇佐・中津・豊後高田を中心とした地域である。周防灘南岸の海岸平野が卓越した地域で、主に旧豊前に属する。

第二（東部）地域：国東半島東部から佐賀関半島にかけての別府湾岸地区と、臼杵・佐伯を中心とする豊後水道沿岸地区に二分される。旧豊後に属する。第三（南部）地域：大野川中・上流域を中心とする。黒色火山灰台地が卓越する。上流域は阿蘇外輪山の北部に接する。第四（西部）地域：日田・玖珠盆地を中心とする地域で、筑後川の上流域にあたる。

曲遺跡の所在する大分平野は上記の第二（東部）地域に含まれることになる。本地域の弥生式土器を高橋は弥生早期（1期）～後期（V期）の5期に大別している（高橋他『大分県史 先史篇II』24～37、107～114）。以下、曲遺跡にかかわる前期から中期にかけての編年を概述する。

前期初頭～中葉の段階は、弥生早期の「下黒野式」に後続し、かつ典型的な「下城式」成立以前の段階として、II-1期を設定している。これまで良好な遺跡、資料は知られておらず、具体例としては国東半島東岸の武藏町内田遺跡で出土した2個の壺形土器が提示され得るにすぎなかった（第38図13）。

これは、口縁部、頸部、胴部、底部の4分割成形が顕著な、いわゆる板付式タイプの壺で、肥厚口縁、頸部と胴部の境にある幅のある削出し突帯および平底を特徴とする。これらの壺は砂丘上に立地する内田遺跡の一石棺から副葬品として出土したもので、様式を構成する他の器種が不明であった。ところが近年の調査で、この段階の非常に良好な資料が下志村遺跡で発見されている。これは大分県大分市大字大在志村に所在した遺跡で、大野川左岸に位置する砂地の微高地に立地する。土地区画整理事業に起因する緊急調査が実施され、弥生前期の袋状ピット（1基）と、中世土壙墓（1基）、時期不明の方形土坑（1基）が検出され、弥生式土器、中世土師器（小皿他）、陶磁器片少量、中世人骨片が出土した。弥生土器は包含層出土のものであるが出土状況からみて比較的まとまった時期のものと考えられる。

注1 大分県教育委員会1991「大分県埋蔵文化財年報1-91年度

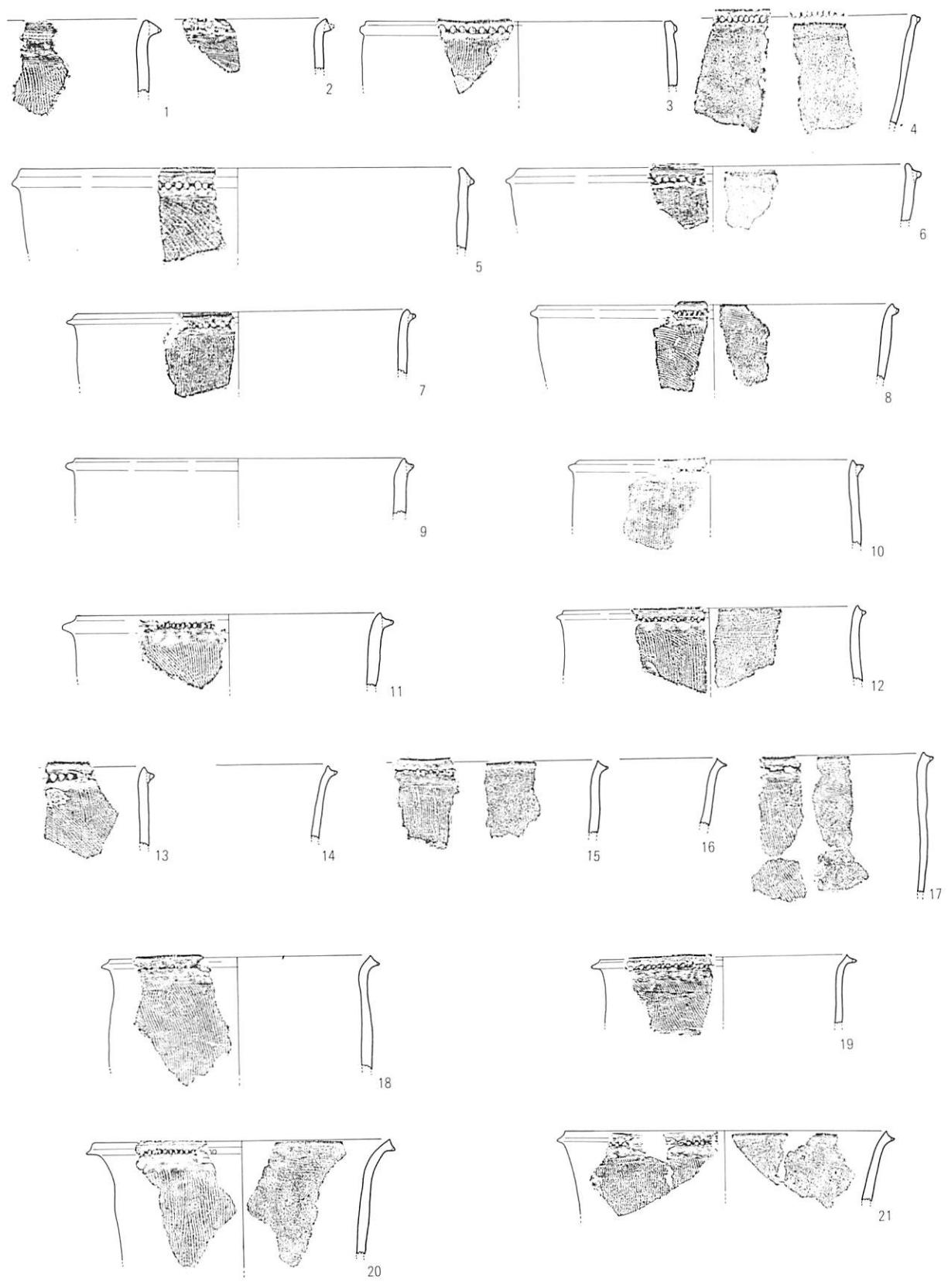
下志村遺跡出土弥生土器（第29～第37図）

器種としては壺、甕、鉢、高杯がある。

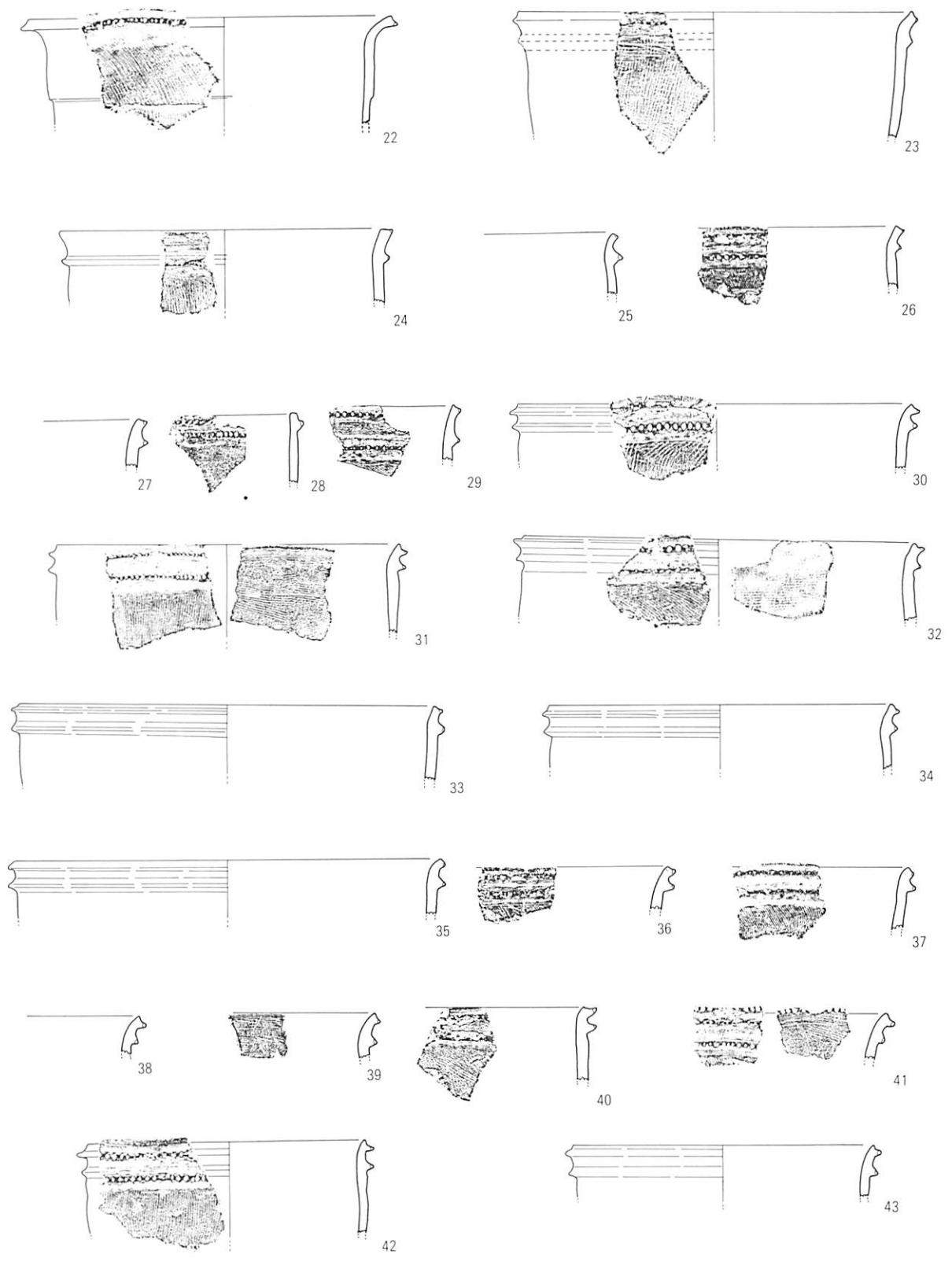
壺：口縁部形態や突帯等で下記のように分類されるが、全体的な特徴としては口縁部に最大径があり、胴部外面に細かい縦刷毛目、口縁部付近内面にも細い横刷毛目、色調は黄褐色もしくは茶褐色を基本とする。焼成は普通で、胎土にはカクセン石が含まれている。

1類（第38図32、33）直立する口縁部の上端を軽い横撫で平坦に仕上げ、その内・外端部に刻目を施したもの。

2類（第29図1～4）直立する口縁部の先端を尖り気味におさめて、その口縁上端部に接するように

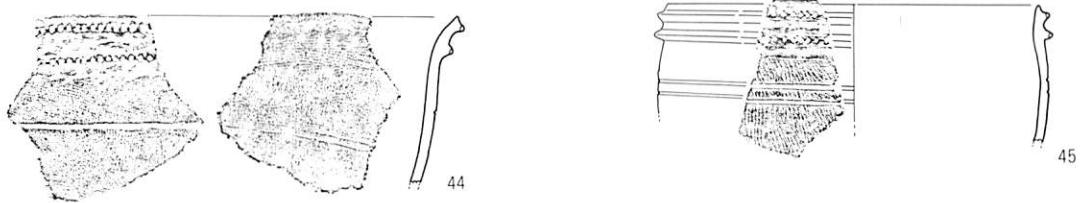


第29図 下志村遺跡出土遺物実測図 (1/4)

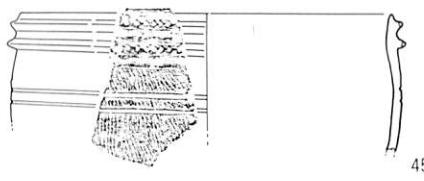


0 10cm

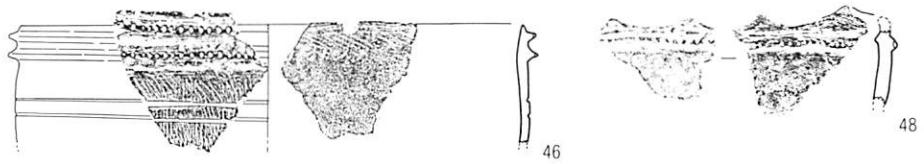
第30図 下志村遺跡出土遺物実測図 (1/4)



44



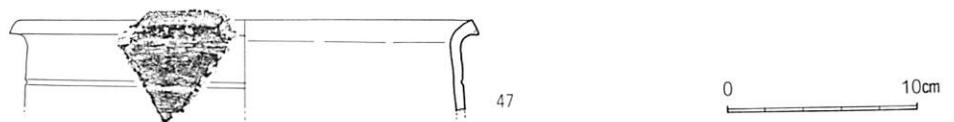
45



46

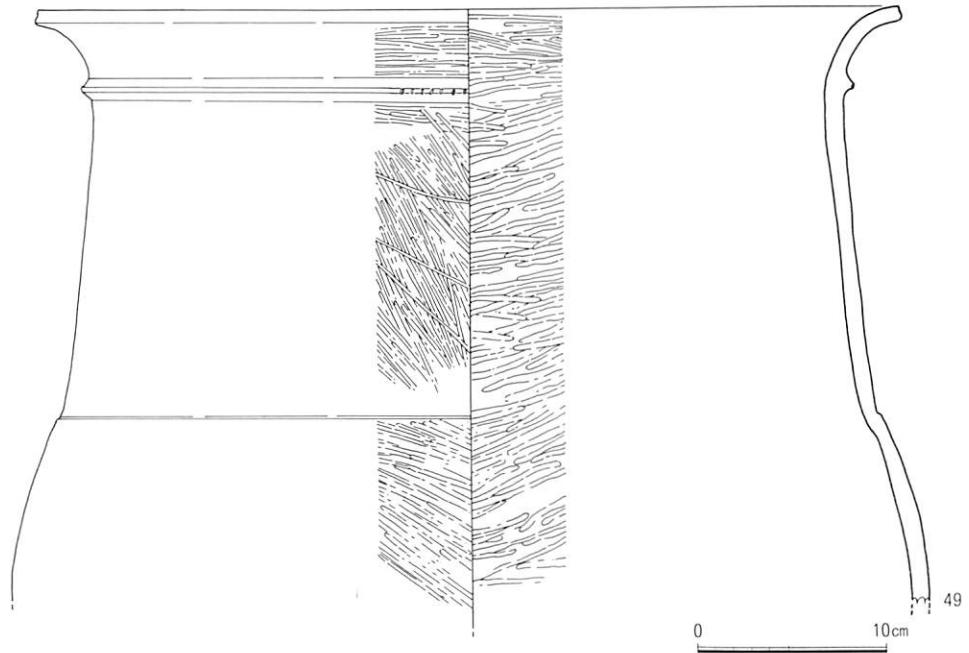


48



47

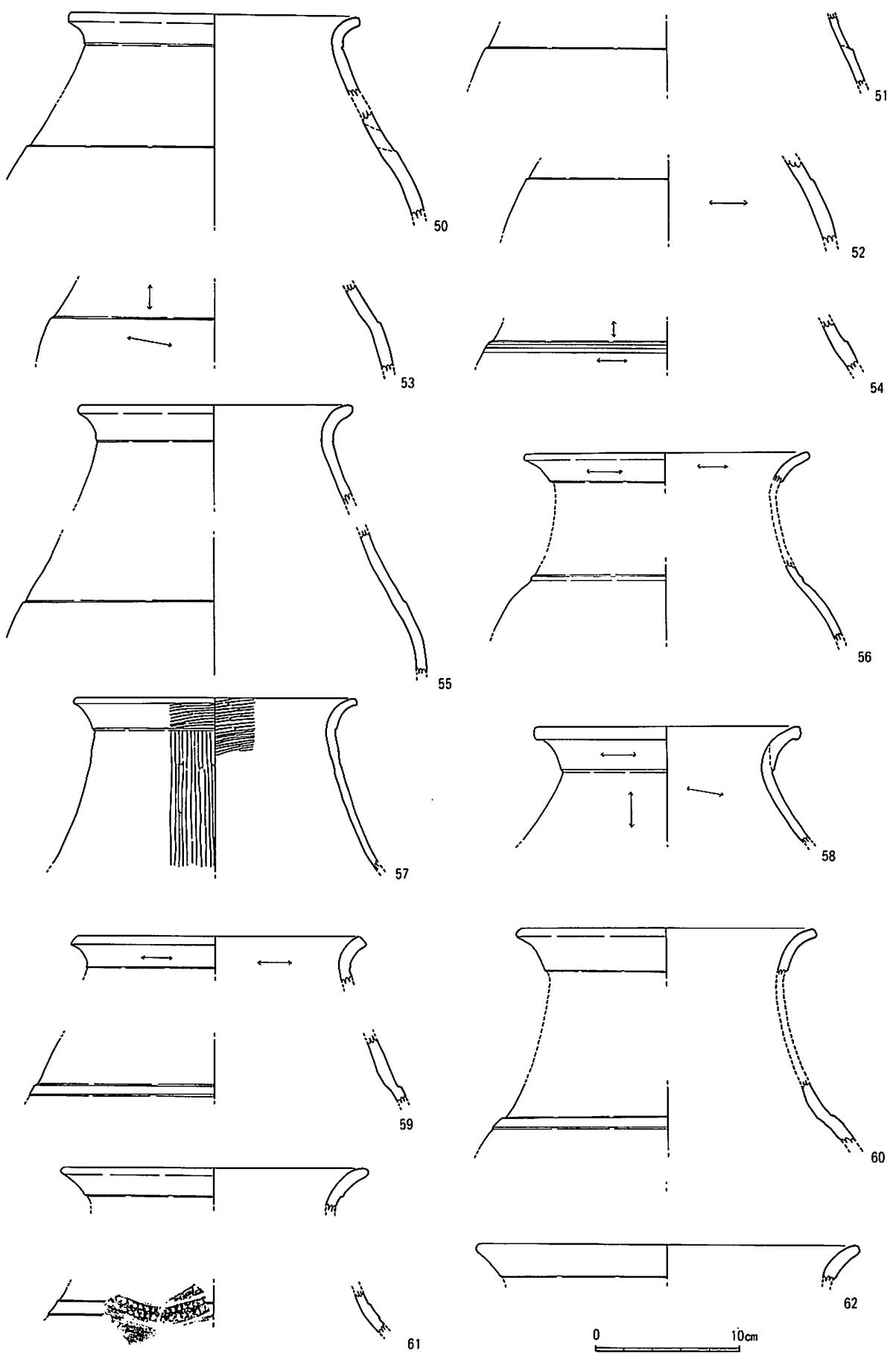
0 10cm



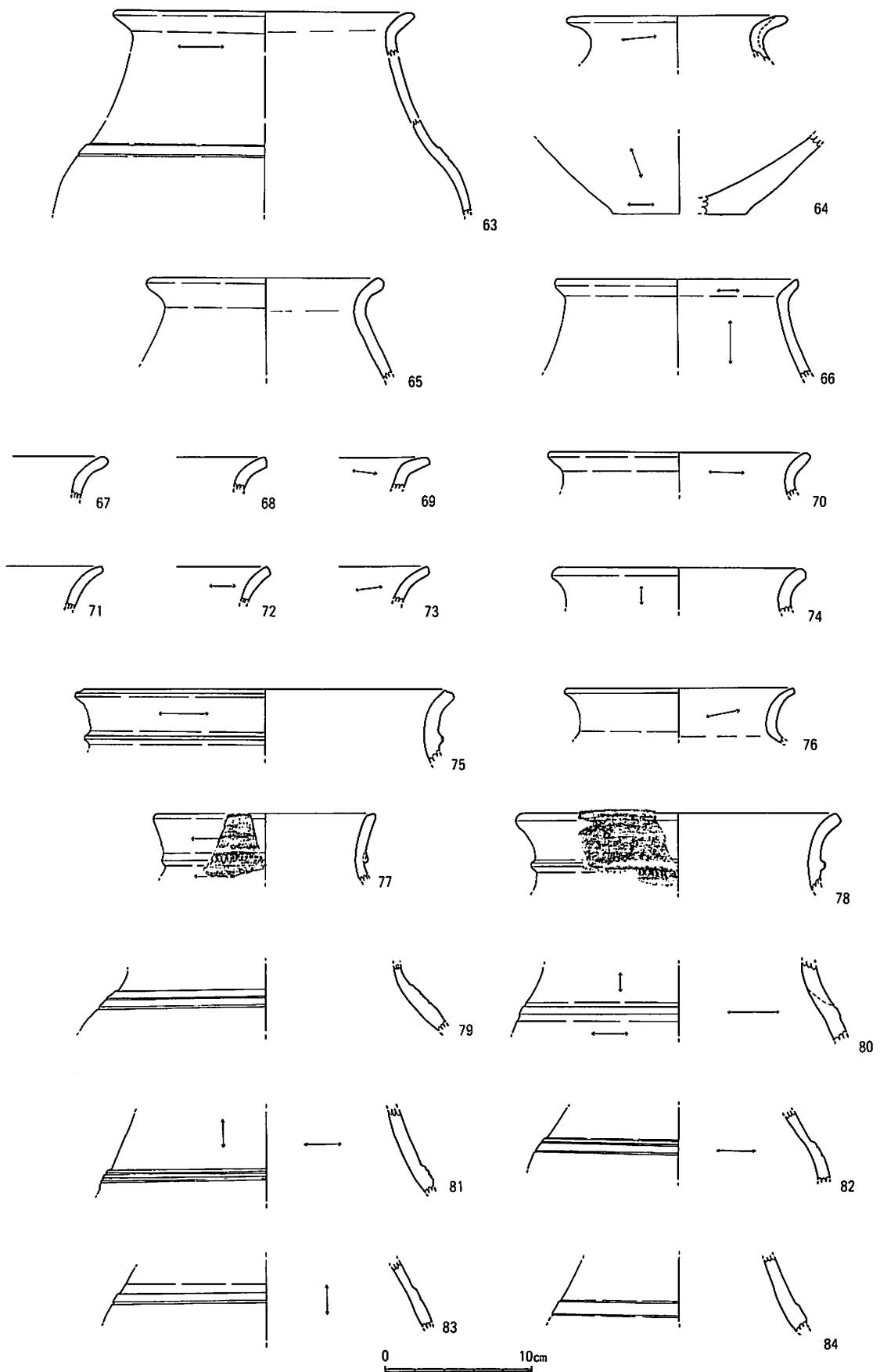
49

0 10cm

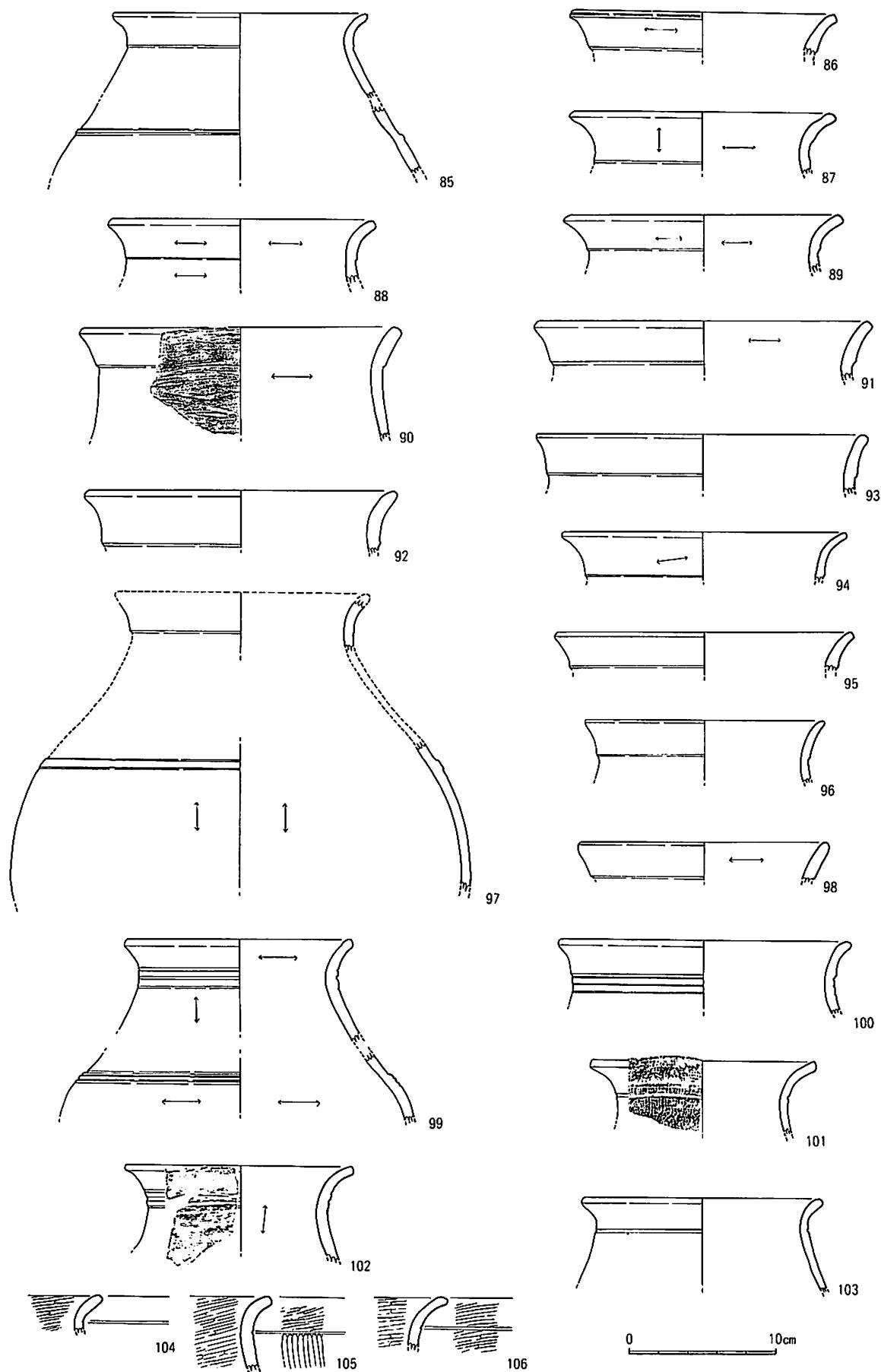
第31図 下志村遺跡出土遺物実測図 (1/4)



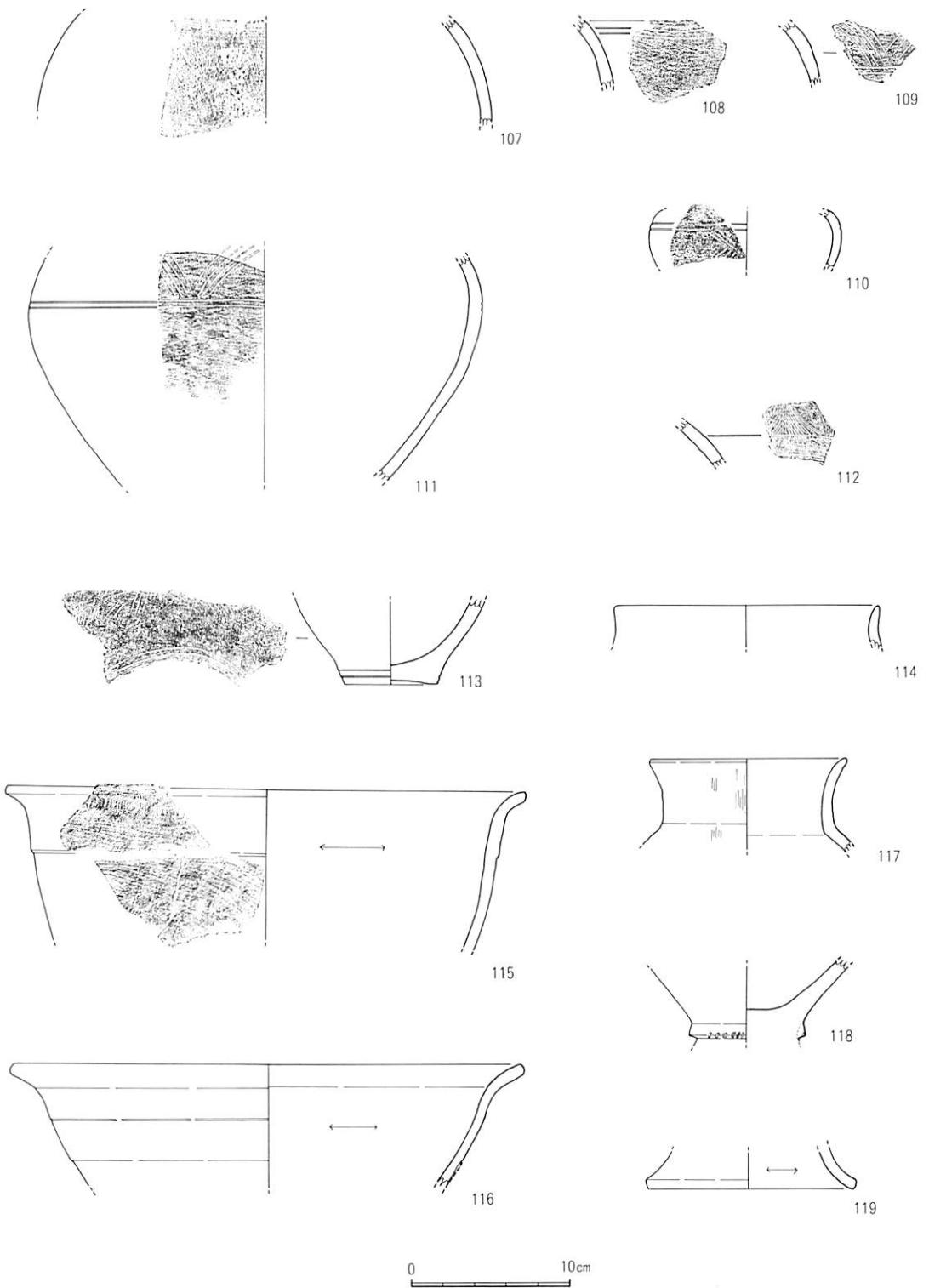
第32図 下志村遺跡出土遺物実測図 (1/4)



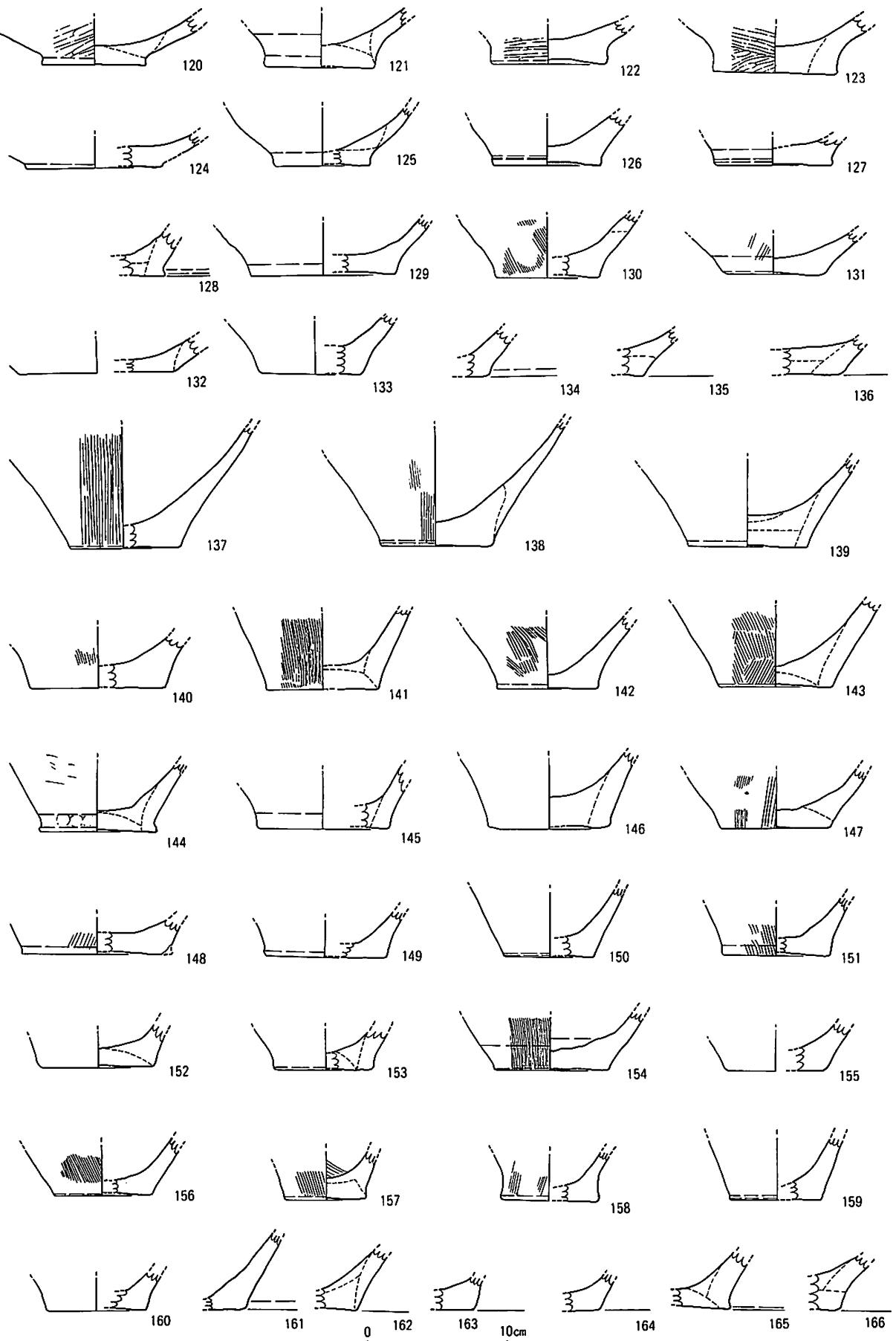
第33図 下志村遺跡出土遺物実測図 (1/4)



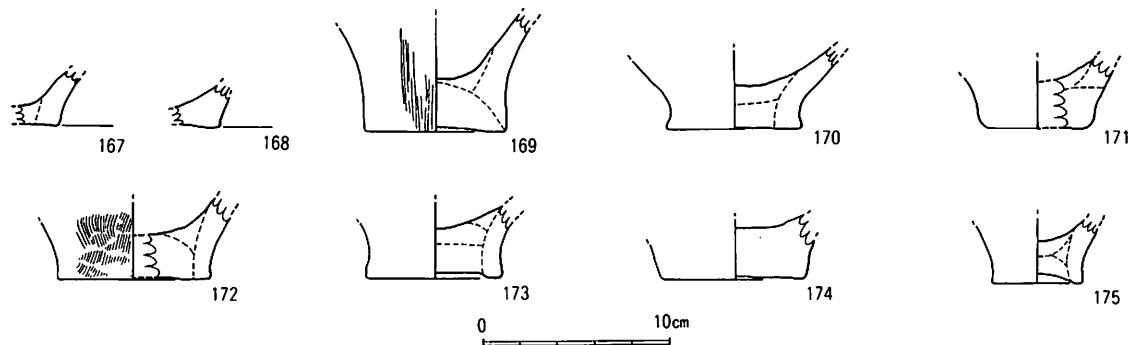
第34図 下志村遺跡出土遺物実測図 (1/4)



第35図 下志村遺跡出土遺物実測図 (1/4)



第36図 下志村遺跡出土遺物実測図 (1/4)



第37図 下志村遺跡出土遺物実測図(1/4)

1条の刻目突帯を張り付けているもの。

3類（第29図5～13）2類に類似するが、突帯の位置は2類よりもわずかながら下位にある。

4類（同14～21）口縁上端部を撫でながら外側に引き出し、そこに刻み目を施すもの。口縁部が直立するものと（14～17、21）、わずかながら直線的に外反するものとがある（18～20）。

5類（第30図22）やや長めで強く外湾する口縁部は、全体に肥厚しており胴部との境に段を形成する。口縁端部は外側に引き出され、刻目が施されている。

6類（同23～29）口縁部上端を平坦に仕上げ、口縁端部下に1条の刻目突帯を張り付けたもので、2類に比べると刻目の位置がさらに下位にある。

7類（同30～43）口縁上端部とその下位にあわせて2条の刻目突帯を巡らすもの。上位の突帯は口縁部上端の外側に直接刻目を施したものと、2条とも貼り付け突帯のものがある。

8類（第31図44～46）基本的には7類と同じだが、口縁部下4～5センチの位置に1条もしくは2条の沈線を巡らすもの。

9類（同47）口縁部は短く外側に屈曲しその下端に刻目をつける。口縁上端から4cm下に沈線を巡らす。

10類（同48）口縁部上端が波行し、上端よりやや下がった内・外面に刻目突帯を貼り付けている。

壺；壺は口縁部の形態やその他の要素で以下のように分類されるが、全体的に、おおむねその色調は黄褐色もしくは明澄褐色を呈し、胎土は精良で焼成も良好である。外面は比較的丁寧な磨きを、内面は平滑な撫で調整を施している。

1類（第31図49）大形の壺で、口径46cmを測る。緩やかに外湾する長い口縁部、わずかながら内傾を示す太い頸部、長胴気味の胴部、平底から構成される。口縁部と頸部の境に刻み目を施した貼り付け突帯を巡らし、頸部～胴部の境は段を形成する。内・外面とも丁寧な横・斜行の磨き調整が行われている。

2類（第32図50～55、57、58）短く外湾する口縁部、強く内傾する短い頸部、球形の胴部が特徴で、底部はおそらく第36図120～127のような円盤張り付け状の平底になると思われる。外湾する口縁部は肥厚が顕著なもの（同57、58）とそれほどでもないものがあるが、両方とも頸部との境に段を形成している。頸部と胴部の境にも段を持つ。

3類（同56）有段口縁部の外湾度が弱くなったもので、頸部と胴部の境に1条の突帯を有するもの

4類（第32図59～62、第33図63～74、第34図85～98）全体の器形は2類に類似するが、頸部と胴部の境にある幅広の削り出し突帯を最大の特徴とする。もっとも本当に文字どおり「削り出し」ているわけではなく、突帯の上下をヘラ状の工具で撫で押さえし、その結果として突帯が浮き彫り状に成形されたものである。口縁部の外湾度が弱く、頸部との境に段を残すもの（4類a 59～62）や口縁部が直線的に短く外反し、頸部との境の段が消失したもの（4類b 63～74、85）、あるいはまた口縁部

が立ち上がり気味で、頸部との境の段は認められるもの（86～98）に細分される。

5類（第33図75、77、78）立ち上がりのきつい口縁部と頸部の境に突帯を巡らすもの。

6類（第34図99～103）口縁部が立ち上がり気味で頸部との境や頸部～胴部との屈曲部に1～3条の沈線を巡らすもの。

なお、107～111のような胴部中央に沈線という描重弧文を施した破片があり、3類、4類、6類の壺の一部に有文のものが存在していたらしい。

その他：

鉢：（第35図115、116）外湾する口縁部は肥厚し、有段のもの（115）と沈線化したもの（116）とがある。

高坏：（第35図118）は高坏の頸部。脚部と坏部の境に1条の刻み目突帯を巡らす。

底部：（第36図120～166第37図167～175）120～136は壺の底部と考えられる。平底で外面は磨きを基調とし一部消し忘れた刷毛目が残る。137～175は甕の底部。外面に細かい縦刷毛目を施している。

以上、下志村遺跡出土の資料は包含層資料であり厳密な一括性という点においては問題が残るが、型式学的な処理によって今後の編年研究のたたき台になる程度には有用な資料と考える。詳細は別稿に譲るとしてここでは、下志村出土土器群を以下のように整理する。

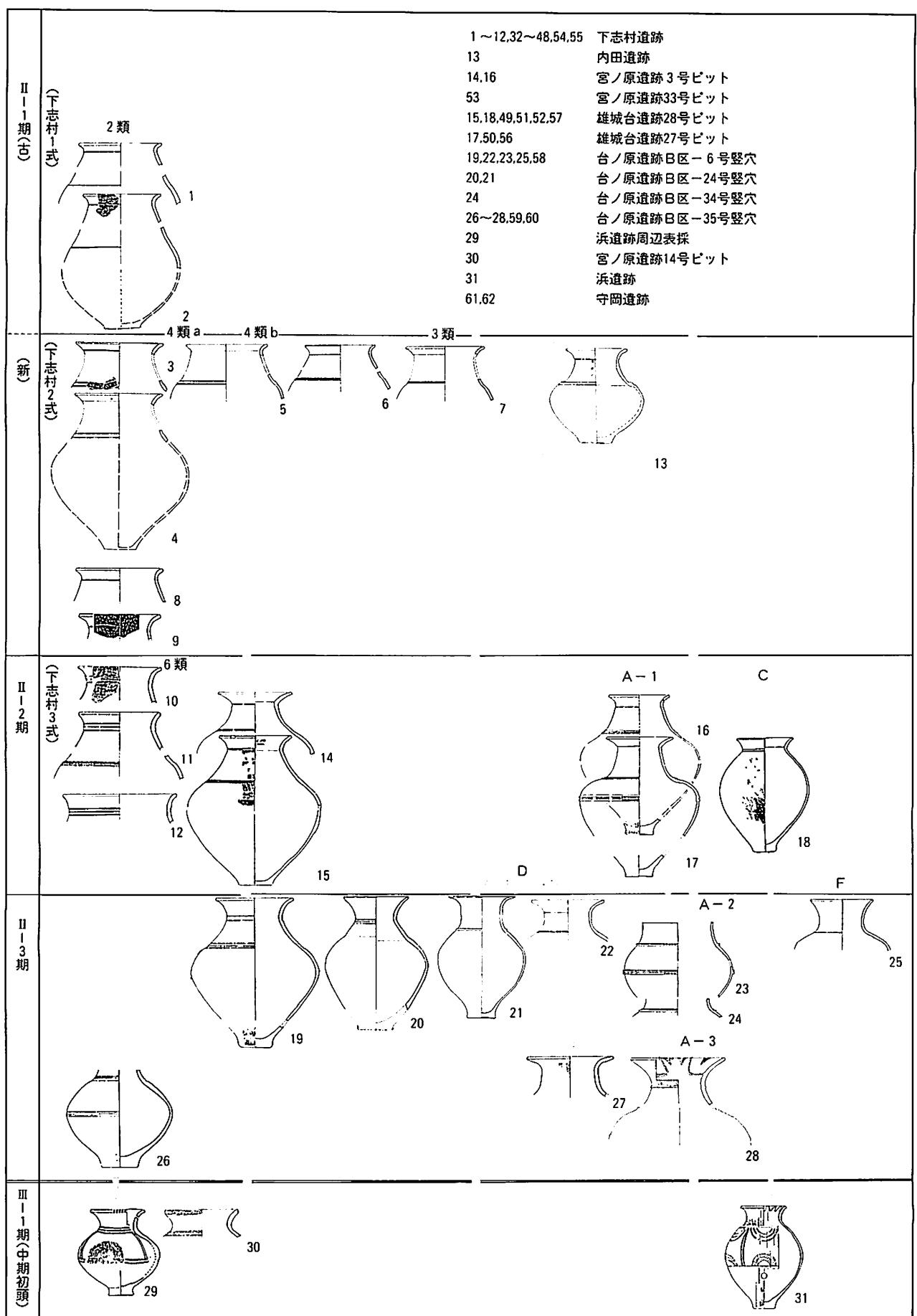
下志村1式；壺2類他

壺の特徴は、短く外湾気味でかつ頸部との境に僅かながら口縁部肥厚による段部を有し、内傾する太い頸部と球形気味の胴部との境にも段が認められる。底部は平底で、器外面には丁寧な磨きが施される。

下志村2式；壺3類、壺4類

頸部と胴部の境に削り出し突帯を有する壺4類は、これまで県内で殆ど出土例のないものである。完形品では前述したように武藏町内田遺跡で出土した2個の壺形土器が知られていただけで、その稀少性ゆえに格別注目されることはなかったが、下志村の出土によって少なくとも別府湾にこの種の壺が一定量存在することが確認されたことになる。壺4類は出土の壺のなかでは最も量が多く、下志村遺跡の主体を占める。これに伴う甕としては後述する下志村3式に比定される甕6類と甕7類の一部を除いたものが候補になるが、下志村1式の壺に伴う甕を特定出来ないため厳密なセット関係の把握は今後の調査に委ねたい。

下志村3式：壺5類、壺6類をこれにあてる。口縁部と頸部、頸部と胴部の境に沈線文を巡らす壺6類は安心院町宮ノ原遺跡3号ピットや雄城台遺跡27号ピットで類似のものが確認される。Ⅱ期-2の壺B類としたものに対応する。これらに伴う甕は、如意形口縁甕と、いわゆる下城式甕の2種類ある。この段階の下城式甕は、やや厚めの平底口縁部に向かってすばまり気味の体部、口縁直下の一条突帯、外面の細い縦刷毛目調整等を基本的な特徴とする。宮ノ原3号、33号ピットでは、口縁部が直口で、複雑な屈曲を示さないもの（a類）と、尖り気味の口縁部が短く外反するもの（b類）、端部が平坦な口縁が一旦弱く内湾し、端部に向かって再び短かく外湾するもの（c類）の三種類がある。下志村の資料では甕の6類がこれに該当する。また雄城台遺跡27号ピット一括出土例には、下志村7類の第30図40に類似した複数刻目突帯の下城式甕が存在している。したがって下志村3式を構成する壺、甕は壺5類、壺6類と甕6類と甕7類の一部である可能性が強い。以上、下志村式の設定をふまえて次のような編年試案を提示する。



第38図 大分第一・二地域の弥生土器編年 (壺)



第39図 大分第一・二地域の弥生土器編年（壺）

大分第一・二地域の弥生土器編年

弥生土器編年II－1期（第38・39図）

下志村1式、2式は高橋の弥生土器編年II－1期に対応しつつその内容を深めるものである。下志村1式の壺は板付II式の範疇に属する好資料で、これまで大分県下で実態が知られていない段階のものである。これに伴う甕としては少なくとも甕2類を候補に挙げておきたい。下志村2式には甕3類～5類、7類～9類が伴うと考える。なぜならこれまでのところ、弥生土器編年II－2期およびこれ以降の段階の資料には、甕3類～5類、7類～9類に類似した資料は知られておらず、これらが弥生土器編年II－2期以前、すなわち下志村1・2式に限られる可能性は高いと思われるからである。したがって弥生土器編年II－1期の古段階を下志村1式に新段階を下志村2式に位置づける。これらはおおむね板付II式a～bの段階に対比できるが、典型的な板付II式の如意形口縁甕が欠落している現象は極めて興味深い。いずれにしても、大分弥生土器編年II－1期の最古段階に位置づけられる「板付I式」に対応する弥生土器の実態は未だ不明と言わざるを得ず今後の調査に期待したい。とはいっても、これまで東九州の前期弥生土器を代表する下城式はII期－2の段階のものしか知られていなかったが、下志村1式、2式によって初めてこれに先行する刷毛目を施す刻目突帯甕の実態が明らかになった意義は非常に大きい。

弥生土器編年II－2期（第38・39図）

II－2期は、前段階の削り出し突帯壺が姿を消し、代わりに頸部および胴部の各境に複数の沈線文を巡らした壺（B類）が主体となり、あわせて口縁端部を平坦に整え、口縁部からやや下位に刻み目突帯を巡らす典型的な下城式甕が出現する段階として定義づけられる。下城式甕全体のプロポーションは口縁部が直立もしくは軽く内湾気味のものが基本である。

弥生土器編年II－3期（第38・39図）

弥生前期末に比定。壺は前段階の壺A－I類の系譜を引きながらも、口縁部内面に軽い段をつけ、鋸歯文を施すもの（23、24）や、粘土帶や多条の沈線文を施すもの（28）、胴部上半を突帯・沈線・羽状・重弧文等で装飾するものがある。28は山口県の綾羅木遺跡における綾羅木3式に対応する。壺B類系譜のものとしては、胴の張りがなくなり口縁部が長く伸び、立ち上がる壺（19、20）や、頸部との境が不明瞭な球形状胴部のものになる（26）。胴・頸部との境にのみ、三角突帯や沈線をめぐらし、垂直気味の頸部と外側に大きく逆L字状に屈曲する口縁部をもつD類（21、22、27）は、新たに出現したものである。これらの底部は、前段階のものに比べて厚くなっている。下城式甕は、全体としてII－2期のものと変わらないが、a類・b類が主体でc類は少ない。突帯の位置が口縁端からやや下ってくる。厚い底部は、新たな傾向を示している。

弥生土器編年III－1期（第38・39図）

次の中期になると、壺は球形状胴部のものや口縁上部を肥厚した新式のもの、壺CやD類の系譜を引くものが現れ、下城式甕は胴部から口縁部へ外傾しながら直線的に広がるようになる。曲A地区の12層から出土した多くの弥生土器片が、このIII－1期に比定される。第18図202～204の壺はII－3期のD類壺からの系譜を引くものであろう。下城タイプの甕に混って「くの字」口縁の城ノ越式系統の甕が多く出土するようになるのも、この期の特徴である。

写 真 図 版



曲遺跡 A 地区全景図（上・下）



曲遺跡 A 地区溝 1 遺構（上）、溝 1 出土木材（下）



曲遺跡 A 地区溝及び土層（上）、円形及び土坑埋土（下）



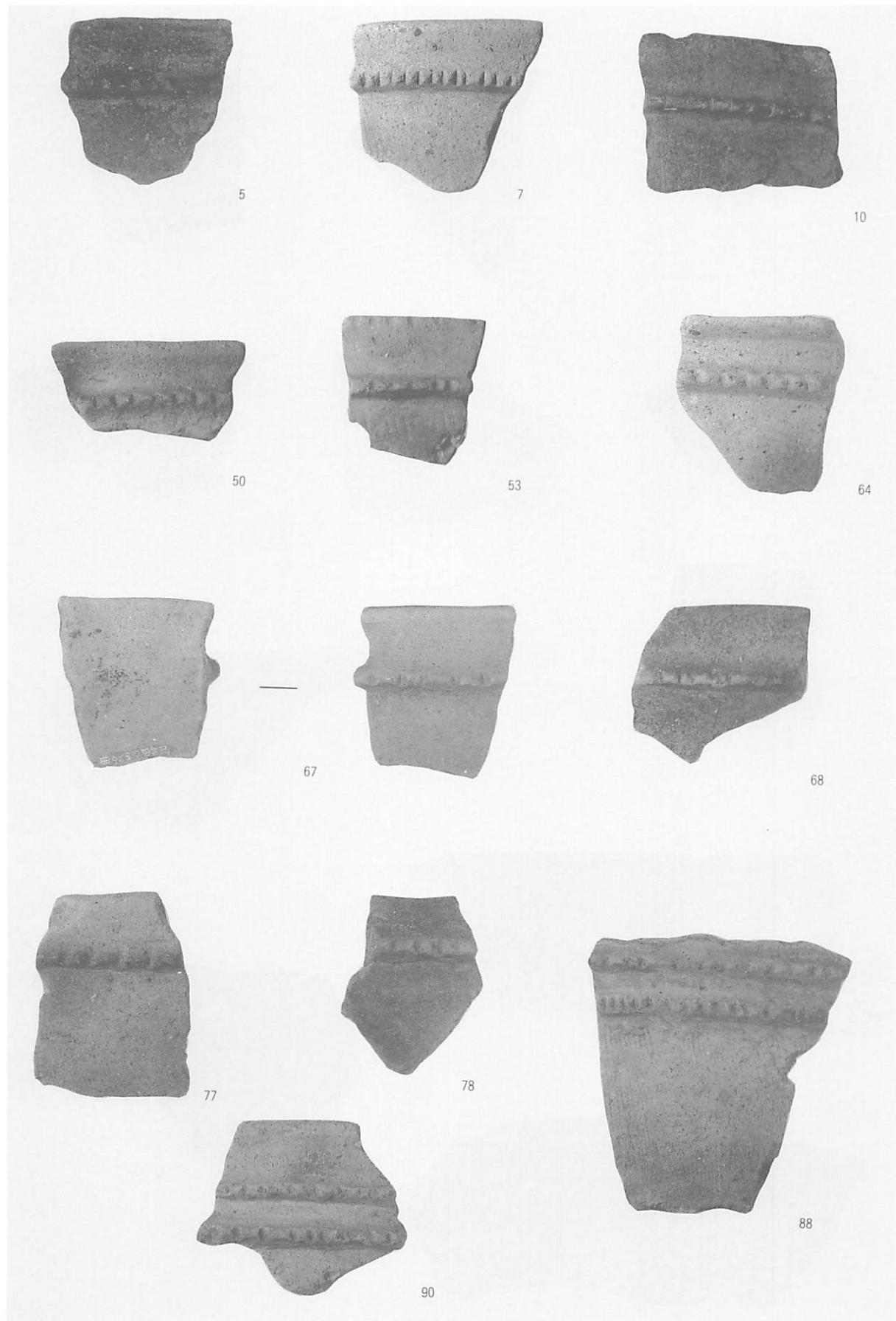
曲遺跡C地区全景



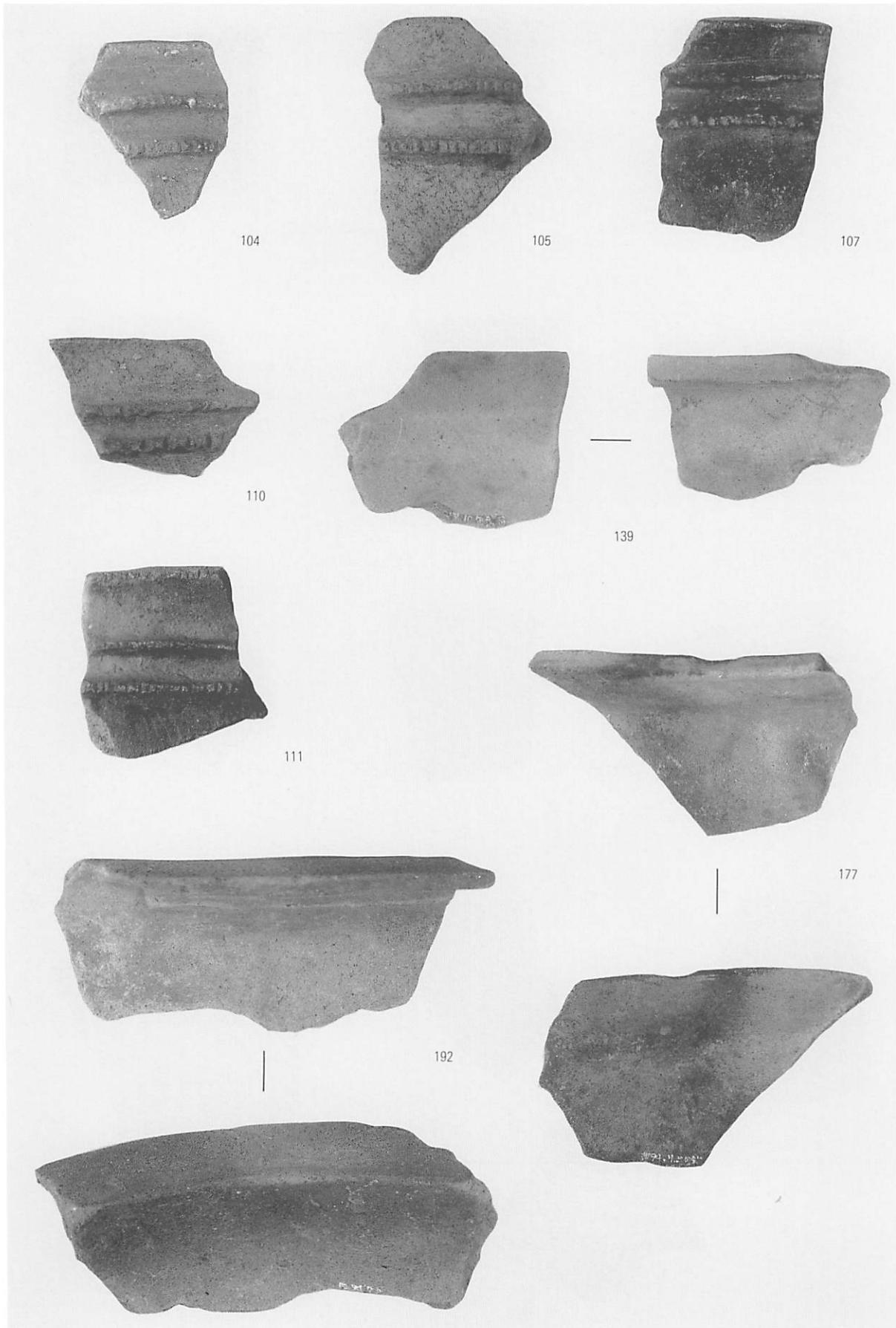
曲遺跡C地区 1号・2号溝状遺構（上）、1号溝状遺構（下）



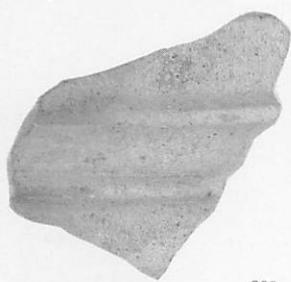
曲遺跡C地区1号溝遺物出土状況（上・下）



曲遺跡 A 地区出土遺物



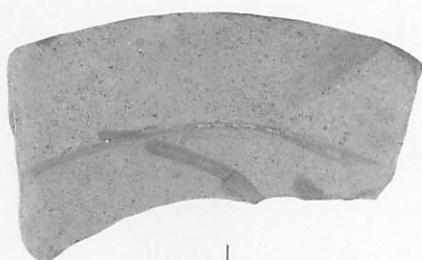
曲遺跡 A 地区出土遺物



209



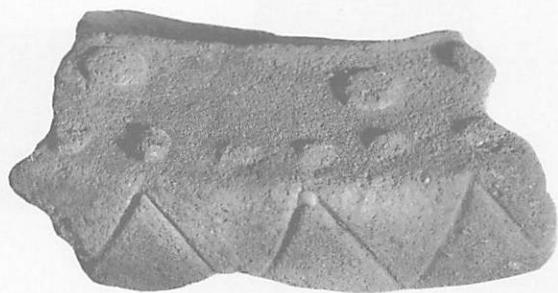
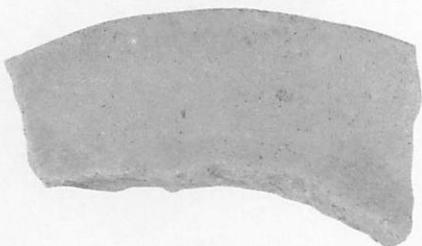
212



200



201

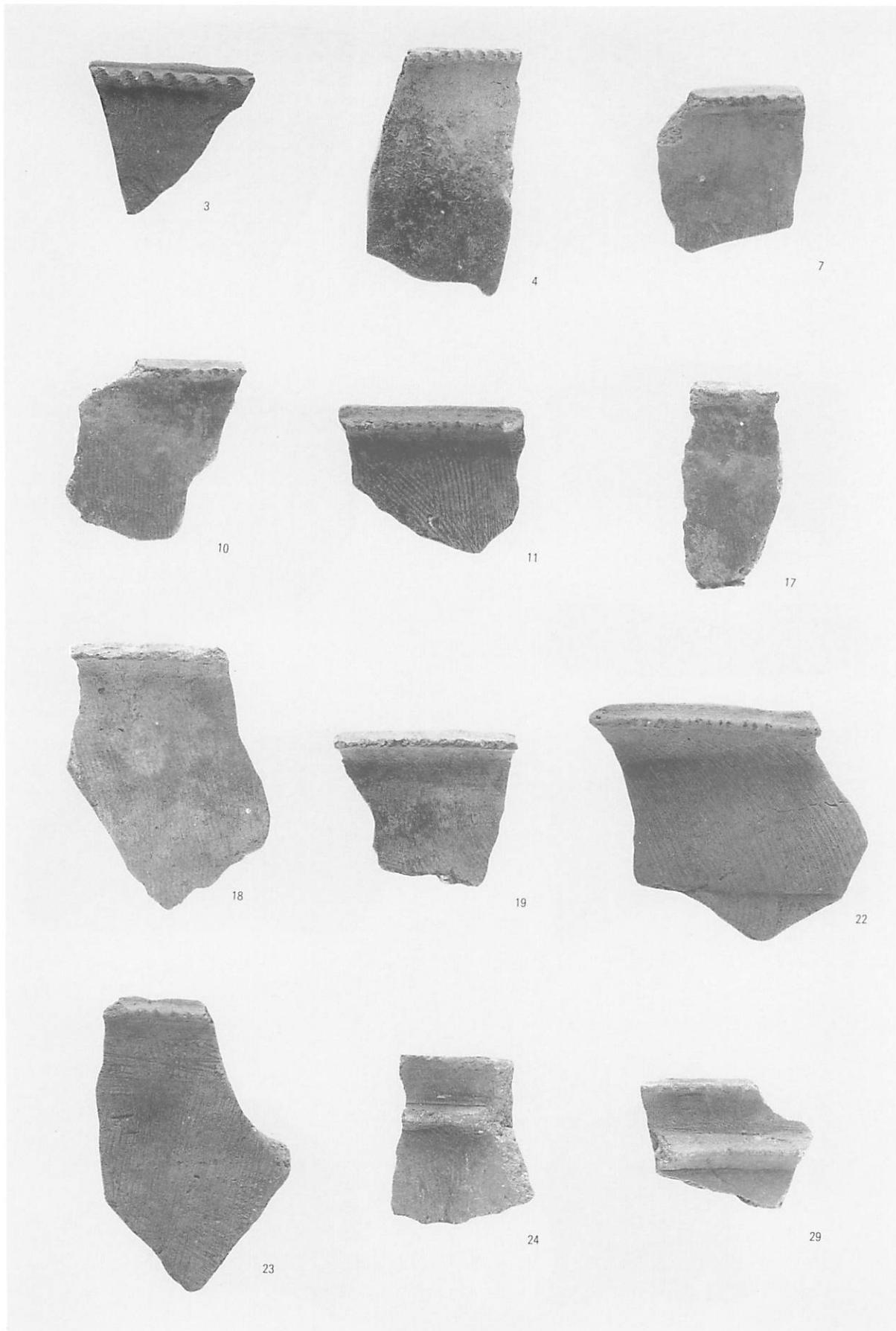


264

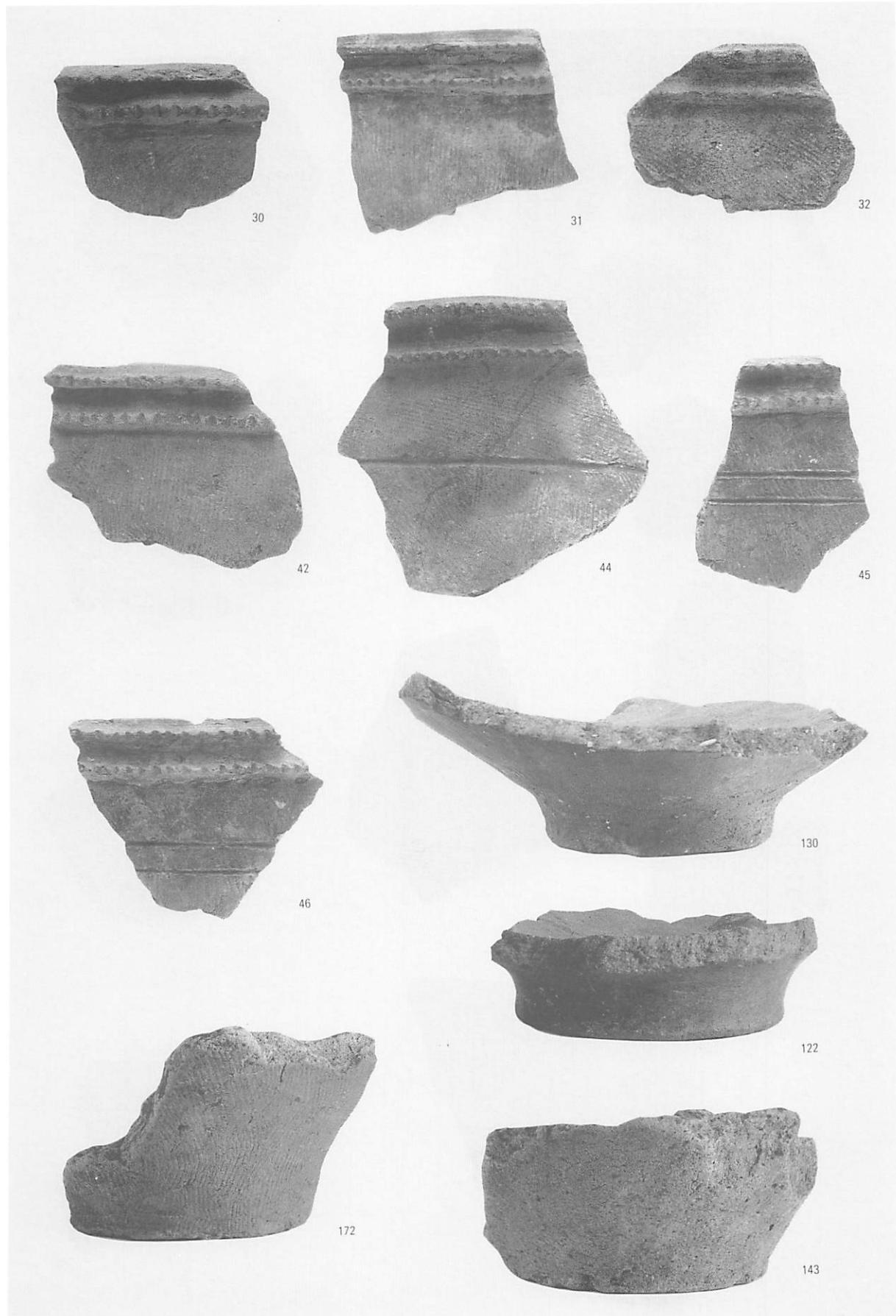


曲遺跡A地区出土遺物

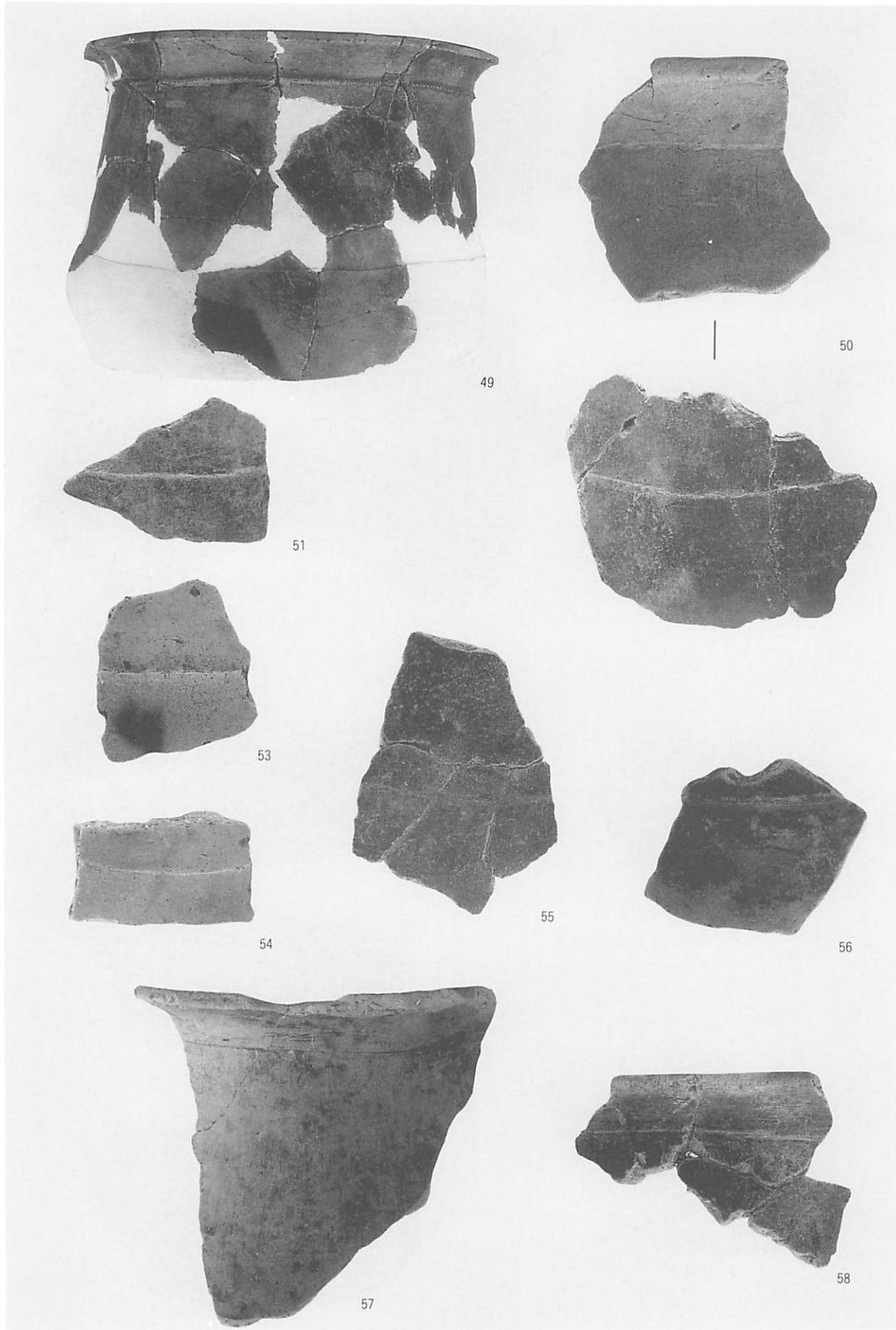
写真図版 10



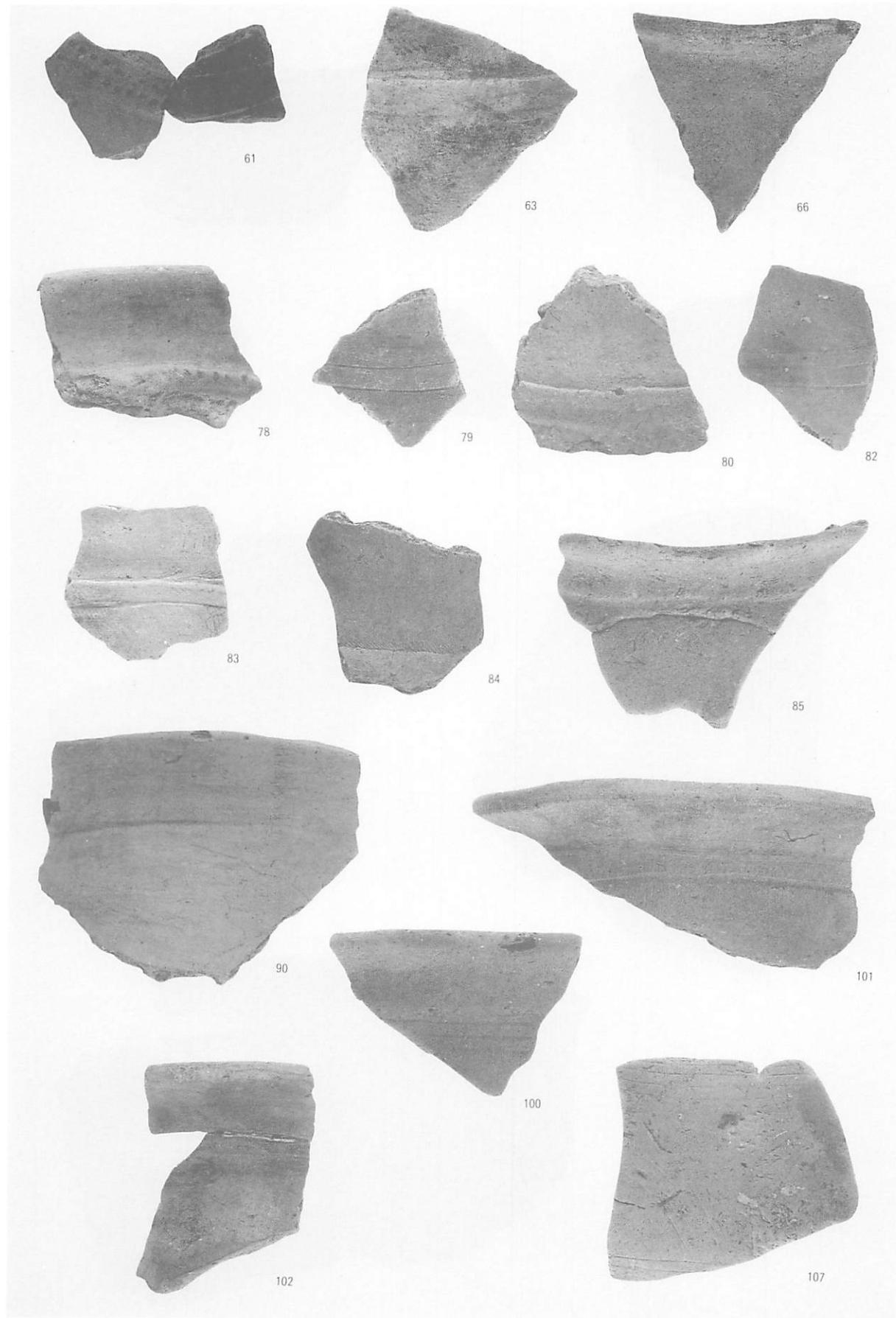
下志村遺跡出土遺物



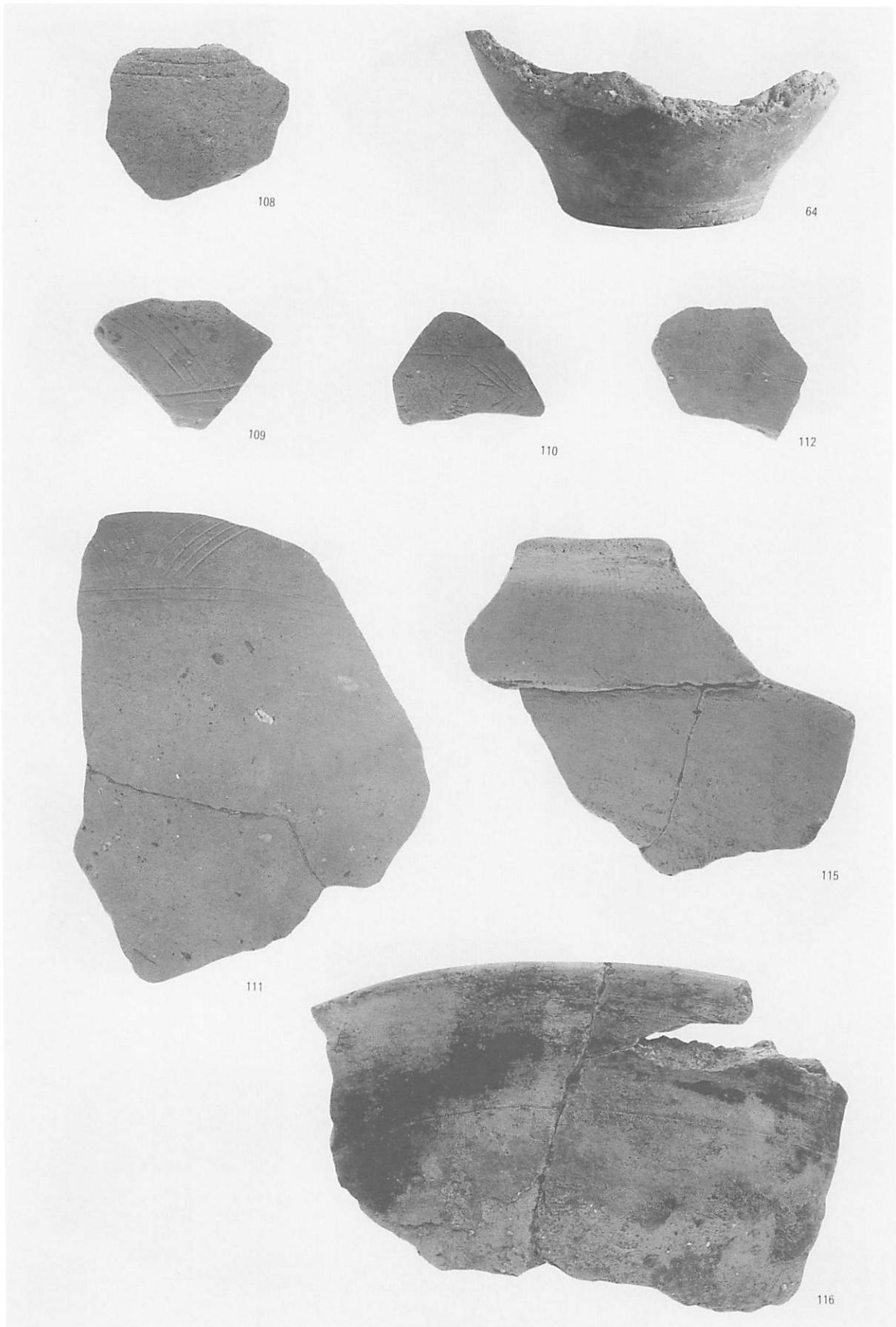
下志村遺跡出土遺物



下志村遺跡出土遺物



下志村遺跡出土遺物



下志村遺跡出土遺物

九州横断道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書

曲 遺 跡

平成 8 年 3 月 29 日

発 行 大分市教育委員会

印 刷 有限会社中央印刷